目　　次

第１章　東北大学男女共同参画委員会について
１　委員長報告……1
２　東北大学における男女共同参画推進のための行動指針……3

第２章　各ワーキンググループの活動報告
広報・シンポジウム WG……5
奨励制度 WG……6
次世代・女性研究者支援 WG……7
両立支援 WG……8
行動指針対応・報告書作成 WG……9

第３章　各部局の取組
文学研究科……11
教育学研究科……11
法学研究科……12
経済学研究科……12
理学研究科……13
医学系研究科……14
歯学研究科……15
薬学研究科……16
工学研究科……16
農学研究科……21
国際文化研究科……23
情報科学研究科……24
生命科学研究科……24
環境科学研究科……25
医工学研究科……25
教育情報学研究部・教育部……25
金属材料研究所……26
加齢医学研究所……27
流体科学研究所……27
電気通信研究所……28
多元物質科学研究所……29
災害科学国際研究所……30
東北アジア研究センター……30
病院……31
高度教養教育・学生支援機構……32
本部事務機構……33

第４章　中期目標・中期計画達成のための各部局の取組
文学研究科……35
教育学研究科……36

法学研究科……37
経済学研究科……38
理学研究科……39
医学系研究科……40
歯学研究科……41
薬学研究科……42
工学研究科……43
農学研究科……44
国際文化研究科……46
情報科学研究科……47
生命科学研究科……48
環境科学研究科……50
医工学研究科……51
教育情報学研究部・教育部 ……52
金属材料研究所……53
加齢医学研究所……54
流体科学研究所……55
電気通信研究所……56
多元物質科学研究所……57
災害科学国際研究所……58
東北アジア研究センター ……59
病院……60
高度教養教育・学生支援機構 ……61
本部事務機構……62

第５章　男女共同参画推進センターの取組
１　男女共同参画推進センターについて ……65
２　平成 27 年度活動状況……67
３　平成 27 年度活動実績一覧……79
４　平成 27 年度男女共同参画・女性研究者支援事業について ……81

第６章　各種資料
資料１　平成 27 年度東北大学男女共同参画委員会委員名簿 ……90
資料２　平成 27 年度東北大学男女共同参画委員会 委員会開催等記録 ……91
資料３　男女共同参画委員会のあゆみ……93
資料４　東北大学男女共同参画委員会報告(H14.4.16 評議会報告)に対する対応状況……98
資料５　東北大学における男女共同参画推進のための行動指針(H25.8.8 策定)に対する対応状況…102
資料６　第 12 回男女共同参画シンポジウムパンフレット……103
資料７　第 12 回男女共同参画シンポジウムでのアンケート集計結果……117
資料８　第 4 回仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業公募要項……122
資料９　第 2 回澤柳記念賞公募要領……126
資料１０　男女共同参画推進センターニュースレター……129
資料１１　平成 27 年度サイエンス・エンジェル活動報告……135
資料１２　東北大学特定基金「男女共同参画推進基金」パンフレット……141
資料１３　東北大学における在籍教員・学生の女性比率……143

第１章　平成 27 年度東北大学男女共同参画委員会について

１　委員長報告

男女共同参画委員会委員長　　植木　俊哉

東北大学は、平成 11 年 6 月の「男女共同参画社会基本法」成立と、平成 12 年 5 月の国立大学協会ワーキング・グループの報告を契機として、平成 13 年 4 月に東北大学男女共同参画委員会を設置しました。以来、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」の策定、男女共同参画にかかる研究や取組を奨励する沢柳賞の創設などによる教職員の意識の醸成、学内保育施設の設置などによる仕事と育児・介護の両立支援策の充実などを図ってまいりました。

平成 18 年度からは、男女共同参画の推進施策の充実及び、女性研究者支援のため「女性研究者育成支援推進室」を設置し、文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル事業」において採択された「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（平成 18 年から 3 年間）及び、同じく文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者養成システム改革加速」において採択された「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」（平成 21 年度から 5 年間）を実施してまいりました。事業終了後の平成 26 年度からは、大学独自の予算でこれらの支援・活動を発展的に継続しています。

また、平成 25 年 8 月には、日本初の女子学生が本学に入学してから 100 年を迎えたことを記念して「男女共同参画推進のための行動指針」を策定し、今後 10 年の本学における男女共同参画推進のための指針として 1)両立支援・環境整備、2)女性リーダー育成、3)次世代育成、4)顕彰制度、5)地域連携、6)国際化対応、7)支援推進体制を掲げました（P.3 参照）。この行動指針に基づき、平成 26 年 4 月に、これまでの女性研究者育成支援推進室を発展的に改組した「男女共同参画推進センター」を設置し、本学全体の男女共同参画活動を推進しています。

平成 27 年度はこれらの成果を踏まえ、両立支援、女性リーダー育成等を目的とした男女共同参画・女性研究者支援事業の実施や第 2 回澤柳記念賞の実施、第 12 回男女共同参画シンポジウムの開催等を行いました。

支援事業においては、国や地方自治体等の審議会委員、学会の理事等の要職に就き研究時間の確保が困難な女性研究者を支援する制度を新設し、世界で活躍できる女性リーダーの育成にも力を注ぎました。

また、昨年、アカデミアにおける男女共同参画において多大な貢献をされた方々を選考し顕彰するために設立した澤柳記念賞においては、学外からの応募も増えるなど、着実にその認知度が高まっています。この活動の輪が広がることで、研究者が性別や育児・介護等様々なライフイベントの有無に関わらず活躍できる社会になることを期待しています。

さらに、今年で 12 回目となる男女共同参画シンポジウムは、「科学とジェンダー」をテ

ーマとし、今年度新設された医学部開設百周年記念ホール（星陵オーディトリアム）で開催しました。第一線で活躍してきた女性研究者の講演時間を例年よりも長くとることで、一つ一つの問題について見識を深めやすく、非常に有意義なシンポジウムになったと考えています。

そして、このような活動を支え、女性研究者のスキルアップやキャリアアップ、研究と育児の両立、次世代支援や学内保育環境の充実、伝統の継承等を行うことを目的に、東北大学特定基金の一つとして、男女共同参画推進基金を設立しました。この基金の新設によって、支援する側も支援される側も一丸となって男女共同参画の推進に取り組み、長期に渡ってその流れを継続していきたいと考えます。

以上の詳細については、ぜひ本報告書をご覧いただき、本学における男女共同参画の取組や女性研究者の現状、そして男女共同参画推進センターの活動について忌憚なきご意見をいただければ幸いです。

２　男女共同参画推進のための行動指針

平成２５年８月８日

東北大学は、1913 年に日本で初めて女子学生３名の入学を許可した。その３名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。

そして、2001 年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」（2002 年）のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。

また、2003 年度に 21 世紀 COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008 年度にはその成果を発展させたグローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。

自然科学系分野では、2006 年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009 年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。

このように、男女共同参画の包括的推進（理論整備・活動支援）において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学 100 年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後 10 年間の行動指針として以下の７項目を策定する。

【両立支援・環境整備】

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

【女性リーダー育成】

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

【次世代育成】

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル（SA）活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

【顕彰制度】

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

【地域連携】
東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

【国際化対応】
ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

【支援推進体制】
上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事（若しくは副学長）と総長特別補佐（男女共同参画担当）を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

第２章　各ワーキンググループの活動報告

広報・シンポジウム WG

広報・シンポジウム WG は、委員として植木俊哉（委員長）、朝倉京子（WG 座長）、大隅典子（総長特別補佐）、永次史（多元研）、沼崎一郎（文学）、寺田眞浩（理学）、佐藤克美（教育情報）、柳田賢二（東北アジア）、斎藤仁（総務）の男６名、女３名の計９名で構成されている。本年度は第 12 回東北大学男女共同参画シンポジウムに関する活動を行った。

第 12 回東北大学男女共同参画シンポジウムは「科学とジェンダー」とのテーマで、平成 27 年 11 月 21 日（土）13:00～17:00 に、星陵キャンパス医学部開設百周年記念ホール（星陵オーディトリアム）にて開催した。

シンポジウムでははじめに、里見進総長による開会の挨拶の後、ご来賓としてお招きした文部科学省研究振興局　小松弥生氏よりご挨拶を頂いた。第一部では、第 2 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）授賞式を執り行った。引き続き、A 賞（本賞）を受賞された日本大学薬学部・薬学研究科上席研究員の大坪久子氏、B 賞（奨励賞）を受賞された新大 Wits 代表、新潟大学男女共同参画推進室准教授の中野享香氏による受賞講演が行われた。さらに、男女共同参画委員会副委員長の田中真美氏により、東北大学における男女共同参画の取り組みについて説明があった。

第二部では「科学とジェンダー」という本シンポジウムのテーマに沿い、2 本の特別講演を行った。まず、三重大学名誉教授の小川眞里子氏により、「近代科学の歴史とジェンダー」というテーマで講演が行われた。次に、明治学院大学教授の柘植あづみ氏により、「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」というテーマで講演が行われた。その後、男女共同参画担当総長特別補佐の大隅典子氏の司会で総合討論を行い、講演者とフロアとの活発な討議が行われた。

最後に、男女共同参画委員会委員長の植木俊哉氏による講評と閉会の挨拶により、シンポジウムは盛会のうちに終了した。シンポジウムの合間には、研究スキルアップ経費の支援を受けた女性研究者によるポスター発表も行われた。

三連休中にも関わらず、シンポジウムの参加者は 113 名を数えた。シンポジウム会場で回収したアンケートでは、すべてのプログラムに対し、概ね 8 割以上の方が「良かった」と回答する好結果が得られた。次年度以降の課題としては、①シンポジウム開催日時は、できれば連休をはずした日程にすること、②シンポジウムに男性の登壇者を準備すること、③男女共同参画に関心がない/批判的な人々にも聞いていただけるシンポジウムの企画とすること、が挙げられる。

広報・シンポジウム WG 開催状況

平成 27 年 7 月 3 日（金）11:00～12:00、片平キャンパス　本部棟3階　第二会議室にて、第一回目の広報・シンポジウム WG 会議を開催した。議題は、「平成 27 年度男女共同参画シンポジウムの開催について」であった。その後、必要に応じて、適宜メールにて会議を開催した。

広報・シンポジウム WG 座長
朝倉　京子

奨励制度 WG

奨励制度 WG は、石綿はる美（法学）、斎藤浩海（工学）、藤田恭子（国文）、福田光則（生命科学）、井川俊太郎（加齢研）、田中真美（医工学）の 6 名から構成されている。今年度は、昨年設立された男女共同参画に関する顕彰制度、澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）と仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業（旧ローズ支援事業）に関わる活動を行っている。

活動状況

１．第4回仙台Iゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業について、6月15日まで公募を行ったところ、16件の応募があり、6月18日にWGで審査を行った。審査の観点には、申請書の内容（申請理由、学会規模、指導教員の推薦理由等）、当該国際学会への参加の意義、過去の海外での国際学会における発表回数、等を申請書から精査した。その結果、以下の２名に対し援助を行うこととした。なお、辞退が発生した場合に備え３名の補欠支援者も決定しておいた。7月16日の本委員会へ報告を行い了承された。

・理学研究科（多元物質科学研究所）菅井　祥加

・文学研究科　栗田　陽子

2. 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）

①「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）」について、年齢制限や賞の概要等の変更について昨年度の委員会で承認されており、要項、申請書などを作成した。ポスター・要項は資料 9 であり、7 月 31 日まで公募を実施した。

②5 月 19 日の本委員会にて選考委員について本委員会委員長一任となり、以下のとおり決定した。

・植木　俊哉　（選考委員会委員長、男女共同参画委員会委員長）
・田中　真美　（医工学研究科教授・奨励制度WG座長）
・藤田　恭子　（国際文化研究科教授、奨励制度WG）
・福田　光則　（生命科学研究科教授・奨励制度WG）
・佐竹　保子　（文学研究科教授、学内外部構成員）
・山谷　知行　（国際高等研究教育院長・農学研究科教授・外部構成員）
・宗片　恵美子（特定非営利活動法人イコールネット仙台・学外構成員）
・齋藤　仁　（総務企画部長・男女共同参画委員会）

③8 月 24 日に選考委員会を開いた。応募はA賞（本賞）：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞 5 件、B賞（奨励賞）：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞 5 件であった。審査表、応募書類等を事前に送付し検討してきていただき、当日は応募のあったものについて慎重に選考をした。A 賞・B 賞ともに 1 件ずつ選出した。A賞とB賞について、9 月 22 日（火）にHP等で結果を公表することとし、プレスリリース文は事務局が担当することとなった。また、奨励賞の概要や位置付け等について、選考会議で議論になった点を基に、WG で今後検討を重ねることとした。

④選考結果

A賞:澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
課題名　日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動
受賞者　日本大学薬学部・薬学研究所　上席研究員　大坪　久子氏

B賞:澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞
課題名　“新大Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育
受賞者　新大Wits(しんだいうぃっつ)
※新大Witsは、サイエンス・セミナー(出前授業)を行っている新潟大学大学院生の愛称

⑤10 月22 日に行なわれた本委員会にて②選考委員、③選考の経緯、及び④選考結果について報告し、承認された。また、応募されたものの中で優れた内容で落選したものについてのキャリーオーバー制についてWGで検討したい旨も報告され承認された。

奨励制度WG座長
田中　真美

次世代・女性研究者支援WG

次世代・女性研究者支援ワーキンググループは、米永一郎（金研)、田中真美（医工学)、大隅典子（医学)、工藤与志文（教育)、寺田眞浩（理学)、高橋信行（薬学)、保坂雅子（TUMUG）の計 7 名から構成されている。平成 25 年度までの「杜の都女性研究者ハードリング支援事業」と「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」を統合し、昨年度より、男女共同参画・女性研究者支援事業として下記の各種支援プログラムとサイエンス・エンジェル活動の実施を行った。各種制度の概略を下表に示す。

＜平成 27 年募集実施プログラム＞

	プログラム名	内容	対象部局	対象者	募集締切
1	**研究支援要員**	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助(上限 200 万円)	自然科学系部局	自然科学系の女性教員	平成 27 年 2 月 16 日
2	**(新)研究支援要員(シェア型)**	採択者同士で事務補佐員1名(総務企画部総務課より派遣)をシェア			
3	**ベビーシッター利用料等補助**	研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等の補助(上限 10 万円)	全部局	教員、技術職員、PD、博士学生	
4	**スタートアップ研究費**	一年目 100 万円、二年目 50 万円の研究費を支援	全部局	新規採用の女性教員(助教以上)	平成 27 年 7 月 10 日

5	**研究スキルアップ経費**	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外：上限 40 万円、国内：上限 15 万円	全部局	女性教員（准教授、講師、助教）	平成 27 年 4 月 15 日（第一回） 10 月中旬（第二回）
6	**サイエンス・エンジェル**	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科	自然科学系の大学院女子学生	平成 27 年 3 月 20 日（一次締切） 5 月 8 日（二次締切）
7	**女子学生海外渡航支援**	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援（上限 15 万円）	全研究科	大学院女子学生	平成 27 年 5～6 月頃

本年度の利用者数は、研究支援要員制度 10 名、同（シェア型）6 名、ベビーシッター利用料等補助制度 39 名、スタートアップ研究費支援制度（1 年目）10 名、同（2 年目）3 名、研究スキルアップ経費補助制度（国外）24 名、同（国内）10 名、サイエンス・エンジェル制度 90 名であった。また、女子学生海外渡航支援事業では 2 名が採択された。

なお、これら支援制度の実施・運用を通じて、研究者の任用形態の多様化、支援対象分野など各種制度の利用資格に関する検討、さらに限られた予算を最も必要とする対象へより的確に支援するための工夫が必要であることが判明した。今後、それらを考慮した制度変更を進める予定である。

次世代・女性研究者支援ＷＧ座長
米永　一郎

両立支援 WG

両立支援 WG は、田中真美（医工学）、工藤与志文（教育）、磯貝惠美子（農学）、藤田恭子（国文）、坂田邦子（情報）、上高原理暢（環境）、有働恵子（災害）、小宮敦樹（流体）、佐藤静香（学相）の 9 名から構成されている。今年度は、第三保育施設の設置について地下鉄東西線「青葉山駅」付近に作られることが決定した。今後、その希望規模詳細などについて WG にて検討していく。

両立支援ＷＧ座長
田中　真美

行動指針対応・報告書作成 WG

1 活動報告

行動指針対応・報告書作成WGは、米永一郎（副委員長、金研）・坂本修一（通研）・宮崎真理子（病院）・若林緑（経済）・菅原俊二（歯学）・齋藤仁（総務企画部）の計 6 名で構成されており、年次報告書の作成、行動指針対応のための取組と課題の検討などを任務とする。本男女共同参画委員会報告書は、平成 28 年 2 月末までに提出された各WG・各部局の原稿をとりまとめ、3 月において決定した。本年度（平成 27 年度）は、平成 25 年 8 月の女子学生百周年記念シンポジウムでの男女共同参画の推進に係る行動計画に基づいて平成 26 年 4 月に策定された男女共同参画委員会−男女共同参画推進センター（TUMUG）の体制の下での第 2 年度として、男女共同参画の推進、研究と育児の両立支援・女性研究者支援の各種制度が実施された。

2 これまでの東北大学男女共同参画委員会活動

東北大学男女共同参画委員会は平成 13 年に発足し、翌 14 年の第 1 回男女共同参画シンポジウムにおける「男女共同参画推進のための東北大学宣言」にしたがって、学内外における男女共同参画の推進にかかる取組に優れた成果を挙げてきた。また、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル事業」での「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（平成 18〜20 年度）、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」事業（現：文部科学省科学技術人材育成補助事業）での「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」（平成 21〜25 年度）が実施され、高い評価結果を得た。また、本学独自に「女性研究者ハードリング支援事業」（平成 21〜25 年度）を実施した。また 21 世紀 COE「男女共同参画社会の法と政策」（平成 15〜19 年度）、GCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」（平成 20〜24 年度）により男女共同参画推進政策や社会制度に関する学術研究が展開された。平成 25 年 8 月の女子学生入学百周年記念シンポジウムで総長より本学における男女共同参画推進のために、(1)両立支援・環境整備、(2)女性リーダー育成、(3)次世代育成、(4)顕彰制度、(5)地域連携、(6)国際化対応、(7)支援推進体制の行動指針が発表された。その指針に基づいて、これまでの女性研究者育成支援推進室が昨年度（平成 26 年 4 月）男女共同参画推進センター(TUMUG)に発展改組され、男女共同参画委員会での審議・決定事項に基づいて、各種の支援活動を中核的に行うこととなった。

3 本年度の活動概要

男女共同参画委員会各 WG の主導の下、各種の活動が展開された。平成 27 年 11 月 21 日第 12 回男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」が開催され、男女共同参画意識の広報と醸成および現状の課題認識に関する情報共有が行われた(詳細は広報・シンポジウム WG 活動報告を参照)。同シンポジウムにおいて、アカデミアでの男女共同参画への貢献を顕彰する第 2 回澤柳記念賞政太郎東北大学男女共同参画・参画奨励賞の授与が行われた(奨励制度 WG 活動報告)。両立支援・環境整備に向けて、川内地区けやき保育園、星陵地区星の子保育園に続く、第三保育施設の青葉山地下鉄駅付近での設置が決定された(両立支援WG活動報告)。女性研究者支援では、研究支援要員、研究支援要員(シェア型)、ベビーシッター利用料等補助(男性も利用可)、スタートアップ研究費、研究スキルアップ経費が、次世代支援では、サイエンス・エンジェルの採用と女子学生海外渡航支援が行われた（利用者等は次世代・女性研究者支援 WG 活動報告）。

男女共同参画推進センター(TUMUG)は上記 WG 活動について支援を行い、特に 90 名のサイエンス・エンジェルがオープンキャンパス、片平まつり等各種のイベント、高校生向けセミナー等で活動するための中核機能を発揮した。また、両立支援、女性リーダー育成のための TUMUG Forum や TUMUG Café、沢柳フェローランチミーティングの企画・実施を行った。また定期的なニュースレター発行、リーフレット作成を進めた(詳細は男女共同参画推進センターの取組を参照)。またセンターは今年度より復活したジェ

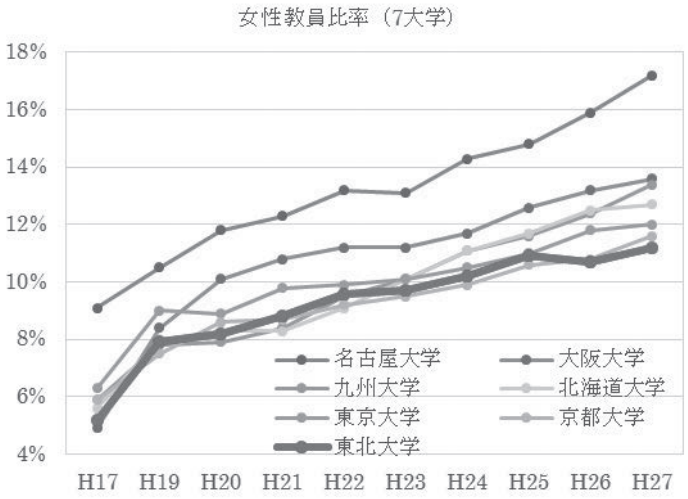
ンダー関連学として、全学教育科目「ジェンダーと人間社会」の実施に参画した。

全学的な取組とともに、各部局・キャンパスでもそれぞれの特性を踏まえての、男女共同参画意識醸成や女性支援に向けた独自の活動が展開されるようになった。例えば、工学系研究科の工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)を中心とするセミナー開催、女性研究者出張経費支援、託児室・静養室の設置等、医学系研究科の医学系女子大学院生奨励賞(愛称:七星(ななせ)賞)の創設、星陵地区男女共同参画ネットワーク(SeiGN)構築、農学研究科、歯学研究科、大学病院、多元物質科学研究所等での男女共同参画セミナー開催、情報窓口の設置などである。

このように、男女共同参画推進と女性研究者支援に向けて、全学・部局で広範な活動が展開されるようになった。その中で、男女共同参画の更なる推進のために、本年度、東北大学特定基金として「男女共同参画推進基金」が設立された。

4 課題と対策

本学では、これまでの男女共同参画に係る歴史やその意識醸成活動、制度改革などを背景に、教職員のジェンダー・バランスの改善、すなわち女性教員数の増加を、ポジティブ・アクションによる女性教員の採用や一律の数値目標の設定ではなく、総合大学としての分野毎の特徴を活かした各部局の自主的取組として進めきた。そのような中で、右図に示すような衝撃的な現実が突きつけられることとなった。本学における女性教員比率は平成17年の5.2%から、20年8.2%、23年9.7%、27年11.2%と着実に増加してきた。しかしながら、図中の平成 27年における各大学の女性教員比率と較べると、本学の比率は最低である。本学での女性教員数の増加よりも他の全ての大学で急速に女性教員数が増加した結果である。この現状に関する全学的な認識の共有の下で、本学における女性教員採用や転出に係る問題点の有無を含めた抽出と、他大学が女性教員数を増加させるために採用等においてどのような取組を行ったかなどその要因を精査し、女性教員数の増加に向けたより積極的な対策を検討する必要に迫られている。それを新中期計画においてどのように実施するかが喫緊の課題である。上記の現実について、平成13年度に始まった本学の男女共同参画活動は来年度で16年目になるが、それが全学的にどのように認識されているか、また必要とされることは何かなど、男女共同参画に関し全学的な意識調査を行うことも有効であろう。我が国ではじめて女子学生を入学させたという歴史の下、再び先駆となるべく課題を克服ことが求められている。



国立大学協会による男女共同参画推進の実施に関する調査より

行動指針対応・報告書作成WG座長
米永　一郎

第３章　各部局の取組

文学研究科

文学研究科男女共同参画推進ワーキング・グループは、沼崎一郎教授（座長）・土屋育子准教授・浅岡善治准教授の３名の委員（女性１人、男性２人）によって構成されており、全学の男女共同参画委員である沼崎一郎教授が WG の座長を兼任し、活動している。

開催状況

会議については、男女共同参画推進ワーキング・グループの委員間で必要に応じて、メール等で行う形をとっている。

活動内容

１　教職員や学生に対する男女共同参画活動への呼びかけ

男女共同参画シンポジウムへの参加、各種男女共同参画推進事業への応募等については、チラシ等を各専攻分野研究室に配布するとともに、主任教授へメール等で適宜呼びかけを行い、教員および大学院生・学生への周知を図っている。

２　大学院専攻分野・学部専修における学生の男女構成比の均等化へ向けて

文学研究科・文学部には２５の専攻分野・専修があるが、所属学生の男女構成比に違いが見られ、一部の専攻分野・専修では男性あるいは女性に大きく偏る傾向が続いている。今後どのように対応すべきか、引き続き検討を進めている。

３　東北大学における男女共同参画推進のための行動指針に関する検討

文学研究科として、どのような具体策を採ることができるか、引き続き検討を進めている。

教育学研究科

教育学研究科男女共同参画推進委員会は、委員として工藤与志文教授（委員長）、深谷優子准教授、熊谷龍一准教授、佐藤広美総務係長の男２名、女２名の計４名で構成されている。全学の男女共同参画委員である工藤与志文教授は次世代・女性研究者支援ＷＧメンバーとして、女性研究者支援体制の構築等に関わる活動を行った。

委員会開催状況

会議については必要に応じて，メール等で行う形をとっている。

活動内容

１　教授会やメール等を通じて，TUMUG 支援事業を初めとした男女共同参画に関する支援事業に関する情報提供を行うとともに，男女共同参画シンポジウム等への参加を呼びかけた。

２　男女共同参画に関するＦＤを計画したが，今年度は諸般の事情で延期となった。来年度の実施に向けて，現在検討中である。

法学研究科

法学研究科における「東北大学における男女共同参画推進のためのワーキンググループ」は、平田研究科長をはじめ男性 4 名、女性 1 名の計 5 名からなり、研究科における男女共同参画の状況及び男女共同参画推進の方策について検討することを任務とする。平成 20 年 6 月から平成 25 年 3 月まで、法学研究科を中心にグローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が実施され、ジェンダー平等問題に取り組んできた。同プログラムは終了したものの、そこで培った知見を、研究・教育活動に活かすこと、また教職員及び学生が、学内外で男女共同参画活動へ参加することを積極的に推奨することを目的として活動している。

また、法科大学院等で「ジェンダーと法」などの科目を開講しており、今後も引き続き男女共同参画の推進に向けて積極的に取り組むことを目指している。

開催状況

ワーキンググループの会合自体は開催されていないが、男女共同参画推進のための目標の作成の際など、必要に応じてメール等で審議・意見交換を行っている。

１．ジェンダー学関連科目の開講

法科大学院・公共政策大学院「ジェンダーと法」（演習）：糠塚康江教授（前期）

経済学研究科

経済学研究科男女共同参画ワーキンググループ委員会は、委員として増田（委員長)、若林、大瀬戸の男２名、女１名の計３名で構成されている。本年度に関する以下を報告する.

委員会など

随時メール等で審議を行うとともに、必要に応じてミーティングを開催するという機動的な体制で動いている。また、学内及び研究科内各種委員会や、研究科内外のイベント等とも連携し、高い成果をあげられるよう工夫している。

活動記録

男女共同参画活動参画の推進のために経済学研究科では以下の活動をおこなってきた。

１ 各種の機関で専門委員を務めている。主なものは以下の通り。

① 石垣政裕講師:

2015 年 06 月　親の学びのプログラム出前講座講師

2015 年 07 月　宮城県生涯学習課親の学びのプログラム研修会アドバイザー

2015 年 08 月　子育てサポーター養成講座（仙台）「父親の地域活動」講師
2015 年 10 月　子育てサポーターリーダー養成講座（仙台）「早寝早起き朝ごはん」講師
2015 年 10 月　第 47 回日本 PTA 東北ブロック研究大会第 1 分科会基調講演「PTA はもっとおもしろくなる」講師
2015 年 10 月　家庭教育支援チーム研修会　講師　「現代の子どもの理解」
2015 年 11 月　韓国釜山広域市養雲高等学校特別講演会　講師「現代日本の子どもたちの理解とつなぐ活動」
2015 年 12 月　お父さんたちのネットワーク情報交換会

② 若林緑准教授:
「少子高齢化における家庭及び家庭を取り巻く社会に関する経済分析」研究会アドバイザー（独立行政法人経済産業研究所）
基盤研究 B「出産・育児が女性の就業に与える影響：性別選好・介護・家族関係の観点から」に関する分担研究者

③ 吉田浩教授:
１）昨年度から引き続き宮城県男女共同参画審議会委員（副会長）を務めている
２）学内の第１セメスターオムニバス講義「ジェンダーと人間」に２回出講
　学外でも放送大学宮城学習センターで専門科目：社会と産業「男女共同参画社会の経済　科学」(2015.12) を担当し教育面からの男女共同参画の推進に努めている
３）さらに　２０１６年１月の東北大学スマートエイジングカレッジ東京においても、「男女共同参画による少子・高齢時代の経済・経営戦略」と題したレクチャーを提供し、社会・実業界における男女共同参画の推進のため、研究成果を提供している

④ 鈴木賢一准教授:
　今年度の学内保育園（川内けやき保育園）保護者会においては，鈴木准教授が会長をつとめている

２ 研究科内において、育児と仕事の両立支援策を継続的かつ積極的に進めてきた。現在、事務室職員（1 名）が平成 27 年 5 月より短時間勤務制度を利用している。また、 子の看護のための休暇（特別休暇）の制度（小学生未満の子の看護・病院受診や予防接種、 健康診断等受けさせる際に取得できる）も、平成 27 年度に 5 名（事務室 3 名、助手 1 名、准教授 1 名）に利用されている。

理学研究科

理学研究科男女共同参画推進委員会は、平成 14 年 9 月に設置された「男女共同参画推進 WG」を前身とし、平成 17 年 4 月から理学研究科の正式な委員会として発足し、組織的な取り組みを行っている。委員長は全学の「男女共同参画委員会」委員を兼ね、各委員は専攻教員各 2 名と事務・技術職員から成る 15 名（男 9 名、女 6 名：教員 10 名、事務職員 3 名、技術職員 2 名）のメンバーと、委員会内に設置した WG（セミナー企画、広報、女性院生支援、環境改善検討）の実務を

サポートするオブザーバー2 名（男 1 名、女 1 名：教員 1 名、技術職員 1 名）から構成されている。

開催状況

平成 27 年

9 月 2 日　第一回理学研究科・男女共同参画推進委員会を開催し、今年度の活動方針を決めるとともに、それに基づき、役割分担（副委員長、セミナー企画 WG、広報 WG、女性院生支援 WG、環境改善検討 WG）と各責任者を決めた。第 12 回男女共同参画シンポジウム 11 月 21 日(土)の案内と参加の依頼を併せて行った。

活動報告

1　東北大学男女共同参画推進センターによりオープンキャンパスの企画の一つとして主催された下記の催しの広報ならびに運営を支援した。

・ 平成 27 年 7 月 29 日（水）12:00～13:30　30 日（木）12:00～13:30
オープンキャンパス for 女子高校生 2015
参加者：女子高校生 約 100 名（29 日）、約 70 名（30 日）、若手女性研究者 6 名、サイエンス・エンジェル参加者 45 名、センター室員 3 名
理学研究科・合同 A 棟 2 階 第 3 共通講義室（204 号室、205 号室）にて、前半は女子高校生向けに本学の教員ならびに大学院生（サイエンス・エンジェル）が研究を紹介。第二部では昼食を取りながら女子高校生とサイエンス・エンジェルとのグループトークによる進路相談会と若手女性研究者によるキャリア・研究紹介を実施した。

2　女性休憩室利用ガイダンス開催

理学合同 A 棟 3 階 303 号室において女性休憩室利用説明会および利用者登録を実施した。

・ 第 1 回：平成 27 年 4 月 23 日（木）12:20-13:00　参加者 36 名。
・ 第 2 回：平成 27 年 4 月 28 日（火）12:20-13:00　参加者 45 名。
・ 第 3 回：平成 27 年 10 月 27 日（火）12:20-13:00　参加者 5 名。
・ 第 4 回：平成 27 年 10 月 30 日（金）12:20-13:00　参加者 17 名。
※現登録者数 109 名（留学生・外国人研究員 11 名を含む）

3　女性休憩室内に授乳・搾乳スペースを設置

・ 産後に復職した教職員等が授乳・搾乳をする際のプライバシーを守るスペースを確保するため、女性休憩室内に新たにカーテンを設置した。

医学系研究科

医学系研究科男女共同参画推進委員会は、委員として朝倉京子（委員長）、大隅典子（男女共同参画担当総長特別補佐）、青木洋子、石井恵子、伊藤潔、北本哲之、木村芳孝、佐藤敬浩（総務課長）の男 4 名、女 4 名の計 8 名で構成されている。

委員会開催状況

平成 27 年

7 月 3 日　平成 27 年度第一回医学系研究科男女共同参画推進委員会を開催し、東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞の設置について審議した。

7 月 4 日～　女子大学院生奨励賞の設置について教授会に諮るため、適宜、メールにて会議を行った。

平成 28 年

2 月（予定）　平成 27 年度第二回医学系研究科男女共同参画推進委員会を開催し、東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞の第一回受賞者を選考する。同時に、女子大学院生奨励賞の愛称を決定する。

活動内容

1　東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞の設置

医学部創立百周年事業として、東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞に関する活動を行った。平成 27 年 9 月の医学部創立百周年記念式典で賞の設置について公表できるよう準備を進め、11 月には第一回受賞の候補者の募集を開始した。第一回受賞者については、男女共同参画推進委員会で選考し、平成 28 年 3 月の医学系研究科教授会にて決定する。平成 28 年 5 月の艮陵同窓会総会で、受賞式及び受賞記念講演を執り行う予定である。

2　星陵地区男女共同参画ネットワークとの共催でのセミナー開催

平成 28 年 3 月頃に、星陵地区男女共同参画ネットワークと共催で「女性教員と学ぼう」というテーマでのセミナーの開催を予定している。

歯学研究科

歯学研究科・歯学部男女共同参画ワーキング・グループは、委員として菅原俊二（委員長）と歯学研究科、病院および附属歯科技工士学校所属の教職員、男３名、女３名の計６名で構成されている。本年度は下記の活動を行った。

委員会開催状況

平成 27 年

5 月 28 日　星陵キャンパスにある部局（医学系研究科、歯学研究科、病院、加齢医学研究所、メディカルメガバンク）から成る星陵地区男女共同参画ネットワーク会議（第１回）を開催し、今年度の各部局の活動予定、ネットワーク共同のイベントなどについて話し合い、意見交換を行った。

平成 28 年

1 月 25 日　歯学研究科・歯学部男女共同参画ワーキング・グループ全体会議を行い、今年度の活動の総括、種々の意見交換を行い、男性研究者の体験や考えも聞きたいとの要望から、２月に講演会実施することとした。

活動内容

1　歯学研究科・歯学部男女共同参画ワーキング・グループ講演会の開催

平成 28 年 2 月 26 日に歯学研究科大会議室で開催する。内容は、男性研究者１名と女性研究者１名に講演をいただき、総合討論をする予定である。男性研究者からは、研究と家庭の両立を目指した実体験を、女性研究者からは、性別関係なく、アカデミアで仕事をしていきたいという若い世代にメッセージを送る内容を講演していただく予定である。星陵地区の教職員男女を問わず参加を呼び掛ける。

薬学研究科

薬学研究科では、5 名の教員により男女共同参画推進委員会を運営し、うち１名が全学の男女共同参画委員を兼任している。本研究科における男女共同参画に関する活動は、本委員会が中心となり事務職員の協力のもと実施している。なお、薬学研究科の教授1名は、男女共同参画推進センターの協力教員も兼任している。

委員会開催状況

会議は定期教員会議の場あるいはメールを用いて、不定期に意見交換・情報提供を行う形をとっている。

活動内容

以下の取組を行うよう努めている。

1 次世代の女性研究者・女性リーダー育成のため、日本薬学会や薬学部同窓会と連携しながら、薬学分野で活躍している女性研究者を招聘し、学生向けの講演会を行う。

2 学生を対象としたサイエンス・エンジェル制度の説明会を開催し、学部生・大学院生の男女共同参画活動に対する意識の向上を図る。また、研究科内で現役サイエンス・エンジェルの講演会等を開催し、学生・教職員との交流を推進する。

上記活動以外では、全学の男女共同参画委員会や男女共同参画推進センターの活動について教員会議で報告するとともに、メールで教職員へ周知した。

工学研究科

工学研究科等男女共同参画委員会では、平成２７年度は以下のように会議を開催し、また男女共同参画委員会と工学部入試検討委員会の共同によるミニフォーラム「工学にかける私の夢」（東北大学工学部オープンキャンパス）を実施した。

開催状況

平成 27 年

4月16日　昨年度創設した工学系ベビーシッター利用料等補助制度の実施要領を見直しして、変更案を承認した。例年オープンキャンパスで開催している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を今年度も開催することにし、講演者とクロストークの担当者の選定および広報等について審議した。青葉記念会館宿泊施設跡地を静養室・託児室として利用することについて意見交換した。

6月 2日　工学系ベビーシッター利用料等補助制度の実施要領について再度の見直しをし、変更案を承認した。またオープンキャンパスで開催するミニフォーラムの講演者、講演題目、講演時間とクロストーク担当者を決定した。青葉記念会館宿泊施設跡地を利用した静養室・託児室の整備状況及び託児室の利用方法について審議し、承認した。

11月24日　工学系女性研究者の研究活動を支援するためのSTEP-ALICEプログラムについて、申請内容を審議し、支援額を決定した。オープンキャンパスで開催したミニフォーラムについて実施報告を行い、昨年度から改善された点と今後の課題について意見交換した。青葉記念会館に設置された静養室・託児室の利用開始状況について報告した。

１．女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」の開催

東北大学工学研究科等男女共同参画委員会の主催により、例年、オープンキャンパス特別企画として女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を開催している。この企画は多くの女子学生に工学の魅力を伝え、進路選択の参考にしてもらうことを目的としている。本年も７月２９日、３０日の両日ともに９：３０～１０：４５の時間帯で、中央棟２階の大会議室を会場に開催し、２９日は１００名、３０日は８５名と昨年度の２倍近い女子学生・保護者らが聴講した。

フォーラムでは工学研究科等男女共同参画委員長による趣旨説明と工学系女性研究者育成支援推進室（ALicE）による女子学生・女性研究者支援制度の紹介に引き続き、工学部の女性教員および企業で活躍する女性卒業生による講演と、修士１～２年の女子大学院生が１名ずつ登壇し、学科選択の理由や現在の研究内容、東北大工学部に入学して成長したことなどを伝える『クロストーク』が行われた。

参加した女子学生・保護者に実施したアンケートからは「大学・企業で活躍する素晴らしいロールモデルに出会えました」、「進路に迷っていることが悪いことじゃないと知ってホッとしました」、「女子学生に優しい大学という印象が確かなものに変わりました」、「理系というと男子しかいなくて女子は過ごしづらいイメージがあったが、あまり重く考えなくていいのかなと思えました」といった感想が寄せられた。

なお講演者・講演タイトルについては以下の通りである。

7月29日(水)：参加者 100名

1. 研究で見る工学部と理学部の違い～薬の副作用を見つける半導体チップとは
　　平野　愛弓　准教授(電気情報物理工学科/医工学研究科)
2. 「リケジョ」のライフスタイル
　　西畑　ひとみ　氏(新日鐵住金株式会社　技術開発本部　先端技術研究所)
3. 各学科の女子学生とのクロストーク
　　井澤博子, 鈴木理恵, 横溝まどな, 青木あすか, 野村怜佳

7月30日(木): 参加者 85名

1. 復興まちづくりとデザイン
   土岐 文乃 助教(建築・社会環境工学科)
2. 工学を志す女性へ～入社9年目働き方一例
   鈴木 美紀子 氏(トヨタ自動車株式会社 計測技術部 設備計画室)
3. 各学科の女子学生とのクロストーク
   井澤博子, 熊谷彰惠, 横溝まどな, 青木あすか, 野村怜佳

２０１５年　女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」

2. 工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)の活動

工学系男女共同参画委員会のもとに、平成 25 年度より情報科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、災害科学国際研究所、未来技術共同研究センターおよび環境保全センターと連携して東北大学工学系研究科等女性研究者育成支援推進室(ALicE)を設置しており、①女子学生・女性研究者の育成・支援、②工学分野における男女共同参画意識の醸成、③女子学生が将来継続的に働く意識を高めるためのグランドデザインの策定の 3 項目を主目的として、各種活動を継続的に行っている。具体的には I. 研究活動の支援、II. 女性研究者の見える化・工学魅力の発信、III 情報共有による問題解決、IV. ALicE の活動紹介について取り組んでいる。それぞれの項目について、平成 27年度の活動内容を以下に示す。

I. 研究活動の支援

- 女性研究者の研究に係る出張経費を助成する『STEP-ALICE(Supporting Travel Expenses Program to Activate Lady's International Collaboration in Engineering)プログラム』を平成 26 年度から実施している. 平成 27 年度前期は申請なし(全学支援制度に 4 名採択), 後期は 3 名へ助成を行った。
- 育児期の女性教員や社会貢献を行う女性教員の研究との両立支援のため, 事務補佐員の派遣を行っている。平成 27 年度は 4 名の女性教員を支援している。
- 工学系研究者(男女問わず)を対象とした、育児と研究の両立支援のための『工学系ベビーシッター利用料等補助』を平成 26 年度から実施している. H27 年度は 2 名(男性 1 名, 女性 1 名)を採択した(他, 全学支援制度に 9 名採択)。
- 青葉記念会館の宿泊室を託児室・静養室(男女)へと改装し、託児室は教職員・学生の研究教育・就学のために必要な一時保育スペースや、学会保育等の場所として、静養室は体調不良時や授乳・搾乳やおむつ替えなどに利用できるように整備した。

託児室：室内およびトイレ・洗面台・シャワー / 利用の様子

女性静養室

II. 女性研究者の見える化・工学魅力の発信

・ 工学系女性教員や女子学生を対象とした交流やスキルアップ・キャリア育成のためのセミナー・交流会を開催している。本年度は下記の通り開催した（共催含む）。

① 軽金属学会第 128 回春季大会『女性会員の会』with ALicE（平成 26 年 5 月 16 日）

② 女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」（工学研究科等男女共同参画委員会が主催，平成 26 年 7 月 29，30 日）

③ 女性研究者による研究発表「TUMUG Forum」（東北大学男女共同参画推進センターが主催，平成 26 年 11 月 24 日

④ 進路ガイダンス『先輩が後輩に送る講演会』OG 講演会（機械系産学連携推進室が主催，平成 27 年 11 月 27 日）

・ Web「宮城の新聞」とのコラボレーション連載として、下記 2 件の記事を掲載した。
  ① 【東北大学 ALicE×宮城の新聞 ＃012】工学部女子、気になる本音を語り合う
  ② 【東北大学 ALicE×宮城の新聞 ＃013】活躍する女性の先輩の姿伝え、女子高校生の進路選択を後押し／東北大学工学部

・ オープンキャンパスに合わせて女子受験者向けの「宮城の新聞・号外」の紙媒体を発行し、ミニフォーラム来場者へ配布した。また 2 月には「宮城の新聞」紙媒体 50,000 部を発行し、全仙台市立中学校の生徒と仙台市内の高校 16 校の生徒全員に配布予定である。

宮城の新聞 Web（左）と紙媒体・号外（中央）， 2016 年春号（右・2 月配布予定）

・ 平成 27 年 7 月 19 日（日）、サイエンス・エンジェル，カタールサイエンスキャンパスと共同で、小中学生向け科学体験プログラム「ちくちく縫って LED が光るかわいい小物作り」を開催した。女子小中学生やその保護者を中心に 158 名が参加した。

科学体験プログラム「ちくちく縫って LED が光るかわいい小物作り」

III. 情報共有による問題解決

- 女子女性学生・女性女子研究者や育児期の研究者へ Web やメーリングリストを通じ、保育情報や各種支援プログラムについて、日本語および英語での情報提供・共有を行っている。
- 女子学生・女性研究者に関する問題対応への助言を行う「おはなし窓口」にて、各種相談・問い合わせをメールや電話、対面にて受け付けている(H27 年度:相談件数:10 件)。

IV. ALicE の活動紹介

- ALicE の活動周知や次世代への工学の魅力発信のため, ALicE の Web において各種イベント報告や支援制度利用者の報告、女子学生・女性研究者の受賞等の活躍を紹介している。
- 工学部入学者ガイダンスにおいて新入生全員に ALicE の活動紹介リーフレットおよび『宮城の新聞』紙媒体を配布した。
- 平成 27 年 6 月 22 日の工学部教授会において, 田中真美 ALicE 室長が ALicE の活動および工学系の男女共同参画について報告を行った。
- 平成 28 年度より, 工学研究科等新規採用等教職員合同研修において「男女共同参画について」と題した講義を実施する予定である。

農学研究科

農学研究科男女共同参画委員会は、委員として磯貝（委員長)、冬木、高橋（正)、伊藤（絹)、伊東、堀、星野(10 月まで)、日出間(11 月から)、井上、千葉、の男４名、女５名の計９名で構成されている。本年度は行動指針に沿った取り組みを継続するとともに講演会の実施等に関する活動を行った。

男女共同参画委員会開催状況　（メール会議）

平成 27 年

4 月 28 日	男女共同参画委員会主催の経費要求書
9 月 27－30 日	（１）男女共同参画委員会主催の講演会に関して
	（２）女性教員増加のための方策について
10 月 18－22 日	9 月 27－30 日の会議結果の報告と検討
12 月 4－8 日	男女共同参画に関する農学研究科の取り組みに関して
12 月 11 日	男女共同参画委員会企画講演会(女性研究者の光と影-STAP 細胞事件、毎日新聞　須田桃子氏)

平成 28 年

1 月 11－15 日	農学研究科としての部局内取り組みに関する会議
1 月 21 日	平成 27 年活動報告書と中期目標・中期計画について

活動内容

１　行動指針に沿った取り組みの継続

全学の行動指針にそって、農学部としての姿勢や方向性（部局内指針）の確認を行った。特に本年度においては追加・修正等はなく、活動を継続するものとした。東北大学として

の考え方や東北大学全体の試みなどの紹介し、組織としてのビジョンを共有するため、FDでの男女共同参画に関する講演の要望を提出した。それに基づいて現在の問題点や今後の課題を考える機会とし、コース等での話し合いが行われた。農学研究科の行動指針にそった、平成25年度に計画していた独自の取り組みを実行した。

2　講演会の実施

昨年度に引き続き、男女共同参画委員会での申請した予算が認められ、男女参画委員会主催の講演会を開催した。また、2 月 1 日に男女共同参画担当総長特別補佐である大隅教授を講師に招きFDを行った。

3　職員や学生への情報窓口を運用

全学のメンター制度を参考にした情報窓口を事務部に設置した。男女共同参画取り組みに関する紹介ポスターを作成し、広報に努めた。

4　両立支援のための環境整備

平成 28 年度の青葉山移転に伴う環境整備について保育園設置を全学男女共同参画委員会にて要求した。

5　女性技術職員の会の取り組み

女性技術職員の会にて研修として、他大学および東北大学における男女共同参画に関する講演を企画し、平成28年3月7日に研修会を行う。

その他特記事項

1　女性教員の採用が少なく、改善の必要がある。次年度はそうした意識啓発が実際に女性教員の採用に結びつくよう具体的な対策が必要である。東北大学では女性研究者の育成支援を積極的に推進していることを強調して公募要領に記載している。

2　研究科独自の取り組みと意識改革が必要である。

3　農学研究科では、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」による「持続可能な農林水産業構築のための海外派遣支援」事業に取り組み、若手研究者を積極的に海外に派遣しているが、このプログラムの実質的リーダーは女性教員が担っている。他にも、外部資金の獲得など、農学研究科では女性研究者が研究活動の中心になる事例が数多く現われている。

4　保育園の関係(女川、川渡では保育園の確保が難しい)のため転職せざるを得ないケースがあった。ある時期までは仙台という方式も選べるようにしていくことも考慮すべきことである。

5　技術職員において女性の占める割合が高く、男女共同参画について意識が高い。働きやすい環境づくりなどに積極的に取り組んでいる。

国際文化研究科

国際文化研究科男女共同参画推進委員会は、委員長・副委員長を含めて 4 名（教授 2 名・准教授 2 名／女性 3 名・男性 1 名）で構成され、研究科の諸委員会・窓口と連携して男女共同参画に関連する教育・研究環境の整備に努めた。本委員会の開催状況ならびに本委員会の活動を含む国際文化研究科の活動内容は下記の通りである。

開催状況

平成 27 年

4 月 24 日　平成 26 年度からの引き継ぎ事項について
　　平成 27 年度の活動計画について

以後は、随時メール会議を開催した。

活動内容

1　男女共同参画推進委員会専用のメールアドレスを研究科内に周知することで、より相談しやすい環境を整えている。メールアドレスの管理は委員長が行っている。
2　研究科主催の新入生オリエンテーションにおいて男女共同参画にかかわる大学内および研究科内の状況を紹介し、男女共同参画に対する理解を呼びかけた。また、男女共同参画推進委員会が相談窓口の機能を併せ持っていることをも広報した。
3　平成 23 年度に設置した女性職員用休憩室（兼授乳室、必要な場合は学生の使用も可）に必要な備品等を購入し、ひきつづき整備に努めた。
4　国際交流・学生支援室にハラスメントならびに男女共同参画関係の書籍等を新たに追加購入し、従来備え付けられていたものと合わせて、学生に利用を呼びかけている。

今後の取り組み

1　女性職員用休憩室（授乳等の必要のある女子学生も使用可）の一層の整備を図り、女性職員や女子学生がより安心して研究科内での勤務や研究活動に従事できる環境の整備に取り組む。
2　今年度は FD で研究倫理を取り上げる必要があったが、昨年までのような男女共同参画に関わる FD の開催も検討し、教職員・学生のさらなる意識向上を図る。
3　引き続き研究科の新入生オリエンテーション等において男女共同参画にかかわる研究科内の状況と活動を紹介し、男女共同参画に対する理解を呼びかける。
4　男女共同参画やハラスメントに関連する学生用書籍購入等の措置を続けるとともに、男女共同参画に関する研究科内の環境改善や意識向上のためのさらなる施策を検討する。
5　男女共同参画シンポジウムを初めとする全学的な活動に積極的に参加する。

情報科学研究科

大学院情報科学研究科では、尾畑伸明（情報科学研究科長補佐）を委員長とした研究科運営検討委員会において全学の中期目標である男女職員数の格差是正のための制度に対して検討を行っている。また、具体的な事案の検討のため、徳山豪研究科長の他に教員４名と事務長の計６名で構成されている男女共同参画ワーキンググループが設置されている。

開催状況

運営検討委員会は、月 1 回程度を基本として開催している。平成 27 年度は、ワーキンググループは開催されていない。

活動内容

1. 教員公募時に当該研究領域における女性教員のサーベイを行うこととし、教員選考委員会においてその実施状況と女性応募者の有無などについての報告を義務付けている。また、女性教員の比率向上に関する施策の検討を引き続き行っており、外部の識者を交えた運営協議会や外部評価委員会から意見聴取を行い、対策を協議している。本年度は助教１名の新規採用を行った。
2. 運営検討委員会では、男女共同参画に向けて研究科の環境整備の検討を行っている。
3. サイエンス・エンジェル、澤柳記念賞への応募の呼びかけや男女共同参画関連の講演会やシンポジウムへの出席など、学生や教員への男女共同参画意識の啓蒙に努めている。
4. 平成 26 年度末に女子休憩室の見直しを行い、場所移動、レイアウト等の設備整備、電子錠を設置するなどのセキュリティー強化を行った。その結果、平成 27 年度４月から 12 月までに、登録者数が 14 人、延べ 283 回の利用があった。

生命科学研究科

生命科学研究科男女共同参画委員会は、教員 3 名（うち 1 名は女性教員）で構成されている。常時メールなどにて必要事項の連絡を行っている。今年度は以下の活動を行った。

活動内容

１　平成２７年４月６日(月):生命科学研究科新入生オリエンテーションにおいて、本学及び研究科の男女共同参画への取組などについて説明すると共に、サイエンス・エンジェルへの参加を呼びかけた。

２　平成２７年５月２３日(土):仙台市において開催された生命科学研究科の入試説明会・オープンラボにおいて、研究科の男女共同参画への取組などについて説明を行った。

３　サイエンス・エンジェル制度への積極的な応募及び第１２回東北大学男女共同参画シンポジウムへの参加を呼びかけた。

環境科学研究科

環境科学研究科では、2 つの専攻および事務部から選出された委員で男女共同参画 WG を構成し、研究科内の男女共同参画意識の向上に取り組んでいる。

開催状況

工学研究科記載の通り。

活動内容

1　工学研究科等男女共同参画委員会を通した活動
研究科単独ではなく、工学研究科等男女共同参画委員会を通した活動を行っている。

2　男女共同参画に関するシンポジウム等の案内を行った。

医工学研究科

1　医工学研究科では、平成25年度より設立された工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHｅ等と共同で「東北大学　工学系研究科　女性研究者　育成支援推進室　ALicE」にて活動を行っている。今年度は女性教員がオープンキャンパス時に東北大学工学部オープンキャンパス特別企画「女子学生のためのミニフォーラム『工学にかける私の夢』」にて講演を行った。その他、ALicEに所属の部局と共同での工学系男女共同参画員会を開催し種々の問題について検討対応等をしている。詳細は工学研究科の欄を参照されたい。

2　独立行政法人科学技術振興機構（JST）主催のサイエンスリーダーズキャンプ「革新的な未来を拓く医工連携人材育成の現場」が8月17日から20日の3泊4日で、講義、実習、研究室訪問、研究施設見学、交流会・懇親会、グループ討論・総括が行われており、女性研究者育成支援の取り組みについて女性教員が講義で発表するだけでなく、最終日には4日間の活動で体得したこと、境界領域研究・次世代の研究開発人材育成・女子の理工系進路選択支援について知り得たこと、今後の理数教育に活かせる知見、方策などについて発表していただいている。このように、参加理科系高校教員への男女共同参画の意識啓発を積極的に行っている。

教育情報学研究部・教育部

教育情報学研究部では、男女共同参画委員会は教授会構成員の内 1 名から構成されている。本研究部は現在(平成 27 年度)教授、准教授、助教合わせて 9 名の小規模な独立大学院であり、女性教員は創立当時から採用されていなかったが、平成 27 年度に女性教員を 1 名採用した（助教)。次年度以降も教員の新採用の機会があれば、女性教員の採用を念頭に人選に取り組んでいきたい。

研究部教授会において男女共同参画委員は以下のような活動を行った。

1 男女共同参画委員会の活動、および他部局の取り組みを報告した。
2 男女共同参画に関連するシンポジウムなどの活動への参加を促した。

また、本年度は部局主催のシンポジウムにおいて、女性研究者 2 名から講演をいただいた。
現在、教育情報学教育部は現在(平成 27 年度)修士課程 25 名、博士課程 26 名が在籍しており、そのうち各々38%、70%が女子学生である。そこで、女性教員を学生相談担当とし、女子学生が気軽に相談できるような体制を充実させた。
教育情報学はまだ新しい領域であるため、教育情報学教育部では長期的な視野に立ち、女性研究者、女性専門家の育成に努めている。

金属材料研究所

金属材料研究所男女共同参画ワーキンググループは、委員として教員が淡路智(委員長)、梅津理恵、佐藤豊人、出浦桃子、技術職員が大村和世、井元勇吉、事務職員が百束広道、小谷美智、米永一郎（オブザーバー）の男性 5 名、女性 4 名の計 9 名で構成されている。本年度はメールを使用した相談とセミナー活動を行った。

活動状況

平成 27 年

① 女性休憩室について、所の予算措置に基づく定期清掃と男女共同参画 WG の女性委員が中心となった利用と整頓状況の毎月の確認。
② TUGUM 支援事業への応募や男女共同参画シンポジウムへの参加等について、メールやチラシによる案内に努めた。

平成 28 年

③ 2 月 3 日(水)、WG 委員の梅津理恵准教授による TUGUMU Café 『研究と育児の「心地よい共存」を目指して』への参加の呼びかけ。上記 Café へ本所より 3 名参加した。

金属材料研究所における現状

金属材料研究所では、今年度新規採用教員 17 名中 3 名が女性であり、ここ数年の女性教員数の斬減傾向に歯止めがかかり、平成 24 年の女性教員数に復した。特に、新規採用者では 18%に達し、女性の活用が進んできたといえるが、今後とも、女性教員数の増加に努めるために、本所の教員にかかる任期制も含め、新規教員、および優れた教員の上級職への応募に関する勧誘のための抜本的な制度改革、環境整備が必要と思われる。

次年度計画

次年度に向けて、外部有識者による講演会・セミナー・所内交流会を実施する。また、子育て中の男女教職員を支援するための情報交換会、セミナー等を開催する。さらに、学会等を通じてより効果的な女子学生増加活動を継続する。

加齢医学研究所

現状では、加齢医学研究所に男女共同参画の WG や委員会などはないが、総務・人事委員会が男女共同参画について所掌しており、男女共同参画委員会の委員が 1 名いる。また、この委員は平成 26 年 8 月に発足した星陵地区男女共同参画ネットワークの委員もかねている。全体として、以下のような活動を 行った。

1 男女共同参画員会の活動の報告を主にメールで行った。
2 男女共同参画員会主催の各シンポジウムへの参加を促す呼びかけを行った。
3 星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に参加し、立場、境遇等に類似点の多い部局の取組を参考に改善を図った。

今後の取組
平成 26 年度の新規採用者の女性比率は 18%と元に戻った。また、加齢医学研究所で受け入れている、平成 26 年度の博士後期課程の大学院生の女子大学院生の比率は 24%、 博士前期課程の大学院生の女性大学院生の比率は 40%となっており、多くの女子大学院生に対して研究指導が行われている。星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に出席することによって、 各部局における現状と課題に対する対応策、すなわち最も身近な事例を参考にして、改善を図っていく。次年度以降の教員の採用の際に、男女比率の改善を目指して努力する。教職員及び学生の意識改革を進め、長期的な視野に立ち、現在受け入れている女子大学院生、女性研究者を育成していく。

流体科学研究所

流体科学研究所男女共同参画ワーキンググループは、3 名の教授会構成員（男性 2 名、女性 1 名）で構成されている。流体科学研究所は構成分野が主として工学研究科機械系の協力講座となっており、女子学生、女性研究者の非常に少ない研究分野ながらも、男女共同参画意識向上に向けて、以下の取り組みを継続的に行ってきている。

委員会開催状況

平成 27 年度の委員会は、主としてメール審議形式で行ってきた。男女共同参画に関する情報等の展開・伝達は教授会で案内し、かつ総務係より所内宛一斉メール送信で行ってきた。

活動内容

1　職場環境改善に関する活動

育児等の理由がある教員（男女問わず）の研究活動をサポートするため、技術補佐員支援制度を設けている。本年度は 1 件の申請があり、これを採用して 1 名の技術補佐員を雇用し、育児中の女性教員の支援を行った。また、女性教職員にとって快適な職場環境を維持するため、これまで手狭で少なかった女子トイレを改修し、広くて快適なトイレを設置した。

2　男女共同参画に関する活動

流体科学研究所の新規教員公募時には、「なお、東北大学は、男女共同参画を積極的に推

進している。子育て支援の詳細等、男女共同参画の取組については下記ＵＲＬを参照のこと。」の文言を公募要領入れ、男女共同参画を強く推進していることを広く案内してきた。平成 27 年度ではテニュアトラック外国人准教授の公募時にこれに相当する文言を追記し、公募を行ってきた。

また、流体科学研究所は任期制を取り入れているが、男女を問わず、育児休業等を取得した場合はそれを考慮して任期を通常より延長できるようにしている。合わせて、研究所のホームページ内に「女子学生の方へ　女性科学者として生きる」というページを設け、実際に研究者として活動している教職員の声を掲載し、当該分野における女子学生の育成活動を行ってきた。

電気通信研究所

電気通信研究所　男女共同参画検討 WG は、総務担当副所長、総務委員会幹事（准教授）、事務長、総務係員で構成され、男女共同参画にかかる諸活動を所内の関係する委員会と連携して行っている。

取り組み状況

平成 27 年

4 月	東北大男女共同参画・女性研究者支援事業研究スタートアップ研究費の応募の呼びかけを対象となる研究者に行った。
5 月	東北大男女共同参画・女性研究者支援事業仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の応募の呼びかけを所内全構成員に行った。
11 月	第 12 回東北大学男女共同参画シンポジウムへの参加呼びかけを行った。最終的に所内から 2 名が参加した。

平成 28 年

2 月	平成 27 年度男女共同参画委員会報告書の報告のために、今年度の活動内容について総括した。

電気通信研究所における現状

電気通信研究所における女性教員は依然として低い状況であるが、平成 25 年度に策定した部局ビジョンに従い自主財源による女性教員特別枠を新設し、女性助教の平成 26 年度末の転出に際し、平成 27 年度に新たに女性助教を採用するなど該当枠での女性教員任用を維持している。また、女性研究者に向けた研究環境支援も行い、所内への啓蒙活動も積極的に進めるなど、成果をあげつつある状況である。

現在女性教員はこの 1 名のみであり、女性構成員比率は 1.58 %（1 月 1 日現在）と依然として低い状態にあるが、生体情報や医工学に関連した研究分野など、女子学生が比較的多い研究分野を中心に、オープンキャンパスや研究所一般公開などの機会をとらえ、女子学生が研究者の道に積極的に進めるような働きかけを強めていく等、男女共同参画への取り組みを進めていく。実際に平成 27 年 7 月に行われたオープンキャンパスでは、学部生 3 名、博士前期課程学生 3 名の女子学生ボランティアが参加し、女子学生のロールモデルを高校生に紹介しており、このような取り組みを継続して実施していく。

多元物質科学研究所

平成 27 年度の多元物質科学研究所男女共同参画委員会は、永次　史　教授（委員長）、埜上　洋教授、高岡　毅　講師、宇井美穂子　助教、相馬　出　技術職員、南 裕 子　総務係主任を構成員とし、下記のように活動した。全学の男女共同参画委員会の審議事項、シンポジウムなどについては、教授会において報告し、必要に応じメールなどで周知した。

本年度の取り組み

１.研究所の男女共同参画の Web サイト（URL：http://www.tagen.tohoku.ac.jp/danjyo/ ）を随時更新した。

２．2015 年 11 月 21 日（土）日に行われた第１2 回東北大学男女共同参画シンポジウム　科学とジェンダーに出席した。多元研からは所長をはじめ、４人の女性教員が参加した。

３．科研棟Ｓ棟女性休憩室および反応研棟の女性休憩室について議論した。科研棟の女性休憩室がかび臭いとのことから清掃をお願いした。また反応研棟の女性休憩室は隣が実験室であり不都合が生じたことから、別の場所へと引っ越しを行った。

４．１２月に多元研男女共同参画委員会を開催した。そこで、今年度の男女共同参画委員会の報告を行った。さらに今後の多元研における男女共同参画の取り組みについて議論した。

5. 多元研における女性教員の比率はここ数年、1～3%という非常に低い状態であることから、今回、女性研究者採用を加速するにはとのようなシステムづくりが必要であるかについてのセミナーを開催することとした。開催概要は下記のとおりである。

（開催概要）

開催日時：平成２８年２月２３日（火）１５時より
開催場所：南総合研究棟２　大会議室

（第１部）講演会　（１時間程度）
講師：森　郁恵　教授　（名古屋大学大学院 理学研究科 生命理学専攻 ）
「前例をつくり、道をつくる」

（第２部）パネルディスカッション　～女性教員採用に向けたシステムづくり～
パネリスト：　森　郁恵　　教授（名古屋大学大学院 理学研究科）
　　大隅　典子　　教授（東北大学医学系研究科）
　　杉本　亜砂子　教授（東北大学生命科学研究科）

コーディネーター：村松 淳司　教授　（東北大学多元研　研究所長）

災害科学国際研究所

災害科学国際研究所では、以前より、工学研究科、医工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHe と共同で設立した「東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE」の枠組みで男女共同参画に関する活動を行ってきた。今年度はこの枠組みで行われている工学研究科等男女共同参画委員会が 3 回開催された。また、所内には男性教員 1 名､女性教員 1 名の計 2 名で構成された男女共同参画 WG が設置されており、この WG が以下のように開催された。

災害科学国際研究所において人事採用を行うのは今年度が 4 年目であるが、昨年度に引き続き積極的に女性教員の拡充を目指した採用方針をとっている。これを反映して、全体の女性構成員比率（助手・助教含む）も平成 25 年度 13.4%、平成 26 年度 14.9%、平成 27 年度 15.9%と上昇している。

男女共同参画 WG 開催状況

平成 27 年

11 月 17 日　男女共同参画 WG の活動方針について審議した。

活動内容

1　全学および工学研究科等男女共同参画委員会の報告および周知

今年度全学で 4 回、工学研究科で 3 回開催された男女共同参画委員会の報告・審議事項について、所内の WG において共有した。また、全学および工学研究科等男女共同参画委員会の女性研究者支援事業の募集等に関する情報を所内で共有した。所内から複数の女性教員がこれらの支援を受け、研究環境が改善されている。

2　男女共同参画委員会の年次報告書に関する審議

年次報告書の作成に関して、その内容をメール審議した。

東北アジア研究センター

東北アジア研究センターでは、センター長（岡洋樹教授）、副センター長 2 名、事務長及び全学男女共同参画委員会委員（平成 27 年度は柳田賢二准教授）によりセンター長直属の専門委員会として「男女共同参画ワーキンググループ」を設置し、全学の男女共同参画委員会委員を座長として活動を行っている。また執行会議で男女共同参画に関わる議論を行っている。

本年度は全学の男女共同参画に向けた活動の周知・徹底に関する活動を行った。

会議開催状況

男女共同参画ワーキンググループの間でメールによる会議を行い、センター長より毎月開催される執行会議に報告を行っている。また執行会議では男女共同参画委員会の活動内容についてそのつど報告を受け、議論を行い、さらにセンター全構成員が出席して毎月開催される全体会議において周知するとともに、構成員からの質疑に答えている。

活動内容

平成 27 年 5 月 25 日　センター全体会議において、5 月 19 日開催の全学の第 94 回男女共同参画委員会の議事内容について報告を行い、周知した。この中で、全学委員会の資料についても URL を周知し、センター構成員の閲覧に供した。

センター全構成員に対して、第 2 回澤柳記念賞公募についてメールにより周知した。

第 4 回仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の募集について周知した。

平成 27 年 7 月 27 日　センター全体会議において、7 月 16 日開催の第 95 回男女共同参画委員会の議事内容について報告を行い、周知した。前回同様、同委員会の資料について URL を周知し、センター構成員の閲覧に供した。

平成 27 年 9 月 11 日　男女共同参画・女性研究者支援事業「研究スキルアップ経費」の募集について、センター構成員全員に周知した。

平成 27 年 10 月 26 日　センター全体会議において、10 月 22 日開催の第 96 回男女共同参画委員会の議事内容について報告を行い、周知した。前回同様、同委員会の資料について URL を周知し、センター構成員の閲覧に供した。

平成 27 年 10 月 28 日　センター構成員全員に対して、第 12 回東北大学男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」について参加方周知を行った。

その他

人事に関しては、女性教員の比率向上に向けた努力を引き続き行っている。平成 27 年度は専任教員 1 名の新規採用人事を行ったが、人事選考の途上で女性応募者が辞退してしまい、採用には至らなかったことから、新規の女性の採用はなかった。

センター内に、女性の教職員用の休憩室を設置して利用に供しているほか、共有スペースを使用している助教・教育研究支援者に対しては、女性のみでのスペース配分を行うなど、女性が働きやすい環境の提供に努めている。

病院

1　星陵地区男女共同参画ネットワーク会議での情報共有

星陵キャンパスの部局（医学系研究科、歯学系研究科、加齢医学研究所、病院、メディカル・メガバンク）からの東北大学男女共同参画委員会委員が各部局での現状と課題に関して情報交換を行なった。

2．女性医師が働きやすい病院を目指し、女性医師支援推進室が活動を継続している。

3．女性休憩室の運営、病後児保育室の運営に関しては、病院、研究科、医学部教室員会から委員を出すなどして協力体制がとられている。

４．平成 20 年 4 月から育児短時間勤務医師（医員）制度を導入していたが、取扱規程が平成 26 年度に変更され、それまでは未就学の子を養育する者という条件であったものを育児に限定せず、平成 27 年度より下記の通り対象を拡大して施行運用する。

平成 27 年 4 月からの短時間勤務医師（医員）の採用条件

1）小学校 3 年生までの子を養育する者、2）障害を持つ子を養育する者、
3）父母（配偶者の父母含む）を介護する者、4）健康状態によりフルタイム勤務が困難である者

短時間勤務医員は 27 年 4 月現在で 18 名、以後新規に 3 名の採用が行われた。今年度は、本人の健康を理由とした採用者が含まれ、キャリア継続を支援する取組として活用されている。

５．外部に向け、東北大学病院の女性医師支援を周知する。

第 9 回女性医師支援セミナー（宮城県女性医師支援センター主催）において副病院長が「東北大学病院における女性医師支援について」と題して講演を行い、短時間勤務医師（医員）制度、院内保育所、病後児保育室、および女性医師支援推進室の紹介を行った。

６．女性教員を講師とする学術的なセミナーを開催する。

星陵キャンパスの部局合同で企画、運営する。

高度教養教育・学生支援機構

高度教養教育・学生支援機構は、平成 26 年 4 月に、高等教育開発推進センター、国際交流センター、国際教育院、 グローバルラーニングセンター、教養教育院、高度イノベーション博士人財育成センターを統合し、新たに設置された。男女共同参画の WG や委員会はまだないが、全学男女共同参画委員が男女共同参画活動への呼びかけなどを行った。また、高度教養教育・学生支援機構の業務センターである学生相談・特別支援センターでは、通常の業務において、以下のような活動を行った。

活動内容

1 男女共同参画シンポジウムの周知

2 第1回 TUMUG Forum への共催

男女共同参画推進センター主催の第 1 回 TUMUG Forum を、工学系女性研究者育成支援推進室、工学研究科、医工学研究科とともに共催し、末松和子教授に座長を務めていただいた。

3 業務センターにおける取組

学生相談・特別支援センターでは、研究と育児の両立に関する相談や、進路・キャリアに関する相談への個別支援の他、ハラスメント全学学生相談窓口における相談対応、ハラスメント防止に関する FD・予防教育、工学部機械知能系女子学生交流会への参加等を通した連携による女子学生支援体制作り、などを行った。

研修の受講

1　参加状況

本学の求める人材像は、「高い倫理観に立脚し、国際水準の大学を支える職員の自覚と問題意識を持ち、変化に適応し、チャレンジブルに行動し、自ら成長しつつ本学の発展に寄与できる自立的な人材」である。事務職員等の研修については、求める人材像に基づき、各職員の組織における職務と責任の遂行に必要な知識・技術及び将来に向かって必要となる知識等の付与並びに自己啓発の機会を与えることによって、業務の遂行能力の向上を図ることを目的に実施している。

研修の実施にあたっては、性別に関係なく、各研修の目的や内容に応じ研修参加者を選考している他、幅広く研修への参加を周知し、公募を行っている。

2　平成２７年度における主な研修の実施状況（東北大学主催）

項目	研修名	参加者数	女性参加者(内数)	女性参加比率
階層別研修	初任者研修（4 月）	30 名	17 名	56.7%
	初任者フォロー研修（9 月）	29 名	16 名	55.2%
	中堅職員研修（11 月）	24 名	10 名	41.7%
	係長研修（9 月）	13 名	3 名	23.1%
	新任管理者等研修（9 月）	31 名	9 名	29.0%
その他の研修	自己啓発研修（放送大学（通年)）	67 名	33 名	49.3%
	自己啓発研修（通信教育（通年)）	263 名	151 名	57.4%
	女性職員のキャリア形成支援研修（10 月）	11 名	11 名	100.0%
	事務職員海外研修（中級者対象）（11 月）	11 名	8 名	72.7%
	再雇用準備セミナー（10 月）	20 名	12 名	60.0%

第４章　行動指針、中期目標・中期計画達成のための各部局における取組について

文学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	4 名／43 名中（9%）	4 名／45 名中（9%）	4 名／44 名中（9%）
准 教 授	6 名／35 名中（17%）	6 名／33 名中（19%）	6 名／36 名中（17%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	5 名／18 名中（28%）	5 名／18 名中（28%）	5 名／17 名中（29%）
計（助手･助教含む）	15 名／96 名中（16%）	15 名／96 名中（15%）	15 名／97 名中（15%）
計（助手･助教除く）	10 名／78 名中（13%）	10 名／78 名中（13%）	10 名／80 名中（13%）
大学院学生（博士後期課程）	74 名／169 名中（44%）	72 名／169 名中（43%）	70 名／166 名中（42%）
大学院学生（博士前期課程）	78 名／169 名中（46%）	77 名／173 名中（45%）	79 名／164 名中（48%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
3 名／12 名中（25%）	1 名／4 名中（25%）	2 名／10 名中（20%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

文学研究科では、新規採用者の公募に際し、男女共同参画を推進していることを明記している。

３．前年度より改善された点

文学研究科では、平成 16 年度策定の基本方針に基づいて、女性教員の採用を行っており、毎年必ず１名以上は女性が採用されている。平成 27 年度は、新規採用が昨年度より増えたこともあり、新規採用者 10 名の内２名が女性であった。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

文学研究科では、特段の障害は存在しないが、募集分野によっては女性の応募が得られない場合もある。今後一層積極的採用に努める必要がある。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、公募書類に男女共同参画の推進をうたい、この方針を学内外に周知することで女性研究者の応募の増加を図る。研究者・大学院生のジェンダーバランスが分野ごとに大きく異なる現状にどう対応できるか、さらに検討を進めたい。

教育学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	２名／１８名中（１１％）	１名／１８名中（６％）	１名／１５名中（７％）
准 教 授	２名／１３名中（１５％）	２名／１３名中（１５％）	２名／１５名中（１３％）
講　　師	０名／０名中（０％）	０名／０名中（０％）	０名／１名中（０％）
助教・助手	２名／５名中（４０％）	１名／６名中（１７％）	１名／６名中（１７％）
計(助手･助教含む)	６名／３６名中（１７％）	４名／３７名中（１１％）	４名／３７名中（１１％）
計(助手･助教除く)	４名／３１名中（１３％）	３名／３１名中（１０％）	３名／３１名中（１０％）
大学院学生 (博士後期課程)	４１名／８１名中（５１％）	４１名／７８名中（５３％）	３８名／６５名中（５９％）
大学院学生 (博士前期課程)	４５名／７２名中（６３％）	５０名／７５名中（６７％）	４１名／６７名中（６１％）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
１名／３名中（３３％）	０名／２名中（０％）	０名／３名中（０％）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

教育学研究科の新規採用者における女性比率は上記のとおりである。

３．前年度より改善された点

教育学研究科では、新規採用者の女性比率を高める努力をしているものの，ここ２年間の女性比率は０であり，改善が見られない。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

教育学研究科では、女性研究者の採用に関して特段の障害はない。女性構成員の比率を高めるために一層の努力が必要である。

５．次年度の具体的対応策

これまで同様，公募書類に男女共同参画の推進をうたい、学内外に採用方針を周知することで女性研究者の応募の増加を図る。

法学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	6 名／32 名中（19%）	5 名／33 名中（15%）	5 名／36 名中（14%）
准 教 授	7 名／20 名中（35%）	6 名／19 名中（32%）	7 名／16 名中（44%）
講　　師	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）
助教・助手	4 名／11 名中（36%）	4 名／10 名中（40%）	4 名／10 名中（40%）
計（助手・助教含む）	18 名／64 名中（28%）	16 名／63 名中（25%）	17 名／63 名中（27%）
計（助手・助教除く）	14 名／53 名中（26%）	12 名／53 名中（23%）	13 名／53 名中（25%）
大学院学生（博士後期課程）	17 名／49 名中（35%）	12 名／40 名中（30%）	10 名／36 名中（27%）
大学院学生（博士前期課程）	6 名／15 名中（40%）	3 名／15 名中（20%）	7 名／15 名中（46%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
3 名／10 名中（30%）	1 名／6 名中（17%）	2 名／10 名中（20%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

法学研究科における、女性構成員比率の推移は上記のとおりである。

３．前年度より改善された点

数値としての改善点は、新規採用のあった准教授、博士前期課程における女性比率の向上である。全体として高い女性比率を維持しており、また、各教員区分において１名以上の女性が在籍している状況は、平成 25 年度から継続している。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

法学研究科では、女性構成員の比率が高い状態が続いており、男女共同参画の実現に対する大きな障害はないと考える。ただし、単身赴任者や家族との別居者も多いことから、今後も高い女性比率を維持し、より改善するためには、育児・介護環境等の改善にも留意が必要である。

５．次年度の具体的対応策

平成 28 年度以降も、高い女性構成員比率を維持することができるよう努力をする。特に、新規採用者における女性比率の向上や大学院学生の女性比率の向上に、引き続き務める予定である。

経済学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	2 名／35 名中（5.7%）	2 名／33 名中（6.1%）	2 名／36 名中（5.6%）
准 教 授	5 名／21 名中（23.8%）	6 名／24 名中（24%）	5 名／24 名中（20.8%）
講　　師	0 名／4 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	1 名／2 名中（50%）
助教・助手	5 名／5 名中（100%）	5 名／5 名中（100%）	6 名／9 名中（66.7%）
計（助手・助教含む）	12 名／65 名中（18.5%）	13 名／64 名中（20%）	14 名／71 名中（19.7%）
計（助手・助教除く）	7 名／56 名中（12.5%）	8 名／57 名中（13.8%）	8 名／62 名中（12.9%）
大学院学生（博士後期課程）	22 名／63 名中（34.9%）	21 名／64 名中（32.8%）	22 名／59 名中（37.3%）
大学院学生（博士前期課程）	41 名／101 名中（40.6%）	47 名／111 名中（42.3%）	67 名／131 名中（51.1%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
4 名／9 名中（44.4%）	1 名／3 名中（33.3%）	2 名／12 名中（16.7%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

経済学研究科では、女性構成員比率は、横ばいではあるものの、そこまで低くない。

３．前年度より改善された点

経済学研究科では、近年女子大学院学生の比率が増えている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

５．次年度の具体的対応策

理学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	１名／ 74 名中（1%）	１名／77 名中（1%）	１名／75 名中（1%）
准 教 授	２名／ 80 名中（3%）	３名／77 名中（4%）	３名／77 名中（4%）
講　　師	０名／　５名中（0%）	０名／５名中（0%）	０名／５名中（0%）
助教・助手	９名／103 名中（9%）	６名／96 名中（6%）	４名／88 名中（5%）
計（助手・助教含む）	12 名／262 名中（5%）	10 名／255 名中（4%）	８名／245 名中（3%）
計（助手・助教除く）	３名／159 名中（2%）	４名／159 名中（3%）	４名／157 名中（3%）
大学院学生（博士後期課程）	34 名／279 名中（12%）	46 名／290 名中（16%）	46 名／289 名中（16%）
大学院学生（博士前期課程）	86 名／580 名中（15%）	87 名／583 名中（15%）	96 名／574 名中（17%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
１名／ 38 名中（ 3%）	０名／16 名中（0%）	０名／13 名中（0%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

理学研究科では、平成 28 年１月１日での女性教員の採用者数は０名と、採択が無く、伸び悩みの状況が続いている。女性教員の総数は平成 25 年度の 12 名と比較し、8 名と減少しているが、これは GCOE などで採用されていた配置定員枠外の女性教員がプロジェクトの終了とともに転出または退職したためと考えられる。人事異動による女性教員の転出は依然として大きな問題となっており、配置定員枠外の女性教員を如何に枠内に定着させるかが今後の課題である。

３．前年度より改善された点

理学研究科では、平成 26 年度以降、博士後期課程の女子大学院生が 16%となり、平成 25 年度の 12%から大幅に増えている。在籍している女子大学院生が、今後、女性教員として職を得ることを期待したい。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

理学研究科では、平成 25 年度に採用された１名以降、採用が無い。プロジェクトによる採用が低迷したためと考えられるが、過去の事例からもプロジェクト採用の場合はその終了とともに転職もしくは退職する場合が多く、配置定員枠外での採用の問題は依然として残されている。また、大学院における女子学生の割合（16－17%）と比較して、女性教員の比率と依然として大きな開きがあり、大学でのキャリアを考える女子学生がそもそも少ないことに問題がある。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画の精神のもとで人事選考を行うよう努める。大学院博士後期課程に進学した者に対して大学でのキャリアを考える女子学生が増えるよう、進路の指導を行う。また、女性教員の配置定員枠内への定着に向けた方策を見出していく必要がある。

医学系研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	12 名／92 名中（13%）	13 名／92 名中（14%）	14 名／94 名中（15%）
准 教 授	7 名／68 名中（10%）	9 名／72 名中（13%）	9 名／70 名中（13%）
講　　師	8 名／36 名中（22%）	7 名／35 名中（20%）	6 名／31 名中（19%）
助教・助手	48 名／151 名中（32%）	39 名／137 名中（28%）	45 名／145 名中（31%）
計（助手･助教含む）	75 名／347 名中（22%）	68 名／336 名中（20%）	74 名／340 名中（22%）
計（助手･助教除く）	27 名／196 名中（14%）	29 名／199 名中（15%）	29 名／195 名中（15%）
大学院学生（博士後期課程）	193 名／678 名中（28%）	195 名／676 名中（29%）	198 名／704 名中（28%）
大学院学生（博士前期課程）	85 名／172 名中（49%）	88 名／168 名中（52%）	99 名／179 名中（55%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
14 名／60 名中（23%）	9 名／55 名中（16%）	17 名／45 名中（38%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

医学系研究科は女性研究者の比率が高い保健学専攻看護学コースを含むため、教員の女性比率は比較的高めの状況が続いている。平成２７年度は、新規採用者における女性割合が大幅に増加したこと、女性教授/女子大学院生の比率が微増したことは改善点である。しかし、この３年間で、顕著に全体的な女性比率が高まったとは言い切れないのが実態である。

３．前年度より改善された点

新規採用者における女性比率が、前年度の１６％から３８％へと増加したことは、大きな改善点である。加えて、教授職の女性教員が２名増加したこと、博士前期課程の大学院生に占める女性比率が５２％から５５％に微増したことは改善点といえる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

医学系研究科では、大学院生に占める女性比率が高めであるのに対し、上位職に占める女性教員の割合が低い傾向が続いている。学位を取得した女性研究者が大学の上位職に就くまでの過程

には、様々な阻害要因が存在すると考えられるため、このような阻害要因を取り除くような取り組みが求められる。

５．次年度の具体的対応策

平成２８年度は、２７年度に引き続き、男女共同参画の理念に基づいた人事選考に取り組むことについて、教授会等で継続的に働きかける。さらに、平成２７年度に創設した「医学系研究科女子大学院生奨励賞」を優秀な女子大学院生に授与することを通して、女性研究者が教育研究のキャリアで活躍することをエンカレッジする。

歯学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	1 名／ 20 名中（ 5%）	1 名／22 名中（ 5%）	1 名／ 21 名中（ 5%）
准 教 授	1 名／ 11 名中（ 9%）	1 名／14 名中（ 7%）	1 名／ 16 名中（ 6%）
講　　師	1 名／ 10 名中（10%）	1 名／ 7 名中（14%）	1 名／　8 名中（13%）
助教・助手	16 名／ 56 名中（29%）	16 名／55 名中（29%）	21 名／ 61 名中（34%）
計(助手･助教含む)	19 名／ 97 名中（20%）	19 名／98 名中（19%）	24 名／106 名中（23%）
計(助手･助教除く)	3 名／ 41 名中（ 7%）	3 名／43 名中（ 7%）	3 名／ 45 名中（ 7%）
大学院学生 (博士後期課程)	59 名／170 名中（35%）	49 名／164 名中（30%）	56 名／173 名中（32%）
大学院学生 (博士前期課程)	6 名／ 12 名中（50%）	11 名／16 名中（69%）	13 名／20 名中（65%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
3 名／14 名中（21%）	4 名／9 名中（44%）	6 名／14 名中（43%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

歯学研究科における女性比率は、教授は約 5%、准教授は約 6%、講師は約 13%、助教は約 34%、大学院学生（博士後期課程）は約 32%、大学院学生（博士前期課程）は約 65%となっている。

３．前年度より改善された点

歯学研究科では、人事委員会が男女共同参画に配慮しつつ教員人事を所掌している。

平成 27 年度は、助教 及び 大学院学生（博士後期課程）における女性比率が向上した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

歯学研究科では、教職員の意識、制度、環境 及び 設備等において障害となっている点はないが、教員を募集する際、女性からの応募が少ない場合があり、そのことが、教授、准教授及び講師における女性教員比率に影響しているかもしれない。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、教員選考の際は女性の参画に配慮しながら、優秀な人材を集める。

薬学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／18 名中（0%）	0 名／20 名中（0%）	0 名／20 名中（0%）
准 教 授	3 名／14 名中（21%）	3 名／14 名中（21%）	3 名／14 名中（21%）
講　　師	1 名／4 名中（25%）	1 名／5 名中（20%）	1 名／5 名中（20%）
助教・助手	9 名／36 名中（25%）	9 名／35 名中（26%）	8 名／33 名中（%）
計(助手･助教含む)	13 名／72 名中（18%）	13 名／74 名中（18%）	12 名／72 名中（17%）
計(助手･助教除く)	4 名／36 名中（11%）	4 名／39 名中（10%）	4 名／39 名中（10%）
大学院学生（博士後期課程）	14 名／79 名中（18%）	16 名／79 名中（20%）	23 名／79 名中（29%）
大学院学生（博士前期課程）	27 名／120 名中（23%）	36 名／124 名中（29%）	25 名／124 名中（20%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
3 名／8 名中（38%）	2 名／10 名中（20%）	1 名／7 名中（14%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

薬学研究科では、１名の女性の助教を新規に採用した。

３．前年度より改善された点

今年度の薬学研究科の女性教員数及び割合は昨年と同じである。

今年度は大学院博士後期課程の女子学生数が前年度より2名増えて16名に、割合も18%から20%となった。このうち、一昨年度から開設された4年制の博士後期課程（薬学履修課程）には6名が進学し、うち女性は1名（17%）であった。大学院博士前期課程の女子学生数は、前年度より６名増えて33名に、割合も22%から28%となった。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

保育園等の空きがなく、子供を預けられない。
教員のポストに空きがない。

５．次年度の具体的対応策

博士前期課程大学院生や学部学生（含６年制コース）に対して、サイエンス・エンジェル制度等の本学における女性研究者育成事業の周知を行なうとともに、薬学研究科または本学主催の関連セミナーへの参加を呼びかける。
女性研究者を対象とした助成金等に積極的に応募するよう促す

工学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	1 名／115 名中（1%）	1 名／117 名中（1%）	1 名／112 名中（1%）
准 教 授	3 名／102 名中（3%）	4 名／108 名中（4%）	4 名／117 名中（3%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）
助教・助手	14 名／135 名中（13%）	14 名／140 名中（10%）	14 名／124 名中（11%）
計（助手･助教含む）	18 名／354 名中（5%）	19 名／367 名中（5%）	19 名／356 名中（5%）
計（助手･助教除く）	4 名／219 名中（2%）	5 名／227 名中（2%）	5 名／232 名中（2%）
大学院学生（博士後期課程）	58 名／532 名中（10.9%）	47 名／515 名中（9.1%）	49 名／534 名中（9.2%）
大学院学生（博士前期課程）	147 名／1488 名中（9.9%）	147 名／1482 名中（9.9%）	161 名／1488 名中（10.8%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
2 名／37 名中（5%）	3 名／32 名中（9%）	2 名／28 名中（7%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

工学研究科では、平成 27 年度に新規採用された女性教員の人数は例年並みであり、教員における女性の比率は横ばいであるので、今後も女性教員数の増加に向けて更なる努力が望まれる。また女子大学院生の前期課程の比率は前年度より約 1%上昇し、良い傾向にあるが、後期課程の比率は前年度と同程度であり、増加に向けての努力が望まれる。

３．前年度より改善された点

工学研究科では、過去 3 年間、女性教員の絶対数はほぼ変わらず、維持されてきているので、

工学系女性研究者育成支援推進室 ALicE による各種支援活動がその維持に効果を発揮しつつあると思われる。さらに大学院前期課程の女子学生数の増加は、オープンキャンパス時に開催している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」や ALicE による広報活動が功を奏してきていると思われる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

工学研究科では、伝統的に女子学生・女子大学院学生の比率が小さい。このため，これに応じて女性教員比率も少なくなる傾向があると考えられる。また、工学研究科における教育と研究以外の大学運営のために、現教員は極めて長い時間を割く必要があり、現教員のオーバーワークの状態が日常化している。このことも、女性教員の比率を高める障害になっていると考えられる。また、工学研究科は多様な分野があるため、障害となる原因も多様であると考えられ、その問題把握などが重要であると言える。

５．次年度の具体的対応策

オープンキャンパスにおいて例年実施している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を平成 28 年度も行い、工学分野の魅力と将来性を継続的にアピールする。さらに女子学生の博士後期課程への進学を促す方策として、出産・育児による在学期間延長に関する制度を検討する。

農学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	2 名／41 名中（5%）	2 名／42 名中（5%）	2 名／39 名中（5%）
准 教 授	4 名／42 名中（10%）	4 名／42 名中（10%）	4 名／43 名中（9%）
講　　師	0 名／0 名中（%）	0 名／0 名中（%）	0 名／0 名中（%）
助教・助手	10 名／38 名中（26%）	9 名／38 名中（24%）	9 名／43 名中（21%）
計（助手･助教含む）	16 名／121 名中（13%）	15 名／122 名中（12%）	15 名／125 名中（12%）
計（助手･助教除く）	6 名／83 名中（7%）	6 名／84 名中（7%）	6 名／82 名中（7%）
大学院学生（博士後期課程）	36 名／120 名中（30%）	32 名／107 名中（30%）	31 名／98 名中（32%）
大学院学生（博士前期課程）	109 名／300 名中（36%）	103 名／262 名中（39%）	103 名／264 名中（39%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
１名／４名中（25%）	０名／３名中（0%）	１名／12 名中（8%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

農学研究科では、平成 25 年度から平成 27 年度の間に２名の女性の新規採用があった（25,27 年度）。平成 21 から平成 22 年の間に計４名の女性教員を採用しており、杜の都ジャンプアップ事業による人件費および研究費の支援が行われた。平成 25 年度は外部資金による特定有期雇用の女性教員１名の採用を行い、また助教枠において平成 27 年度に１名の女性教員を採用した。

一方で他大学等への女性教員(助教)の転出が１名あった。結果として平成 27 年度の女性教員の数に変化はなかったが、大学院学生数は 30%以上を継続している。女子学生が多い中、助手・助教枠は 20%台で推移し、かつ少しずつ減少に転じている。農学研究科はもともと女子学生が多く、大学院進学率も高いが採用に反映されていない。教授および准教授の割合はともに 10%を割り込んでいる。平成 30 年度には女性教授１名が退職し、女性教授１名体制になるリスクがある。今後も継続して女性教員の採用に向けての努力が必要と考えられ、目標達成に向けた検討と具体的な対策をとる必要がある。

３．前年度より改善された点

農学研究科では、平成 26 年度には０であった女性新規採用が 27 年度には１名であった。これは新規採用者割合でみると、8%になる。一方で他大学等への女性教員(助教)の転出が１名あった。結果として平成 27 年度の女性教員の数に変化はなかった。女性教員の採用に向けては公募の要領に男女共同参画に関する情報等を記載し、女性研究者への応募を呼びかけている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

農学研究科には公募を課さない教員特別選考制度があり、年度によっては杜の都ジャンプアップ事業の活用と併せてその制度を適用し、女性教員の採用を進めてきたが、今後は制度に依存せずとも女性教員比率が高まっていくことが望ましい。そのためには何よりも研究科構成員の更なる意識の向上が必要である。本研究科の大学院博士後期課程進学者に占める女性の割合は平成 25 年度で 30%、平成 26 年度で 30%、平成 27 年度では 32%に達している。この現実をよく認識することが、更なる改善を促すと思われる。

教員ポストの流動化が思う様に進まないことは農学研究科に限った問題ではなく、全学的な問題としてもとらえるべきかもしれないが、男女共同参画の取組で特に強く感じることは未だ教員の理解が薄いことである。女性教員の積極的な採用や育成について総論は賛成であっても各論はそうでない。意識改革が必要である。

なお、青葉山移転に伴う保育園の設置については男女共同参画において重要と位置付けている。

５．次年度の具体的対応策

平成 28 年度から平成 30 年度までに農学研究科の人事委員会に対して、教員選考において女性候補者の採用に十分配慮するように要請するとともに、杜の都ジャンプアップ事業のような女性教員の採用を促進する環境整備の必要性を大学本部や関係部署に要請していく必要

がある。また農学研究科では、平成 26 年度から「東北復興農学センター」を立ち上げ、教育、研究、社会貢献等の実績をあげている。平成 27 年度からは「食と農免疫国際教育研究センター」が発足した。それらセンターでの教員の新規採用等に当たっては特別選考制度を運用し、積極的に女性教員を登用する様に農学研究科の人事委員会に要請していく。さらに、組織運営においても、大学を支える女性教員の確保・活用を図れる人事システムを構築する様に、研究科長等に要請していく。これらの要求はこれまでも続けているものの予算の制約によって特別枠による女性教員の採用は見送られてきたが、次年度も継続して行う。

男女共同参画の推進に向けて、行動指針の確認を行った。育児と仕事の両立支援策の導入など、総合的・計画的な取組を推進する。農学研究科は平成 29 年度に青葉山新キャンパスへ移転する予定であり、特に育児と仕事の両立支援のための施設として保育園の新規設置の要望を大学本部に強く推進するよう申し入れてきた。実際に新規設置が決まり、計画が進んでいる。

本年度は男女共同参画委員会主催の講演会を昨年度に続いて開催した。他の研究科や男女共同参画センター（TUMUG）からの参加も見られた。次年度についても継続的にこうした講演会を開催したい。

女性教員(含む技術職員)増加のための方策については下記のとおりである。

① 女性の目線から見た現状あるいは問題点(課題点)の提示
② 男女共同参画委員会企画講演会等の実施
③ FD 開催への提言： 東北大学の男女参画の取り組みや他大学との比較、農学研究科への要望などに関する講演を行う。
④ 人事委員会との連携−女性研究者応募状況の報告と意識の共有
⑤ 女性技術職員が活躍するための他大学職員による講演の企画など。

国際文化研究科

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	4 名／25 名中（16%）	4 名／25 名中（16%）	4 名／25 名中（16%）
准 教 授	3 名／16 名中（19%）	1 名／12 名中（8%）	1 名／13 名中（8%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
計（助手・助教含む。）	7 名／41 名中（17%）	5 名／37 名中（14%）	5 名／38 名中（13%）
計（助手・助教除く。）	7 名／41 名中（17%）	5 名／37 名中（14%）	5 名／38 名中（13%）
大学院学生（博士後期課程）	37 名／57 名中（65%）	42 名／64 名中（66%）	47 名／74 名中（64%）
大学院学生（博士前期課程）	54 名／77 名中（70%）	55 名／81 名中（68%）	43 名／65 名中（66%）

※平成 25 年度は 3 月 31 日、平成 26 年度は 1 月 1 日、平成 27 年度は 12 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
0 名／0 名中（0 %）	0 名／0 名中（0 %）	0 名／2 名中（0 %）

※平成 25 年度は 3 月 31 日、平成 26 年度は 1 月 1 日、平成 27 年度は 12 月 1 日の数

国際文化研究科では、過去 3 年間の新規採用者は 2 名のみであり、女性比率を上げる機会も少なかった。しかし平成 28 年度採用候補者により女性比率は上昇する見通しである。

３．前年度より改善された点

平成 25 年度末には 2 名の女性教員が退職したが、女性構成員の比率は全体比で 13%、特に教授については 16%であり、比較的高めの水準を維持している。科内の男女共同参画推進委員会専用メールアドレスを設置し、より相談しやすい環境を整備している。平成 23 年度に設けた女性職員休憩室は、授乳等の必要がある場合は女子学生も使用可能としており、引き続き設備充実等の環境改善を進めている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

国際文化研究科では、制度的には特に障害となっていると思われる点はないが、本学の中でも早期に女性教員の積極的採用を始めたことから、今後の数年間で定年による女性教員の退職が続く見込みである。

５．次年度の具体的対応策

教員・学生ともに女性の比率は学内でも比較的高いレベルにあるが、女性教員はなお男女共同参画の理念に照らせば不十分であり、今後も採用人事において（単純な数確保だけではない）配慮を払う必要がある。第３期中期目標期間中に、女性教員比率 20%を目指す取組みを行う予定である。

情報科学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／30 名中（0%）	0 名／33 名中（0%）	0 名／37 名中（0%）
准 教 授	5 名／30 名中（17%）	5 名／30 名中（17%）	5 名／33 名中（15%）
講　　師	1 名／2 名中（50%）	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）
助教・助手	1 名／20 名中（5%）	1 名／21 名中（5%）	1 名／28 名中（4%）
計（助手･助教含む）	7 名／82 名中（9%）	7 名／85 名中（8%）	7 名／96 名中（7%）
計（助手･助教除く）	6 名／62 名中（10%）	6 名／64 名中（9%）	6 名／68 名中（9%）
大学院学生（博士後期課程）	21 名／110 名中（19%）	23 名／111 名中（21%）	23 名／118 名中（19%）
大学院学生（博士前期課程）	29 名／281 名中（10%）	30 名／296 名中（10%）	35 名／291 名中（12%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
0 名／6 名中（0%）	2 名／10 名中（20%）	1 名／17 名中（6%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

情報科学研究科では、平成 27 年度の新規採用者は増加した一方で、女性教員の採用は助教１名にとどまり、比率としては伸び悩んでいる。

３．前年度より改善された点

情報科学研究科では、平成 27 年度の博士前期課程における女子学生の比率が、平成 25 年度、26 年度の 10%から 12%へと増加している。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

情報科学研究科では、多様な分野に分かれている構造から、研究科全体での女性採用枠の設定が容易ではない現状である。また、研究科の大きな部分である工学分野では女性研究者数が少なく、優秀な候補者をサーベイする努力を行っているにも関らず、採用に成功するのが難しいのが現状である。

５．次年度の具体的対応策

女性研究者のサーベイを続け、採用に努力すると共に、女性研究者育成に重点を置き、運営検討および将来計画委員会に働きかけ、男女比率の是正に努力する。

生命科学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	1 名／27 名中（4%）	1 名／25 名中（4%）	2 名／26 名中（8%）
准 教 授	0 名／18 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）
助教・助手	5 名／38 名中（13%）	5 名／26 名中（19%）	5 名／32 名中（16%）
計（助手・助教含む）	6 名／85 名中（7%）	6 名／69 名中（7%）	7 名／76 名中（9%）
計（助手・助教除く）	1 名／47 名中（2%）	1 名／43 名中（2%）	2 名／44 名中（5%）
大学院学生（博士後期課程）	28 名／104 名中（27%）	21 名／73 名中（29%）	17 名／74 名中（23%）
大学院学生（博士前期課程）	59 名／203 名中（29%）	57 名／196 名中（29%）	62 名／195 名中（32%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
2 名／11 名中（ 18%）	2 名／11 名中（ 18%）	2 名／10 名中（ 20%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

生命科学研究科では、平成２４年度から外部資金等で雇用できる助教（研究特任）の内規を定め、女性教員の採用に努力している。

３．前年度より改善された点

生命科学研究科では、外部資金等で雇用できる助教（研究特任）の内規を定めたことにより、女性教員も採用しやすくなったと思われる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

生命科学研究科では、教員の採用において多くが公募になっているが、応募のなかで女性研究者の割合が小さかったが、内規を定めたことにより、少しは改善されてきている。

なお、博士前期課程の大学院学生における女性比率は増えているが、博士後期課程における女性比率が減ってきていることも助教への採用が少ない一因となっていると思われる。

５．次年度の具体的対応策

次年度においても教員選考委員会において男女共同参画の推進を図る。

生命科学研究科では、研究科における教員の女性比率が極端に低いという厳然たる事実を踏まえ、今後、女性教員を積極的に増やすことを基本方針にして，そのための環境整備を計ること、今後の教員人事において、これを改善するためにできるだけの努力をすることを基本方針として、引き続き努力する。

具体的な対応策として，以前に決定した次の４つを引き続き行う。

１．これから行われる教員人事において、各公募分野について女性候補者の推薦を選考委員会が積極的に行うことにより、女性候補者の割合が増えるように努力する。

２．公募する際に、この人事が男女共同参画を目指したものであることを明記する。

３．これからの教授人事のなかで、少なくとも１つは女性を教授として採用するように努力する。

４．人事選考の最終段階に女性候補者が残りながら、採用にいたらなかった場合には、人事選考委員会はその理由を説明する責任を負う。

上記の基本方針、具体策に基づき、女性教員の比率の向上を図るため、生命科学研究科では准教授、助教のポジションは任期制を導入しているため、任期付き女性教員の産前産後休業や育児休業等の取得によって教育・研究活動が中断された期間に対して任期延長を認めることなどの女性教員を受け入れるための環境整備を行い、また女性教員の更衣室・休憩室の設置などのハード面を整備した。また、研究科では教員公募に際しては、「なお，本人事は男女共同参画の理念に基づくものであることを申し添えます」との記載を続けている。

女性教員の採用実績に関しては、平成２５年度～２７年度の３年間における教員の採用にお

いて、各年度２名ずつの採用であるが、２７年度は女性教授を１名採用し、また、２８年４月に女性教授を１名採用することが決まっており、研究科として女性教授が３名誕生することは画期的なことである。

以上のように、女性教員比率は未だ低いので、今後も不断の努力が必要と考えられる。女性教員採用において、もっとも問題となる点の 1 つとして、有力な女性研究者からの応募が少ない点があげられるので、該当する女性研究者のサーベイを日常より続け、採用に努力する必要があると考えられる。

環境科学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／15 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）	1 名／16 名中（6%）
准 教 授	0 名／16 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）	0 名／19 名中（0%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	2 名／14 名中（14%）	2 名／11 名中（18%）	2 名／13 名中（15%）
計(助手･助教含む)	2 名／45 名中（4%）	2 名／43 名中（5%）	3 名／43 名中（7%）
計(助手･助教除く)	0 名／31 名中（0%）	0 名／32 名中（0%）	1 名／30 名中（3%）
大学院学生（博士後期課程）	23 名／94 名中（24%）	26 名／95 名中（27%）	22 名／75 名中（29%）
大学院学生（博士前期課程）	39 名／202 名中（19%）	37 名／210 名中（18%）	32 名／215 名中（15%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
0 名／3 名中（0%）	1 名／5 名中（20%）	1 名／4 名中（25%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

環境科学研究科では、過去 3 年間に 12 名が新規採用され、そのうち 2 名(17%)が女性教員であった。今後も女性教員採用の増加に向けて努力したい。

３．前年度より改善された点

昨年度に引き続き今年度も女性教員が採用され、女性教員比率が少し増加した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

環境科学研究科の対象とする学問領域において研究者に占める女性の割合が少ない。このため、

教員の公募の際に男女共同参画を推進している旨を謳っているにもかかわらず、女性の応募が少なく、採用に至らないケースが多い。これが最大の障害であり、即効性のある対策はない。

５．次年度の具体的対応策

即効性のある対応策ではないが、女子学生に対し博士課程後期課程への進学を促し、地道に研究者数を増やすことを継続して取り組みたい。

医工学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	１名／18 名中　(6%)	１名／19 名中　(5%)	１名／22 名中　(5%)
准 教 授	２名／７名中　(29%)	２名／７名中　(29%)	２名／７名中　(29%)
講　　師	０名／０名中　(0%)	０名／０名中　(0%)	０名／１名中　(0%)
助教・助手	１名／４名中　(14%)	１名／７名中　(14%)	１名／７名中　(14%)
計(助手･助教含む)	４名／29 名中　(14%)	４名／35 名中　(11%)	４名／37 名中　(11%)
計(助手･助教除く)	３名／25 名中　(12%)	３名／28 名中　(11%)	３名／30 名中　(10%)
大学院学生 (博士後期課程)	５名／44 名中（11%）	７名／53 名中（13%）	７名／54 名中（13%）
大学院学生 (博士前期課程)	17 名／82 名中（21%）	16 名／82 名中（20%）	８名／77 名中（10%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
０名／０名中（0%）	１名／３名中　(33%)	０名／ ３名中　(0%)

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

医工学研究科では小さい部局であるため採用数も少ないが、今年度は教授の協力教員としての採用がなされたため、母数の増加により女性教員比率が減少した。大学院生博士課程後期は 13%と前年度と同じであったが、前期課程１年の入学が少なく前期課程は 10%と昨年、一昨年と比べ半減している。

３．前年度より改善された点

医工学研究科は工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHE と共同で東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE(Association of Leading Woman Researchers in Engineering) において、女子学生や女性教員を対象に支援活動が行われている。また、合同の男女共同参画委員会も複数回行われ、他部局も交えての問題の

認識、情報の共有化などが行われている。また、サイエンスリーダーズキャンプにて、東北大学の男女共同参画や ALicE について紹介がなされ、高校の教員などに対する女子学生の理系啓発に関する活動も行われた。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

医工学研究は工学を基盤とするため、特に女性教員の上位職に関しては候補者が少ない状況である。また、小さい部局であるが若手教員が多いため、人事の大きな動きがないことも挙げられる。

５．次年度の具体的対応策

平成 28 年度もこれまでと同様に ALicE により、データの整理や解析などを行いながら、女子学生の活躍や女性教員の活躍をより見えるようにすることや、他部局と連携して共同で課題に対応しながらの支援について、引き続き有効な支援などを検討しながら支援活動等を行っていく。また、サイエンスリーダーズキャンプでも東北大学の男女共同参画活動や支援や、ALicE の支援活動を引き続き紹介し、女子学生の進路選択に大きく関わる高校教員の男女共同参画の意識啓発について行う。

教育情報学研究部・教育部

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／4 名中（0%）	0 名／4 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）
准 教 授	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）
講　　師	名／名中（%）	名／名中（%）	名／名中（%）
助教・助手	0 名／3 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）	1 名／3 名中（33%）
計(助手･助教含む)	0 名／9 名中（0%）	0 名／9 名中（0%）	1 名／9 名中（11%）
計(助手･助教除く)	0 名／6 名中（0%）	0 名／6 名中（%）	0 名／5 名中（0%）
大学院学生（博士後期課程）	7 名／24 名中（29%）	8 名／23 名中（35%）	7 名／26 名中（27%）
大学院学生（博士前期課程）	15 名／26 名中（58%）	15 名／24 名中（63%）	18 名／26 名中（70%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
0 名／1 名中（0%）	0 名／0 名中（-%）	1 名／1 名中（100%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

教育情報学研究部・教育部は小さい部局であるため採用数も少ないのが現状である。これまで

女性教員の採用者はいなかったが、平成 27 年度は 1 名（助教）を採用した。

３．前年度より改善された点

今年度は 1 名助教を採用した。女子学生の比率も博士課程前期に関しては年々増加傾向にある。大学院生博士前期課程の比率は前年度より増加し 70%となった。後期課程の比率は減少したが 3 割近くであり、ここ数年概ね 3 割を維持している。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

教育情報学研究部は平成 14 年の創立でより教員数 10 名ほどの小規模な独立大学院で歴史も浅い。そのため、教員の新規採用の機会になかなか恵まれないことが障害の一因である。また教育情報学はまだ新しい研究領域であるため、他大学においても採用枠そのものが少なく、そのため女性研究者が長く研究を続けられる環境にないことも原因と思われる。

５．次年度の具体的対応策

教員の新規採用の機会においては、今後とも女性教員の採用に積極的に取り組みたい。

金属材料研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／30 名中（0%）	0 名／33 名中（0%）	0 名／31 名中（0%）
准 教 授	2 名／36 名中（6%）	2 名／37 名中（5%）	2 名／33 名中（6%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）
助教・助手	4 名／65 名中（6%）	3 名／62 名中（5%）	6 名／66 名中（9%）
計（助手･助教含む）	6 名／133 名中（5%）	5 名／134 名中（4%）	8 名／133 名中（6%）
計（助手･助教除く）	2 名／68 名中（3%）	2 名／72 名中（3%）	2 名／67 名中（3%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
1 名／18 名中（6%）	0 名／15 名中（0%）	3 名／17 名中（18%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

金属材料研究所では今年度女性教員 3 名が新規採用された結果、女性教員数は 8 名となり、その比率は昨年度の 4%から 6 %へと増加した。

３．前年度より改善された点

金属材料研究所では、今年度 3 名の女性教員が新規採用され、ここ数年の女性教員数の斬減傾

向に歯止めがかかり、平成 24 年の女性教員数に復した。特に、新規採用者 17 名中、女性教員が18%に達し、女性の活用が進んできたといえる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

金属材料研究所では、新規採用については格段の進展が見られたが、より一層推進する必要があろう、また、教員の任期制が女性の安定的な採用にどのような影響を及ぼすかに検討する必要があろう。

５．次年度の具体的対応策

女性教員の新規採用における粘り強い勧誘とともに、独自計画で研究できる上級職への応募勧誘のために、以下の対策を検討する。

① 教員公募要項への“男女共同参画を推進している”旨の記載の励行。
② 女性教員数の増加に向けたより積極的な施策の検討。
③ 女性教員の活躍促進のための各種所内委員会へ登用。
④ 女子学生・研究者の増加に向けて、学会等を通じた一層の活動。
⑤ トイレ、休憩室等環境設備のニーズに合った継続的整備。
⑥ 子育て中の男女教職員を支援するための情報交換会、セミナー等の開催。

加齢医学研究所

1. 女性構成員比率の推移(過去3 年間)

職名等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　授	1 名／19 名中(5%)	2 名／21 名中(10%)	2 名／21 名中(10%)
准 教 授	1 名／11 名中(9%)	0 名／10 名中(0%)	0 名／7 名中(0%)
講　師	0 名／4 名中(0%)	0 名／3 名中(0%)	0 名／3 名中(0%)
助教･助手	5 名／26 名中(19%)	2 名／22 名中(9%)	3 名／25 名中(12%)
計（助手・助教含む）	7 名／60 名中(12%)	4 名／56 名中(7%)	5 名／56 名中(9%)
計（助手・助教除く）	2 名／34 名中(6%)	2 名／34 名中(6%)	2 名／31 名中(6%)

※平成 25 年度、平成 26 年度は3月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者(教授･准教授･講師･助教･助手)における女性比率(過去3 年間)

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
2 名／10 名中(20%)	0 名／4 名中(0%)	2 名／11 名中(18%)

※平成 25 年度、平成 26 年度は3月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

3. 前年度より改善された点

女性教授(新規採用、昇任)が二年連続で誕生した昨年には続けなかったが、新たに2名の女性が助教として採用された。ただ1名の女性助教が退職したので、純増は1名であった。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

加齢医学研究所では特別に障害となっている点は少ないと思われる。しかし、大学院生の所属が、医学系、生命科学系、歯学系、医工学系薬学系と多岐にわたっている故に、それぞれの所属系に根ざした固有の問題がある(それぞれの目指す目標が異なっている)。従って、それぞれの最大公約数となるような研究所全体としての改善には困難がともなう。結果的に、それぞれの所属系による問題点解決に依存している度合いが大きい。また、個々の研究室の特性に委ねられている点も大きく、この点でも、研究所全体としての改善には困難がともなう。

5. 次年度の具体的対応策

星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に出席することによって、各部局における現状と課題に対する対応策、すなわち最も身近な事例を参考にして、改善を図っていく。次年度以降の教員の採用の際に、男女比率の改善を目指して努力する。教職員及び学生の意識改革を進め、長期的な視野に立ち、現在受け入れている女子大学院生、女性研究者を育成していく。

流体科学研究所

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／15 名中（0%）	0 名／15 名中（0%）	0 名／15 名中（0%）
准 教 授	1 名／10 名中（10%）	1 名／11 名中（9%）	1 名／12 名中（8%）
講　　師	1 名／2 名中（50%）	1 名／2 名中（50%）	0 名／1 名中（0%）
助教・助手	0 名／13 名中（0%）	0 名／13 名中（0%）	0 名／13 名中（0%）
計(助手･助教含む)	2 名／40 名中（5%）	2 名／41 名中（4%）	1 名／41 名中（3%）
計(助手･助教除く)	2 名／27 名中（7%）	2 名／28 名中（7%）	1 名／28 名中（4%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
0 名／4 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

流体科学研究所では、新規採用女性教員は０名であったが、准教授１名が教員として在籍しており、全教員数の 2～3%の割合となっている。研究所を構成する分野が主として工学部の機械系に協力講座として属しており、研究分野からしても女性研究者の少ない状況で、ここ数年女性教員の在籍を維持しており、教員新規採用においては積極的な女性登用を推し進めている。

３．前年度より改善された点

流体科学研究所では、女性教員の積極的な新規採用に向けて、本年度のテニュアトラック外国人准教授公募においては、女性を積極的に採用すること、および文部科学省のプログラムを利用し、スタートアップ研究経費を配分することとした。これは研究環境が変わるときの諸負担、特

に育児等をしている女性ならではの負担を極力低減させるためのプログラムである。結果的には本年度は新規教員の採用には至らなかったが、子育てと研究の両立をはかる女性教職員にとっては大変有用な制度であると位置付けられる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

流体科学研究所では、在籍女性教職員の職場環境の改善と今後の新規女性教員の採用に努力をはらっているが、先述の通り研究分野における女性研究者の絶対数が少ないところが障害となっている。長期的な視野に立ち、当該分野における女子学生の育成を理系他部局と協力して進めていくことをしなければならない。今後、全学的な活動が必要になるかと思われる。

５．次年度の具体的対応策

平成 28 年度においても引き続きテニュアトラック外国人准教授の公募を行っていく予定であり、今年度同様に、公募要領に「東北大学は男女共同参画を推進している」および「子育て支援の詳細等、男女共同参画の取り組みについては下記の URL を参照のこと」に相当する文言を明記し、広く採用者への周知を図る。

電気通信研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／24 名中（0%）	0 名／24 名中（0%）	0 名／22 名中（0%）
准 教 授	0 名／20 名中（0%）	0 名／19 名中（0%）	0 名／18 名中（0%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	1 名／22 名中（4%）	1 名／24 名中（4%）	1 名／23 名中（4%）
計(助手･助教含む)	1 名／66 名中（1%）	1 名／67 名中（1%）	1 名／63 名中（1%）
計(助手･助教除く)	0 名／44 名中（0%）	0 名／43 名中（0%）	0 名／40 名中（0%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
1 名／4 名中（25%）	0 名／6 名中（0%）	1 名／3　名中（33%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

電気通信研究所では､平成 25 年度に策定した部局ビジョンに従い自主財源による女性教員特別枠を新設し、女性助教が平成 26 年度末に転出した際に、平成 27 年度に新規で女性助教を採用して該当枠での女性教員任用を維持するなど、積極的な男女共同参画に努めている。とはいえ、女性比率の向上には結びついていない。研究分野の性格上女子学生や女性研究者が元々少ないということが原因していると考えられるが、男女共同参画への取り組みを強化し、女性比率の向上に努めたい。

３．前年度より改善された点

女性研究者の研究環境支援を積極的に行い、平成 27 年度に新規採用となった助教 1 名にスタートアップ研究費に関する連絡を行った。また、仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業に関するアナウンスを所内に行うなど、所内への男女共同参画事業に関する啓蒙活動を進めた。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

研究分野の性格上、女性研究者及び女子学生の数が少ないことが大きな障害になっている。まずは、女子学生の数を増やし、若手女性研究者の母集団を増やすことが重要であると考えられる。そのため、女子学生の積極的な大学院への進学等の進路指導や、新しい学際領域の創成など様々努力をしているところである。実際に、7 月に行われたオープンキャンパスにおいて、学部生 3 名、博士前期課程学生 3 名の女子学生ボランティアが参加して、女子学生のロールモデルを高校生に紹介した。このような努力もあり、女子学生の割合は平成 27 年度は前年度に比べほぼ倍増しており、さらに、所属研究室からサイエンス・エンジェル活動へ参画している女子学生も見受けられるなど、徐々にではあるが成果が出つつあると思われる。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画への取り組みに努力する。また、女子学生、特に博士後期課程の女子学生の数が増えるよう、積極的な大学院への進学等の進路指導を行う。また、研究所公開などで女性研究者・女子学生の活躍の様子を積極的に紹介する。

多元物質科学研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	1 名／44 名中（2%）	1 名／44 名中（2%）	1 名／42 名中（2%）
准 教 授	0 名／33 名中（0%）	0 名／33 名中（0%）	0 名／32 名中（0%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）
助教・助手	3 名／59 名中（5%）	4 名／60 名中（7%）	4 名／58 名中（7%）
計(助手･助教含む)	4 名／138 名中（3%）	5 名／140 名中（4%）	5 名／137 名中（4%）
計(助手･助教除く)	1 名／79 名中（1%）	1 名／80 名中（1%）	1 名／79 名中（1%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
2 名／14 名中（14%）	1 名／7 名中（14%）	1 名／9 名中（11%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

多元研では教員数１３７名中５名が女性教員で４％にとどまっており、非常に少ない状況である。さらに准教授以上が過去３年間１名から増えていない状況である。

３．前年度より改善された点

平成２５年度に「女性教員比率向上への対応に関する申合せ」を制定し、女性教員特別枠を設け平成２７年度には１名を採用した。しかし１名の助教が移動したため、総数としては平成２６年度に比べ増減はなかった。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

多元物質科学研究所の研究分野である理工系（特に工学系）には、女性研究者が少なく候補者が少ないことが障害となっていると思われる。女性教員のサポートだけではなく、女子学生のサポートにも力を入れていく必要がある。また教員数が多いため、女性教員の比率の改善はなかなか困難である。

５．次年度の具体的対応策

今年度、女性教員採用のシステム作りに関するセミナーを開催し、来年度の女性教員採用に向けた方策を策定する予定である。

災害科学国際研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／24 名中（0%）	0 名／23 名中（0%）	0 名／21 名中（0%）
准 教 授	2 名／11 名中（18.2%）	3 名／13 名中（23.1%）	3 名／12 名中（25%）
講　　師	0 名／1 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）
助教・助手	7 名／31 名中（22.6%）	7 名／30 名中（23.3%）	7 名／29 名中（24.1%）
計（助手･助教含む）	9 名／67 名中（13.4%）	10 名／67 名中（14.9%）	10 名／63 名中（15.9%）
計（助手･助教除く）	2 名／36 名中（5.6%）	3 名／37 名中（8.1%）	3 名／34 名中（8.8%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
2 名／13 名中（15.4%）	2 名／4 名中（50%）	1 名／6 名中（16.7%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

災害科学国際研究所では、積極的に女性教員の拡充を目指した採用方針をとっている。これを反映して、全体の女性構成員比率（助手･助教含む）も平成 25 年度 13.4%、平成 26 年度 14.9%、平成 27 年度 15.9%と上昇している。

３．前年度より改善された点

災害科学国際研究所では、東北大学工学系研究科女性研究者育成支援推進室 ALicE での取り組みもあり、女性研究者の就業環境は改善されている。新棟完成に伴い設置された女性休憩室の運用ルールが決定され、教職員・学生を含めて休憩室が使用可能となった。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

現時点で大きな障害はない。

５．次年度の具体的対応策

今後も引き続き、教員の採用においては、男女比率のより一層の向上を目指して努力する。任期制に基づく人事公募においては、男女共同参画の趣旨に副う選考を行うことを引き続き明示する予定である。また、全学や ALicE における男女共同参画への取り組みを所員に一層浸透させ、男女ともに働きやすい職場環境を目指して、男女共同参画を推進していく。

東北アジア研究センター

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／11 名中（0%）	0 名／10 名中（0%）	0 名／11 名中（0%）
准 教 授	0 名／6 名中（0%）	0 名／6 名中（%）	0 名／6 名中（0%）
講　　師	名／名中（%）	名／名中（%）	名／名中（%）
助教・助手	1 名／8 名中（13%）	1 名／7 名中（14%）	1 名／7 名中（14%）
計（助手･助教含む）	1 名／25 名中（4%）	1 名／23 名中（4%）	1 名／24 名中（4%）
計（助手･助教除く）	0 名／17 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）	0 名／17 名中（0%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の数、平成 27 年度は１月１日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
0 名／4 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は３月末の比率、平成 27 年度は１月１日の比率

東北アジア研究センターでは、平成 27 年度に１件の教授人事を行い、公募を行った。応募者に女性も含まれていたが、人事選考の途上で女性応募者が辞退してしまい、採用には至らなかった。この他には専任教員の新規人事はなかった。

３．前年度より改善された点

東北アジア研究センターでは、上記の教授人事１件以外に新規の採用がなかったことから、前年度との比較で女性比率に改善は見られなかった。今後引き続き女性比率改善に努力することにしている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

東北アジア研究センターは、承継枠定員 23 名の比較的小さな部局であることと、予算削減などの影響もあって新規人事を起こす機会自体が限られている。しかしながら、承継枠定員以外の助教・教育研究支援者については、女性の採用に最大限努力している。

５．次年度の具体的対応策

女性研究者の着実な増加を期すための方策を男女共同参画ワーキンググループおよび執行会議で検討し、全体会議で周知する。もし教員採用人事が発生した場合には「男女共同参画推進のための東北大学宣言」の理念に則ってこれを実施する。

平成 28 年度から平成 33 年度までに、女性教員比率の平成 27 年度比 50%増加目標を達成するための努力を行う。

病院

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教　　授	0 名／6 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）
准 教 授	4 名／15 名中（27%）	3 名／17 名中（18%）	3 名／17 名中（18%）
講　　師	7 名／58 名中（12%）	6 名／60 名中（10%）	5 名／60 名中（8%）
助教・助手	59 名／278 名中（21%）	63 名／279 名中（23%）	76 名／292 名中（26%）
計(助手･助教含む)	70 名／357 名中（20%）	72 名／361 名中（20%）	84 名／374 名中（22%）
計(助手･助教除く)	11 名／79 名中（14%）	9 名／82 名中（11%）	8 名／82 名中（10%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の数、平成 27 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
16 名／66 名中（24%）	16 名／84 名中（19%）	24 名／81 名中（30%）

※平成 25 年度、平成 26 年度は 3 月末の比率、平成 27 年度は 1 月 1 日の比率

病院では、平成 27 年度、新規採用者の女性比率が 30%まで高まった。しかし、助教・助手を除く教員数は 82 名中、女性教員が前年度 9 名から 8 名へ減り、10%へ後退した。

３．前年度より改善された点

全学共通の数値目標の中で病院の新規採用者にしめる女性の比率が 30%に達したこと。

新専門医制度に対応した研修プログラムの中で学会の規定が許す限り、子育てをしながら専門医取得を目指す医師の研修受け入れも想定したプログラム策定を目指している。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

1)　院内保育室の定員が 25 名（最もニーズのある 0 歳児は 5 名）と非常に少ない。

2) 医師のキャリアパスでは、博士課程修了時に既に 30 歳台半ばに至る者も多い。よって年齢制限による競争的研究資金、未就学の子供を養育している研究者に限定した両立支援策等への応募を断念せざるを得ない事例がしばしば見られる。

3）病院の教員は大学教員でもあり勤務医でもある。高度医療、重症患者の診療を行いながら研究、教育も担う中で、長時間労働や強い緊張を強いられる場面が多い。

５．次年度の具体的対応策

医学系各部局、教室員会等と連携し、労働や研究環境の見直し、ワークライフバランスに関する取り組みを継続する。講師以上の女性教員比率が低い現状の打開にも必要な取組である。

高度教養教育・学生支援機構

1. 女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職名等	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
教授	名／名中（%）	2 名／18 名中（11.1%）	3 名／21 名中（14.2%）
准教授	名／名中（%）	3 名／17 名中（17.6%）	3 名／17 名中（17.6%）
講師	名／名中（%）	3 名／15 名中（20.0%）	5 名／18 名中（27.7%）
助教・助手	名／名中（%）	9 名／24 名中（37.5%）	7 名／20 名中（35.0%）
計（助手・助教含む）	名／名中（%）	17 名／74 名中（22.9%）	18 名／76 名中（23.6%）
計（助手・助教除く）	名／名中（%）	8 名／50 名中（16.0%）	11 名／56 名中（19.6%）

※1　平成 25 年度，26 年度は 3 月末の数，平成 27 年度は 1 月 1 日の数

※2 平成 26 年 4 月，高等教育開発推進センター，国際交流センター，国際教育院，グローバルラーニングセンター，教養教育院，高度イノベーション博士人財育成 センターを統合し，新たに高度教養教育･学生支援機構を設置

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
名／名中（%）	3 名／8 名中（37.5%）	2 名／8 名中（25.0%）

※平成 25 年度，26 年度は 3 月末の数，平成 27 年度は 1 月 1 日の数

3. 前年度より改善された点

高度教養教育・学生支援機構では，教員公募の際，「東北大学は男女共同参画の促進に積極的に取り組んでおります」と記載しており，平成 26 年度，27 年度ともに，2 名以上の女性教員が採用されている。平成 27 年度の女性教員は，教授 3 名，准教授 3 名，講師 5 名，助教・助手 7 名の計 18 名であり，女性教員比率は教授 14.2%，准教授 17.6%，講師 27.7%，助教・助手 35.0%，計（助手・助教含む）23.6%であった。平成 26 年度と比較すると，教授，准教授，講師および全体において，女性教員比率が増加した。

4. 改善の上で，障害となっていると思われる点

現時点では障害になっている点はないと思われるが，学生相談や学生支援に直接関わる業務センターでは，日常的に多い相談業務に加えて教育・研究活動や大学運営活動も行うため，オーバーワークになりやすい傾向がある。この点は，仕事と育児・介護等との両立において，改善が必要な課題であると考えられる。

5. 次年度からの具体的対応策

引き続き，公募の際に男女共同参画の推進に取り組んでいることを記載し，女性教員の応募の増加を図る。各業務センターで不足人員の配置を行う。

本部事務機構

事務職員（全学）の人事

1　採用状況

平成２７年度の事務職員の新規採用数は１５名である。そのうち、女性職員は１０名であり、新規採用者全体に占める割合は６６．７％となっている。

2　職種別女性職員在職状況

H28. 1. 1 現在

職　種	全体数	女性職員数（内数）	比　率（%）
部　長	15	0	0. 0%
課長・事務長	63	2	3. 2%
課長補佐等	72	8	11. 1%
係長等	304	65	21. 4%
主任	253	113	44. 7%
一般職員	351	190	54. 1%
再雇用職員	20	4	20. 0%
計	1, 078	382	35. 4%

技術職員（全学）の人事

1　採用状況

平成２７年度の技術職員の新規採用数は１５名である。そのうち、女性職員は７名であり、新規採用者全体に占める割合は４６．７％となっている。

2　職種別女性職員在職状況

H28. 1. 1 現在

職　種	全体数	女性職員数（内数）	比　率（%）
統括技術専門員	11	0	0. 0%
技術専門員	31	2	6. 5%
技術専門職員	157	31	19. 7%
技術一般職員	171	45	26. 3%
再雇用職員	80	33	41. 3%
計	450	111	24. 7%

注）医療技術職員（看護師、臨床検査技師等　1, 580 名）を除く。

3　今後の方針（人材の確保）

職員の採用は競争試験を原則とし、合格者への面接等の結果により最終的に採用者を決定するが、面接においては特に行動力、意思力、意欲面を評価している。試験は男女の区別はなく、能力主義、人物本位に行っており、公平性に留意し実施している。

大学の業務は、広範・多岐にわたっており、これまでの教育研究活動の支援業務にとどまらず、大学運営の企画立案に積極的に参画し、大学運営の専門職能集団としての機能を発揮することが求められており、これらの趣旨に添った資質・能力をもった職員の採用・人材育成を行っていく必要がある。

第５章（平成２７年度）男女共同参画推進センターの取組

１　男女共同参画推進センターについて

１）男女共同参画推進センター概要

男女共同参画推進センターは、「男女共同参画推進のための行動指針」（平成２５年８月策定）に基づき、本学の男女共同参画活動を円滑に推進することを目的として平成２６年４月に設置された。センターは男女共同参画委員会の指示の下、女性研究者育成支援に関する施策の実施を中心として男女共同参画推進に取り組んでいる。現在、センター長（担当理事）１名、副センター長（兼務教員）３名、協力教員１名、助教１名、事務補佐員２名の体制で、女性研究者向けイベントの実施、サイエンス・エンジェル活動の運営、ニュースレターの発行、調査研究等を行っている。

２）構成員

センター長	植木　俊哉	理事（総務・国際展開・事務統括担当）
副センター長	大隅　典子	総長特別補佐（男女共同参画担当）／医学系研究科 教授
副センター長	米永　一郎	金属材料研究所 教授
副センター長	田中　真美	医工学研究科／工学研究科 教授（兼務）
協力教員	倉田 祥一朗	薬学研究科 教授
専任教員	保坂　雅子	助教
事務補佐員	野中　久美	
事務補佐員	中戸川　政江	

３）センターミーティング開催状況

センターでは、副センター長（兼務教員）３名、総務課職員４名、センタースタッフからなるセンターミーティングを毎月数回開催し、センター業務の遂行に関わる重要事項を議論している。

平成 27 年

４月１日、４月８日、４月１５日、４月３０日、５月１３日、５月２７日、６月３日、６月１０日、６月１７日、７月１日、７月８日、７月２２日、８月１９日、８月２６日、９月９日、９月３０日、１０月２１日、１１月１１日、１２月２日、１２月９日、１２月１８日

平成 28 年

１月２１日、２月１７日、３月１６日

４）男女共同参画推進センター愛称・ロゴマーク

当センターでは、大学構成員のセンターへの愛着を高め、男女共同参画へのより深い理解を促すため、センターの使命を分かりやすく表現した愛称とロゴマークを設けている。

愛称 「TUMUG（つむぐ）」

「TUMUG（つむぐ）」とは Tohoku University（東北大学）、Movement（運動、活動）、United（団結、協力）、Gender（ジェンダー、男女）からなる頭字語（アクロニム）。

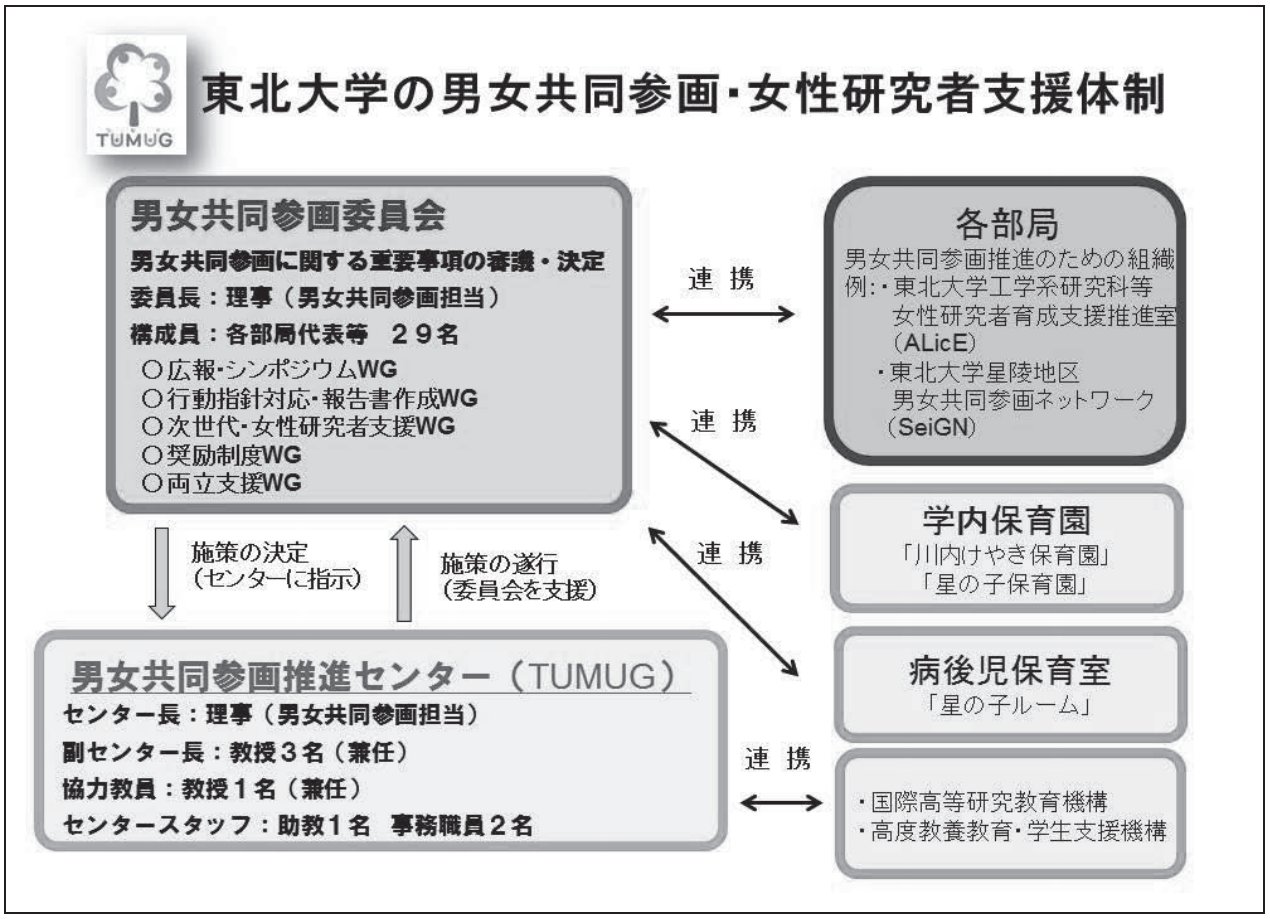
東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組が、ムーブメントとして拡がっていくことを目指している。

ロゴマーク

杜の都仙台を象徴するケヤキの木をモチーフに、人々が手を取り、支え合う様子をイメージしている。また、葉の形は四葉のクローバーにも見え、幸せな未来も想像される。

東北大学男女共同参画推進センターは、年齢・性別等を問わず、誰もが夢や希望を持って、あらゆる分野で活躍できる社会を目指して、男女共同参画の推進に取り組んでいく。

5）男女共同参画推進体制における男女共同参画推進センターの位置づけ



２　平成２７年度活動状況

２．１　両立支援・環境整備

当センターでは、ホームページや女性研究者メーリングリスト、ニュースレターを通じて両立支援に関する制度等に関する情報提供を行った。具体的には、「TUMUG 支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）（以下、TUMUG 支援事業）」募集（１月）、けやき保育園の園児募集（随時）、星の子ルームのニュースレター（年３回）、地域の保育情報等である。特に男女共同参画委員会による TUMUG 支援事業の両立支援のためのプログラム（研究支援要員・ベビーシッター利用料等補助）の募集にあたっては、メーリングリストで女性研究者へ直接案内し、さらにニュースレター第５号で特集記事を組んで大学構成員への広報･周知に尽力した。

本年度から新たに研究と育児の両立を目指す大学構成員が昼食を囲んで交流する場として TUMUG Café を開催することとし、平成２７年度は１回開催した。

（１）第１回 TUMUG Café「研究と育児の『心地よい共存』を目指して」の開催

○日時・場所

２０１６年2月３日（水）１２：００－１３：３０

片平キャンパス　男女共同参画推進センター

○活動概要

梅津　理恵　特任准教授（金属材料研究所）を話題提供者として迎え、自らの子育てをしながらの研究者キャリアについて話題提供していただいた。子育て中の研究者１４名が集まり、それぞれの研究と育児の両立のための工夫について経験を共有し合った。また、募集中であった TUMUG 支援事業や学内保育施設の利用等についても、経験談や意見を交換した。副センター長や総務課職員も参加していたため、参加者の疑問点を解決することができた。

２．２　女性リーダー育成

当センターでは、女性リーダー育成支援の一環として、女性研究者向けの交流会や研究活動に役立つセミナーを開催している。本学では、平成２１年度より人物ならびに学識においてすぐれた女性教授を「沢柳フェロー」と称し、ランチミーティング等の実施により若手女性研究者に対するメンターおよびロールモデルとしての役割を積極的に果たしていただいている。今年度は「沢柳フェローランチミーティング」を３回（通算１４回～１６回目）開催して、女性研究者のネットワーク作りに貢献した。うち１回は、例年通り外部資金獲得セミナーとともに実施した。また、新たに TUMUG Forum（女性研究者による研究発表・交流会）を開催し、着任後５年以内の女性研究者が研究内容および研究成果を発信し、女性に限らず学内の研究者と交流する場を提供した。

女性研究者の研究活動を支援するため、各種公募情報、研修情報、男女共同参画委員会が女性リーダー育成を目的として行う TUMUG 支援事業（リーダー研究支援要員、スタートアップ研究費、研究スキルアップ経費）に関する情報提供も行っている。

最後に、本学の女性教員の活躍に光を当てることを目的として、年２回（５月、１月）、受賞・登用調査を行ってホームページ上で公表している。

（１）平成２７年度第１回沢柳フェローランチミーティング

○日時・場所

２０１５年6月５日（金）１２：００－１３：３０

生命科学プロジェクト総合研究棟「プロジェクト総合研究棟 会議室」

○活動概要

沢柳フェローを中心に女性研究者２０名（うち沢柳フェロー７名）が集い、食事をしながら

研究内容や研究生活について情報交換した。大隅典子副センター長が沢柳フェローの由来等について短いトークを行った後、参加者全員が、各々数分程度自己紹介を行った。

（2）外部資金獲得セミナー・平成２７年度第２回沢柳フェローランチミーティング

○日時・場所

２０１５年9月3日（木）１２：００－１３：３０

片平北門会館　セリシィール

○活動概要

女性研究者１８名（うち沢柳フェロー３名）が集い、食事をしながら研究内容や研究生活について情報交換した。会の前半には寺田　眞浩教授（理学研究科）を講師に迎えて外部資金獲得セミナーを実施した。寺田教授や沢柳フェローからは「申請分野の選択方法をよく検討するとよい」「熱意を伝えることが大切」など具体的な助言があった。質疑応答が活発に交わされ、参加者からは「審査のポイントがよく分かった」「科研費の書き方等に関して、アドバイスをいただける機会がなかったので、ありがたかった」との声が聞かれた。

（3）第１回 TUMUG Forum（女性研究者による研究発表・交流会）・平成２７年度第３回沢柳フェローミーティング（茶話会）

○日時・場所

２０１５年１１月２４日（火）１３：００－１５：３０

青葉山キャンパス　青葉記念会館４階会議室

○活動概要

女性研究者の研究発信および異分野間の人的ネットワーク形成促進を目的として、本学に着任５年以内の女性研究者による研究発表の場を設けた。第１回 TUMUG Forum は工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)、工学研究科、医工学研究科、高度教養教育・学生支援機構と共催で開催した。第１部（工学系）、第２部（文系）の２部構成とし、それぞれ沢柳フェロー（田中　真美教授（医工学研究科）、末松和子教授（高度教養教育・学生支援機構））を座長におき、計４名の女性教員が自らの研究を　分かりやすく説明した。男性教員や大学院生を含む２６名が参加した。研究発表会後には、工学系女性育成支援推進室(ALicE)の休養室および託児室を見学した。また、ALicE と共催で交流会を実施して、参加者同士のネットワーク作りに貢献した。

発表一覧

鶴岡　典子（工学研究科・助教）

「微小還流を用いた皮膚貼り付け型乳酸センサの開発」

Carine J. Yi（災害科学国際研究所・助教）

「GIS を利用した多様な災害分析紹介－USLE モデルを用いた、土壌流出によるセシウム 137 の流出推測など」

有松　唯（学際科学フロンティア研究所・助教）

「国家の起源と成り立ち - 人類史の新たな画期をもとめて - 」

菅　陽子（経済学研究科・講師）

「環境教育を取り入れた日本語クラスの試みー中国大連における実践活動と今後の課題」

２．３　次世代育成

当センターでは、東北大学サイエンス・エンジェルを運用して次世代育成を推進している。平成１８年度より活動している東北大学サイエンス・エンジェルは、自然科学系研究科に所属する

女子大学院生が中高生を対象とした出張セミナーやオープンキャンパス、そして小学生を主な対象とした科学イベントの実施等を通して次世代育成に貢献しつつ、自らも成長するというプログラムである。なお、東北大学サイエンス・エンジェルは、仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援とともに男女共同参画委員会による TUMUG 支援事業の一環として実施されている。

今年度は、各研究科での大学院生オリエンテーションにおいて本センターのリーフレットを配布する等により、本学における男女共同参画の取組の紹介を行った。

また、次世代育成の取組の一つとして、全学教育科目基幹科目（社会論）「ジェンダーと人間社会」を開講した。

全学教育科目基幹科目（社会論）「ジェンダーと人間社会」の提供

ジェンダー教育を目的として、今年度、全学教育科目基幹科目（社会論）「ジェンダーと人間社会」（木曜２限、前期・後期各 15 回、２単位、コーディネーター：三隅　多恵子法学研究科講師）が再開講された。本センターの副センター長３名が担当教員としてそれぞれ１コマずつ担当し、１年生を中心とする学生の男女共同参画への意識醸成に努めた。

「ジェンダーと人間社会」の担当教員および講義内容は以下の通り。

担当教員（５０音順）	講義内容
朝倉　京子（医学系研究科・教授）	「ジェンダーとケアワーク」
大隅　典子（医学系研究科・教授）	「性はどのように決まるか？」
瀧　靖之（加齢医学研究所・教授）	「画像から見る脳の発達、加齢と性差」
田中　真美（医工学研究科/工学研究科・教授）	「工学系における女性研究者・技術者育成の取組と展開」
中村　文子（学際科学フロンティア研究所・助教）	「ジェンダーとはなにか」、「国際社会とジェンダー（1）：女性をめぐる国際制度」、「国際社会とジェンダー（2）：女性をとりまく諸課題」
山元　大輔（生命科学研究科・教授）	「脳と遺伝子からみたジェンダー：ハエが教えてくれたこと」
吉田　浩（経済学研究科・教授）	「男女共同参画科学への招待（1）：統計数値で測る男女平等度、男女共同参画科学への招待」、「男女共同参画科学への招待（2）：男女共同参画の効果、活躍する女性たち（女性研究者、女性ビジネスパーソン）」
米永　一郎（金属材料研究所・教授）	「男女共同参画への東北大学の取組」
李　善姫（東北アジア研究センター・教育支援協力者）	「ジェンダーと文化」、「「再生産労働」のグローバル化と女性たち」、「震災とジェンダー」

「サイエンス・エンジェル活動」

（１）平成２７年度サイエンス・エンジェルオリエンテーション

○日時・場所

２０１５年６月６日（土）１３：３０－１５：３０

片平キャンパス 片平北門会館 エスパス

○活動概要

平成27年度に任命されたSA76名に対し、センター長の参加の下、オリエンテーションを実施した。第1部ではサイエンス・エンジェル活動への理解を助けるための趣旨説明および活動紹介を行

った。特に平成26年度の主な活動（出張セミナー、サイエンスデイ等）について経験者が紹介した。集合写真撮影後、第2部では、今後の活動が円滑に行われるよう活動上の注意事項、事務手続きについて詳細に説明した。なお、当日参加できなかったSAは、後日個別に「活動説明会」に参加した。

○実施者

男女共同参画推進センター：植木　俊哉（理事（総務・国際展開・事務統括担当））、田中　真美（医工学研究科教授）、倉田　祥一朗（薬学研究科教授）、保坂　雅子、野中　久美、中戸川　政江

（２）　スキルアップ講習会「プレゼンテーション力向上研修会」（全２回）

○日時・場所

２０１５年６月２９日（月）１０：００－１１：３０

７月６日（月）１０：００－１２：００

片平キャンパス　知の創出センター　3階講義室

○活動概要

出張セミナー等で役に立つプレゼンテーション力を向上させるための研修会を2回に分けて行った。第1回では、副センター長の大隅　典子教授（医学系研究科）および井上　奈穂助教（農学研究科）による講義を受講した。第2回では、ワークショップに参加した。ワークショップでは事前に準備してきた＜高校生向けの研究紹介＞のスライドを使って5分程度発表し、グループ内で互に批評した上で、全体で気づいたことを共有した。第1回は29名、第2回は24名が参加した。

○実施者

男女共同参画推進センター：　保坂　雅子、野中　久美、中戸川　政江

(3)学都仙台・宮城サイエンスデイ2015への出展

○日時・場所

２０１５年７月１９日（日）９：００－１７：００

青葉山キャンパス　東北大学カタールサイエンスキャンパス

○活動概要

学都「仙台・宮城」サイエンスデイ2015（主催：NPO法人 natural science）において、東北大学カタールサイエンスキャンパスホールを会場にして2つのプログラムを午前（10:00－12:00）および午後（13:30－15:30）に実施した。

工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)と協力して実施した「ちくちく縫って LED 体験」（2014年～）では、小学校3年生～中学校1年の参加者75名に導電糸を使ってエコバックを作ってもらった。

「サイエンス・エンジェルと学ぼう」では、小学校5年生～中学校3年の参加者28名に3グループにわかれてブース（紫キャベツでコースター、振り子メトロノーム、手作りプラネタリウム）を順に回り、原理について説明を聞いた上で、工作や実験をしてもらった。

○実施者

SA

＊ちくちく縫って LED 体験

松島　萌香（理学M1）、坂井　舞（医学M1）、伊藤　史織（薬学M1）、落合　由貴（工学M1）、鍋島　史花（工学 M1）、宮森　智子（工学 M1）、倉田　絵莉（工学 M2）、金　ななせ（農学 M2）、佐藤　明香輪（環境 M1）、山田　あずさ（医工学 M2）

＊サイエンス・エンジェルと学ぼう

【コア】井上　和香（工学M1)、石川　玲美（工学M2)、成田　萌（農学M1)、長谷川　蒔（医工学M2)、藤林　里瑛（医工学 M2）
【サポート】石井　若菜（医学 M1)、安部　瑛里奈（薬学 M1)、大野　敦子（工学 M1)、鳥屋部　果穂（工学 M1)、佐藤　舞子（医工学 M2）
男女共同参画推進センター：保坂　雅子
工学系女性研究者育成支援推進室：瀬戸　文美

（４） オープンキャンパス for 女子高校生 2015

○日時・場所
２０１５年７月２９日（水）・３０日（木）いずれも１２：００−１３：３０
青葉山キャンパス 理学研究科合同A棟 第2・3共通講義室（204・205号室）

○活動概要
理系学部への進学を志す女子高校生の進路選択の一助として、東北大学のオープンキャンパスに参加し、「オープンキャンパス for 女子高生2015 by サイエンス・エンジェル」を2日間にわたり実施した（共催：理学研究科）。各日、若手女性研究者2名およびSA1名による講演（合計30分）と女子高校生とのグループトーク（進路相談・研究紹介）（60分）を行った。1日目は約100名、2日目は約70名の女子高校生およびその家族が来場した。

発表者および発表タイトル
1 日目
「全てが「面白い」から」簡　梅芳（環境科学研究科・助教）
「くすりのサイエンス」一刀　かおり（生命科学研究科・助教）
「星空のロマンと科学〜宇宙の謎を探る天文学」森岡　真代（理学研究科天文学専攻博士後期課程2年）
2 日目
「機能性金属錯体の分析化学的応用」升谷　敦子（環境科学研究科・助教）
「卵子を知り、卵子を活かす」星野　由美（農学研究科・助教）
「整数の奥深さに惹かれて」小澤　友美（理学研究科数学専攻博士後期課程2年）

○実施者
29 日　SA21 名およびセンタースタッフ 3 名
30 日　SA20 名およびセンタースタッフ 2 名
SA
【コア】森岡　真代（理学 D2)、石川　玲美（工学 M2)、近藤　なな（生命 M1)、三浦　佳奈（生命 D2)、長谷川　蒔（医工学 M2)、藤林　里瑛（医工学 M2）
【サポート】所　悠香（理学 M2)、菅井　祥加（理学 D1)、久保　尚子（医学 M1)、松平　泉（医学 M2・29 日のみ)、内藤　祥子（工学 M1)、鍋島　史花（工学 M1)、邉見　ふゆみ（工学 M1)、渡邉　さくら（工学 M1)、那花　友莉恵（農学 M1)、早坂　咲（農学 D2)、角掛　沙也香（情報 M1)、上野　友紀（生命科学 M1)、畠山　ありさ（生命科学 M1)、萱場　敦子（生命科学 D1)、小澤　友美（理学 D2・30 日のみ）
男女共同参画推進センター（保坂　雅子、野中　久美、中戸川　政江（29 日のみ））

(5) ２０１５サイエンススクエアへの出展「LED で不思議な紙工作をしよう―サイエンス・エンジェルと光の冒険―」

○日時・場所
２０１５年８月１日（土）－８月２日（日）終日

国立科学博物館（東京都）

○活動概要

2015サイエンススクエア（主催：独立行政法人国立科学博物館）に出展し、2名のSAが、各日3回にわたりLED 電球と家庭にある電池を使ったカード作りを予め申し込んだ46名（対象年齢：小4～中3）に教えた。A班ではアルミホイルを用いて回路を作り、カードを閉じるとスイッチが入るようにした。B班では立体的なカードを色画用紙で作成し、消しゴムで作ったスイッチを押すと電気が流れるようにした。カードを作成する前には豆電球と LED の違い、電気が流れる仕組み等を持ち帰り可能な資料により分かりやすく説明した。

○実施者

SA

上吉原　怜奈（農学 M1）、堀米　愛（医学系 M1）

男女共同参画推進センター：　保坂　　雅子

（6）楽しい理科のはなし 2015～不思議な体験がいっぱい！～への出展「サイエンス・エンジェルと学ぼう～科学のふしぎ～」

○日時・場所

２０１５年８月２１日（金）　１０：３０－１７：３０

東京エレクトロンホール宮城（仙台市）

○活動概要

「楽しい理科のはなし2015～不思議な体験がいっぱい！～」（主催：河北新報社、東京エレクトロン宮城株式会社）に出展し、主として小学校低学年の子どもを対象に以下の5つのブースで科学の面白さを体験する機会を提供した。

・エコーマイクをつくろう～音のふしぎ
・オレンジパワーでスタンプを作ろう
・カラフル人工いくらを作ろう！
・ドロドロようかいをつかまえよう！
・けんびきょうをのぞいてみよう

各ブースは2名～4名のSAが担当した。実際に参加した人数はブース毎に異なるが、来場者は約500名であった。

○実施者

SA17名（コア10名、サポート7名）、センタースタッフ3名、総務課総務係 1 名

SA

【コア】石井　若菜（医学系 M1）、久保　有美子（医学系 D4）、安部　瑛里奈（薬学 M1）、那花　友莉恵（農学 M1）、相川　奈津美（生命科学 M1）、近藤　なな（生命科学 M1）、髙楠　有希（生命科学 M1）、吉井　千尋（生命科学 M1）、三浦　佳奈（生命科学 D2）、関　亜美（環境科学 M1）

【サポート】菊地　まどか（医学系 D1）、上吉原　怜奈（農学 M1）、小舘　愛（農学 M1）、小柳　友佳子（農学 M1）、松崎　郷子（農学 M1）、梶野　祐未（生命科学 M1）、塩谷　真帆（医工学 D1）

男女共同参画推進センター：　保坂　　雅子、野中　　久美、中戸川　　政江

（7）片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」への出展　特別企画「サイエンス・エンジェルと話そう！：女子の視点から見た理系の学び」

○日時・場所

２０１５年１０月１０日（土）、１１日（日）１０：００－１２：００；１３：３０－

１５：３０
片平キャンパス　生命科学プロジェクト総合研究棟　会議室103号室
○活動概要
東北大学附置研究所等一般公開片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」に特別企画として出展し、理系学部への進学を検討している女子中高生およびその保護者を対象に、SAが自らの経験（理系学部への進路決定、大学・学部選択、大学生活、大学での学習・研究等）を踏まえて講演（各回2本）とグループトークを行って理系進路選択を支援した。2日間とも午前・午後の2回実施し、合計19名のSA（うちスピーカー7名）が参加した。来場者数は合計32名（うち高校生16名）、保護者を含めると39名であった。
○実施者
10日　SA14名（うちコアメンバー3名）およびセンタースタッフ1名
11日　SA12名（うちコアメンバー4名）およびセンタースタッフ1名
SA
【コア】坂井　舞（医学系 M1)、宮原　杏奈（医学系 M1)、髙木　聖実（農学 M1)、上野　友紀（生命科学 M1)、近藤　なな（生命科学 M1)、畠山　ありさ（生命科学 M1)
【サポート】松島　萌香（理学 M1)、古樫　加奈子（理学 M2)、菅井　祥加（理学 D1)、成田　愛（医学系 M1)、伊藤　史織（薬学 M1)、井上　和香（工学 M1)、鍋島　史花（工学 M1)、邉見　ふゆみ（工学 M1)、上吉原　怜奈（農学 M1)、成田　萌（農学 M1)、佐藤　あや華（生命科学 M1)、佐藤　舞子（医工学 M2)、山田　あずさ（医工学 M2)、
男女共同参画推進センター：　保坂　雅子

講演一覧（講演者部局順）
「フラスコでつくる人工 DNA/RNA～化学と生物の境目～」（古樫　加奈子（理学　M1））
「カビ菌感染時の免疫機序の解明に挑戦！」（宮原　杏奈（医学系　M1））
「カビから『薬のもと』を取る」（伊藤　史織（薬学　M1））
「医工学の魅力～工学から歯学へのアプローチ～」（山田　あずさ（医工学 M2））
「心の動きを知るために遺伝子と脳はどのように関わっているのだろうか」（坂井　舞（医学系　M1））
「微生物の力は無限大～環境汚染物質を分解できる細菌たち～」（佐藤　あや華（生命科学　M1））
「寿命延長のメカニズムを探る」（近藤　なな（生命科学　M1））

(8)平成27年度　みやぎサイエンスフェスタへの出展
○日時・場所
２０１５年１１月１４日（土）１１：４５－１２：３５
宮城県仙台第三高等学校（仙台市）
○活動概要
「平成27年度みやぎサイエンスフェスタ」（主催：宮城県教育委員会、共催：宮城県仙台第三高等学校）に出展し、仙台第三高等学校および SSH 連携校等の生徒を対象にしたサイエンスカフェにおいて、SA2名が各々20分間自らの研究の背景やその内容等について講演（「素数の不思議を垣間見る」（小澤）、「科学と医療－がん細胞を狙いうつ－」（望月　麻衣））し、科学の面白さを伝えた。
○実施者
SA
小澤　友美（理学 D2)、望月　麻衣（医学系 D3）

(9)サイエンスアゴラ2015への出展 「サイエンス・エンジェルと語ろう:理系女子の現在・過去・未来」
○日時・場所
２０１５年１１月１４日（土）・１５日（日）終日
産業技術総合研究所 臨海副都心センター別館 11階多目的室(東京・お台場地域)
○活動概要
日本最大級の科学フォーラム「サイエンスアゴラ2015 つくろう、科学とともにある社会」(主催:国立研究開発法人科学技術振興機構)に出展し、ポスターによる東北大学SA活動の紹介、SAアンケート調査2015の報告、SAの研究紹介および座談会を行った。座談会では、1日2回各回1時間にわたり、SA2名と参加者が個人的な経験を踏まえて科学と理系女子について話し合った。
主な話題は以下の通り。
・「理系女子」と言われることについてどう考えるか。
・どうしたら理系女子が増えるのか。
・理系女子、特に博士課程の学生は特別視されすぎているのではないか。
・女性だからこそ困っていることはないか。
・理系女子として行う出張セミナーではどんなことを伝えたらよいか。
・研究をしていく上で女性ならではの利点があると感じたことはないか。
なお、座談会には合わせて約30名が参加し、優れた企画に対して主催・共催・協力・協賛機関が授与する賞として新たに設けられた「KADOKAWA賞」を株式会社KADOKAWAより受賞した。
○実施者
SA
森岡 真代(理学 D2)、早坂 咲(農学 D2)
男女共同参画推進センター: 保坂 雅子

（１０）平成２７年度サイエンス・エンジェル活動報告会
○日時・場所
２０１６年3月5日（土）１３：３０－１５：３０
片平キャンパス 片平北門会館２Ｆエスパス
○活動概要
平成２７年度のサイエンス・エンジェル活動の集大成として実施した。８名のＳＡがオープンキャンパス、出張セミナー、体験型科学イベント（サイエンスデイ、楽しい理科のはなし)、その他（片平まつり、ＳＡセミナーfor 山形西高等学校、サイエンスアゴラ２０１５）について、実施概要や感想等を報告した。ＳＡＯＧである塩飽由香利氏（歯学研究科・助教）が「先輩から後輩へ 女性研究者からのメッセージ」と題して講演を行った。また名古屋大学理系女子学生コミュニティあかりんご隊について学生代表２名（山下侑里恵氏（名古屋大学工学研究科博士前期課程２年)、矢野ひとみ氏（同理学部３年）が紹介した。当日はＳＡ２０名を含む４５名（うち学外者１３名）が参加した。
○実施者
ＳＡ（発表者）
石川 玲美 (工学 M2)、井上 和香（工学 M1)、坂井 舞（医学系 M1)、関 亜美（環境科学 M1)、那花 友莉恵（農学 M1)、藤林 里瑛（医工学 M2)、松本 郁美（医学系 M2)、森岡 真代（理学 D2)
男女共同参画推進センター:米永 一郎(金属材料研究所教授)、田中 真美(医工学研究科教授)、倉田 祥一朗（薬学研究科教授)、保坂 雅子、野中 久美、中戸川 政江

（１１）高校生に対するセミナーの実施（出張セミナーおよびＳＡセミナー）

１）秋田県立秋田南高等学校（秋田市）

○日時・場所

２０１５年6月２３日（火）１３：１０－１６：００

秋田県立秋田南高等学校（秋田市）

○活動概要

２・３年生を対象にした「学部学科ガイダンスおよび入試について」において、大学での勉強および入試について東北大学医学部保健学科を例に紹介した。5校時（１３：３０－１４：３０）と6校時（１４：５０－１５：５０）にそれぞれ生徒約６０名および教員に対して６０分間講演を行った。合計生徒１１７名、教員２０名程度が参加した。

○実施ＳＡ

宮原　杏奈（医学系 M1）

２）山形県立山形北高等学校

○日時・場所

２０１５年8月１９日（水）１４：００－１５：３０

山形県立山形北高等学校・大多目的室（山形市）

○活動概要

２年生を中心とした女子高校生に対して講演（２０分）およびグループトーク（３０分）を行った。講演では、どんな点に魅力を感じて現在の研究をしているか、理工農学系学部の卒業後の進路について話した。

○実施ＳＡ

大野　敦子（工学 M2）、山田　あずさ（医工学 M2）

3）茨城県立竜ヶ崎第一高等学校

○日時･場所

２０１５年9月４日（金）・５日（土）

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校(茨城県竜ケ崎市)

○活動概要

学習相談会(9月4日)

全学年希望者を対象に、自身の経験を踏まえた学習アドバイスや東北大学を目指す生徒に対してアドバイスを与えた(50分間)。

SAセミナー(講演)(9月5日)

1年生の希望生徒を対象に、研究内容やキャンパスライフの紹介、進路決定に至る経緯や今後の展望等について各自45分間の講演を行い、進路決定の一助とした。

○実施SA

藤林　里瑛(医工学 M2)、渡邊　あゆ美(理学 M2)

４）鳥取県立倉吉東高等学校

○日時・場所

２０１５年9月２４日（木）１５：３０－１７：３０

鳥取県立倉吉東高等学校（倉吉市）

○活動概要

ＳＡの母校において、１～２年生の希望者４８名を対象に東北大学や研究の紹介、進路選択な

どについて講演を行い、講演終了後は、希望者と座談会を行った。なお、本出張セミナーは母校出張セミナーとして行い、高校との交渉・準備も含めてＳＡ（松本　郁美）が行った。

○実施ＳＡ

松本　郁美（医学系 M2)、宮森　智子（工学 M1）

５）宮城県石巻西高等学校

○日時・場所

２０１５年１１月２０日（金）

９：４０－１０：４０および１１：００－１２：００

宮城県石巻西高等学校（石巻市）

○活動概要

オータムセミナーという１・２年生を対象とした進路指導行事の一部において、医療・看護系への進学を希望する女子生徒に対して、保健・検査分野での大学での学習および職業（看護師・助産師・保健師・放射線技師等）について講演者の進路選択の経験や研究内容をまじえて講演を行った。１校時目１７名、２校時目３９名、合計５６名が受講した。

○実施ＳＡ

樋渡　麻衣（医学系 M1）

６）山形県立山形西高等学校

○日時・場所

２０１５年１１月２１日（土）１０：００－１４：３０

片平キャンパス　片平北門会館エスパスおよび各研究室（青葉山、星陵キャンパス）

○活動概要

山形県立山形西高等学校の女子生徒１年生３１名に対して、講演およびグループトークにより進路選択や大学での学習や生活についてアドバイスを与えた。講演は２名のＳＡがそれぞれ２０分間程度行い、グループトークはＳＡ１名に高校生３－４名が参加する形で行った。高校 OG で本学農学部の学生６名もグループトークに参加した。昼食後は、７－８名のグループに分かれ、ＳＡ４名の研究室を約１時間見学した。

○実施者

ＳＡ

【コア】坂井　舞（医学系 M1)、成田 愛（医学系 M1)、石川　玲美（工学 M2)、山田　あずさ（医工学 M2）

【サポート】倉田　絵莉（工学 M2)、成田　萌（農学 M1)、成田　佳寿美（農学 M2)、池川　未歩（環境科学 M1）

男女共同参画推進センター：　保坂　雅子

７）宮城県宮城第一高等学校

○日時・場所

２０１５年１２月４日（金）１２：００－１２：５５（４校時）；１３：００－１３：３０

宮城県宮城第一高等学校（仙台市）

○活動概要

ミヤイチ☆キャンパスにおいて、希望に応じて３班（工学系、薬学・農学系、医療系）に分かれた理数科１年生８０名の生徒に対して、宮城県宮城第一高等学校出身者２名を含むＳＡ６名が大学での研究の内容や大学生活などについて講演し、生徒の進学意識、学習への意欲をより高める契機を提供した。終了後は３年生１０名からの質問も受け付けた。なお、共同通信社による取

材もあった。
○実施者
ＳＡ
及川　真紀（医学系 M1)、樋渡　麻衣（医学系 M1)、伊藤　史織（薬学 M1)、落合　由貴（工学 M1)、多田　明日翔（農学 M2)、石井　彩子（工学 D2)
男女共同参画推進センター：　保坂　雅子

8）山形県立山形東高等学校
○日時・場所
２０１６年1月３０日（土）１３：１５－１５：１５
山形県立山形東高等学校（山形市）
○活動概要
理系学部での学びと将来の選択肢に関する理解を深めてもらうことを目的として、2年生理系女子３５名および1年生希望者９名、合計４４名を対象として講演（３０分）およびグループトーク（３０分）を行った。
○実施SA
滝沢　翠里(工学 M2)、邉見　ふゆみ(工学 M1)、松本　郁美(医学系 M2)

9）青森県立三本木高等学校
○日時・場所
２０１６年2月１５日（月）１５：３０－１７：３０
青森県立三本木高等学校（十和田市）
○活動概要
２年生理系女子（８９名）を対象として理系学部での学びと将来の選択肢に関する理解を深めることをねらって、講演（３０分）および質疑応答（１０分）を行った。各ＳＡは4か所（視聴覚室、生物室、物理室、第２演習室、２学年教室）に分かれ、各々１０数名～２０数名の高校生を相手に、自らの高校生活、進路選択の経緯、大学での研究や将来の夢について２度講演した。
○実施ＳＡ
内山　愛子（理学 M2)、鳥屋部　果穂（工学 M1)、那花　友莉恵（農学 M1）、吉田　薫（医学系 M1)
男女共同参画推進センター：　保坂　雅子

１０）仙台白百合中等・高等学校
○日時・場所
２０１６年3月９日（水）１５：３０－１７：３０
仙台白百合中等高等学校（仙台市）
○活動概要
中学３年生（９２名）を対象に、大学に入った後の自分を想像してもらうため、仙台白百合出身者であるＳＡが理系の学部での学習や研究について講演した。第４回目となる講演会には教員６名を含めて約１００名が参加した。
○実施ＳＡ
落合　由貴（工学 M1）、三浦　佳奈（生命科学 D2)

２．４　顕彰制度

当センターは、男女共同参画委員会が実施する澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞および同男女共同参画参画奨励賞の公募にあたっては関係諸機関にメールを送る等して周知に協力した。

２．５　地域連携

当センターが運用する東北大学サイエンス・エンジェルの活動は主に仙台市で行っているため、地域の高校やＮＰＯ法人、新聞社等との連携や協力を日常的に行っている。

２．６　国際化対応

当センターでは、ホームページの一部の情報を英語で表記する等して国際化対応を進めている。

２．７　支援推進体制

恒常的支援体制として、本センターを置き、男女共同参画活動を円滑に推進するために活動している。

3　平成 27 年度活動実績一覧

日付	事項	区分
4月16日	平成27年度サイエンス・エンジェル第一次応募者採択	次世代支援
4月28日	第一回研究スキルアップ経費応募者採択	女性リーダー育成
5月	新規採用教員情報およびML用の情報収集	支援推進体制
5月22日	仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業募集	次世代支援
5月22日	第2回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞募集	顕彰制度
6月5日	第1回沢柳フェローランチミーティング開催	女性リーダー育成
5月20日	平成26年度サイエンス・エンジェル第二次応募者採択	次世代支援
6月6日	平成27年度サイエンス・エンジェルオリエンテーション実施	次世代支援
6月23日	出張セミナー　秋田県立秋田南高等学校	次世代支援
6月29日・7月6日	ＳＡスキルアップ講習会「プレゼンテーション力向上研修会」 全２回実施	次世代支援
7月19日	「学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2015」への出展	次世代支援
7月23日	男女共同参画推進センター（TUMUG）ニュースレター第3号発行	支援推進体制
7月30日・31日	オープンキャンパスfor女子高校生2015の実施	次世代支援／女性リーダー育成
8月1日・2日	「2015サイエンススクエア」への出展	次世代支援
8月19日	出張セミナー　山形県立山形北高等学校	次世代支援
8月21日	「楽しい理科のはなし～不思議の箱をあけよう～」への出展	次世代支援
9月3日	「外部資金獲得セミナー」／第2回沢柳フェローランチミーティング	女性リーダー育成
9月4日・5日	出張セミナー　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校	次世代支援
9月22日	第2回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞　受賞課題決定	顕彰制度
9月24日	母校出張セミナー　鳥取県倉吉東高等学校	次世代支援
9月24日	日本遺伝学会第87回大会男女共同参画ランチョンワークショップ共催	
9月29日	高度教養教育・学生支援機構主催「教育関係共同利用拠点提供プログラム」開講の案内	女性リーダー育成
9月30日	国際高等研究教育機構・国際高等研究教育院主催「融合領域研究合同講義」開講の案内	女性リーダー育成
10月10日・11日	東北大学附置研究所等一般公開　片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」への出展	次世代支援
10月17日	第13回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「国際的な視点から見た男女共同参画の推進」への参加	シンポジウム
10月30日	第二回研究スキルアップ経費応募者採択	女性リーダー育成
11月10日	男女共同参画推進センター（TUMUG）ニュースレター第4号発行	支援推進体制
11月14日	「みやぎサイエンスフェスタ（主催：宮城県教育委員会）」への出展	次世代支援
11月14日・15日	「サイエンスアゴラ2015　つくろう、科学とともにある社会」への出展	次世代支援
11月20日	出張セミナー　宮城県石巻西高等学校	次世代支援
11月21日	東北大学サイエンス・エンジェルセミナーfor 山形県立山形西高等学校開催	次世代支援
11月21日	平成27年度第12回東北大学男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」開催	シンポジウム
11月21日	研究スキルアップ経費利用者によるシンポジウムでのポスター発表	女性リーダー育成
11月24日	第1回TUMUG Forum （女性研究者研究発表・交流会）開催	女性リーダー育成
11月24日	第3回沢柳フェロー茶話会開催	女性リーダー育成
12月4日	出張セミナー　宮城県宮城第一高等学校	次世代支援
12月14日	平成27年度科学技術人材育成費補助事業シンポジウムへの参加	シンポジウム
1月26日	平成28年TUMUG支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）の募集	支援推進体制
1月28日	男女共同参画推進センター（TUMUG）ニュースレター第5号発行	支援推進体制
1月30日	出張セミナー　山形県立山形東高等学校	次世代支援
2月3日	第1回TUMUG Café開催	両立支援・環境整備
2月15日	出張セミナー　青森県立三本木高等学校	次世代支援
3月	SAパンフレット「サイエンスエンジェル活動報告2015」発行	次世代支援
3月5日	平成27年度サイエンス・エンジェル活動報告会実施	次世代支援

3月9日	出張セミナー　仙台白百合学園高等学校	次世代支援
3月23日	第4回多元研男女共同参画推進セミナー共催	女性リーダー育成

学外での活動（講演・調査・評価委員）

平成27年度	岩手大学「いわて の復興に貢献する女性研究者支援」プログラム外部評価委員会委員長	田中　真美
8月19日	平成27年度サイエンス・リーダーズ・キャンプ	田中　真美
9月24日	日本遺伝学会第87回大会男女共同参画ランチョンワークショップ「男女共同参画への東北大学の取組」講演	田中　真美
12月7日	東京医科歯科大学「女性研究者とダイバーシティー」講演	大隅　典子
2月13日	学都仙台コンソーシアム講座仙台学2015「仙台の理系女子」講師	保坂　雅子

学内での活動（講演・調査）

平成27年度	川内けやき保育園運営会議　副委員長	田中　真美
平成27年度	東北大学星の子保育園運営会議委員	田中　真美
平成27年度	東北大学病院病後児保育室運営委員会委員	田中　真美
5月～（継続中）	病院女性医師支援推進室の調査へのアドバイス	保坂　雅子
2月1日	農学研究科FD講演会「男女共同参画について」講演	大隅　典子
2月23日	多元物質科学研究所シンポジウム　パネルディスカッション～女性教員採用に向けたシステムづくり～パネリストとして参加	大隅　典子

男女共同参画推進センターへの来訪

9月8日	兵庫県立大学女性研究者支援室　三浦永理氏・櫻井麗賀氏	田中　真美・保坂　雅子
2月10日	株式会社日立製作所　CSR環境戦略本部・社会貢献部　高野美樹氏	田中　真美・保坂　雅子
3月5日	大阪府立大学ダイバーシティ研究環境研究所　白石恵美氏 同女性研究者支援センター　中野恭子氏	田中　真美・倉田　祥一朗
3月14日	大阪大学教育学習支援センター　浦田　悠氏	大隅　典子・保坂　雅子

取材/報道

9月27日	河北新報「楽しい理科の話2015」	新聞掲載
10月4日	日刊工業新聞「日本の未来担う女性研究者、活躍をどう後押しするか」	新聞掲載（Web版）
1月19日	河北新報「理系女子身近に：東北大院生グループ結成10年目」	新聞掲載

４　平成 27 年度男女共同参画・女性研究者支援事業について

女性研究者の育児と仕事の両立及び女性リーダーの育成、次世代育成を目的として、下記 7 つの支援制度を実施した。

１　研究支援要員

子供を持つ自然科学系女性研究者が出産、育児等を理由に研究を断念することがないよう、研究と育児を両立させることを目的として、研究支援要員（時間雇用職員）を雇用する人件費の一部補助を行う。（上限 200 万円）

＜平成 27 年度採択者＞

Ｎｏ	部局	職名	氏名
1	病院	助教	舘脇　康子
2	病院	助教	森　菜緒子
3	歯学研究科	助教	逸見　晶子
4	薬学研究科	助教	巻出　久美子
5	薬学研究科	助教	佐藤　恵美子
6	多元物質科学研究所	助教	宇井　美穂子
7	多元物質科学研究所	助教	朱　慧娥
8	環境科学研究科	助教	簡　梅芳
9	学術資源研究公開センター	助教	黒柳　あずみ
10	原子分子材料科学高等研究機構	准教授	林　育菁

＜利用者の声（一部抜粋）＞

・今回研究支援要員に来ていただき、大半の事務作業をまとめていただくことができた。また、実習で中断しなくてはならなかった作業も継続してできるようになり、実験が進んだ。また研究データもまとめていただき、その間に学生に対する研究指導や論文作成に時間を費やすことができた。

・育児と業務に負われる日々の中で、研究支援要員の多大な貢献により、研究の手間のかかる被験者や共同研究機関とのアレンジメント、専門的知識と技術を要する画像解析も順調に進めていくことができています。今年は研究で得られたデータの一部を国内外の学会で発表することができ、現在はこれに関連して 2 本の論文を執筆、投稿中です。8 月からは研究により力を入れられるポストに移り、さらに研究のグレードアップと自身のキャリアアップが実現しました。これもすべて研究支援要員の働きによるものと心から感謝しております。

2　研究支援要員（シェア型）

子供を持つ自然科学系女性研究者が出産、育児等を理由に研究を断念することがないよう、研究と育児を両立させることを目的として、男女共同参画推進センターより事務補佐員を派遣する（採択者同士で事務補佐員をシェア）。

＜平成 27 年度採択者＞

Ｎｏ	部局	職名	氏名
1	病院	准教授	宮崎　真理子
2	医学系研究科	教授	大隅　典子
3	工学研究科	准教授	北川　尚美
4	情報科学研究科	准教授	福泉　麗佳
5	災害科学国際研究所	助教	王　欣
6	医学系研究科	助教	中村　康香

＜利用者の声（一部抜粋・要約）＞

・事務的な仕事を担当してもらうことにより研究・教育の仕事に集中できた。

・研究や教育の時間の確保が集中的に必要な時に、事務作業に割く時間を削減できたことはとても有益であった。

3　ベビーシッター利用料等補助

子供を持つ研究者が出産・育児等を理由に研究を断念することがないよう、研究と育児を両立させることを目的として、ベビーシッターや託児室の利用料等を補助する。（上限 10 万円）

＜平成 27 年度採択者＞

Ｎｏ	部局	職名	氏名
1	知の創出センター	特任助教	鮑　園園
2	文学研究科	准教授	黒岩　卓
3	法学研究科	教授	森田　果
4	経済研究科	D1	王　珊
5	理学研究科	助教	藤野　智子
6	医学系研究科	助教	吉崎　嘉一
7	医学系研究科	D4	久保　有美子
8	医学系研究科	D3	菅井　千奈美
9	医学系研究科	D3	坂村　佐知
10	医学系研究科	D3	佐藤　悠子
11	歯学研究科	D4	滝澤　愛子

12	歯学研究科	D2	山口　知子
13	工学研究科	学振 PD	Maryam saadatmand
14	工学研究科	特任准教授	WEBECK Elizabeth
15	工学研究科	助教	阿部　博志
16	工学研究科	助教	菊池　圭子
17	農学研究科	准教授	米澤　千夏
18	農学研究科	研究支援者	尾間　由佳子
19	生命科学研究科	研究支援者	大野　ゆかり
20	生命科学研究科	D2	YILMAZER YASEMIN
21	情報科学研究科	准教授	福泉　麗佳
22	情報科学研究科	助教	鈴木　顕
23	流体科学研究所	准教授	伊賀　由佳
24	多元物質科学研究所	准教授	桐島　陽
25	多元物質科学研究所	助教	朱　慧娥
26	東北メディカル・メガバンク機構	助教	小林　朋子
27	災害科学国際研究所	助教	王　欣
28	学術資源研究公開センター	助教	黒柳　あずみ
29	原子分子材料科学高等研究機構	准教授	林　育菁
30	工学研究科	D2	PAULA CECILIA SOTO RIOS
31	災害科学国際研究所	特任助教	中鉢　奈津子
32	文学研究科	助教	泉　啓
33	農学研究科	D3	宮里　かつ代
34	金属材料研究所	研究員	齋藤　美穂
35	環境科学研究科	助教	簡　梅芳
36	医学系研究科	D2	阿部　瑠璃
37	薬学研究科	助教	松尾　芳隆
38	工学研究科	助手	韓　放

＜利用者の声（一部抜粋・要約）＞

・最新の情報や研究成果を得る上で有用な研究会や講演会が通常の保育時間外に開かれることも多く、このようなものに参加する上でも子供を預けられたので非常に助かった。

・遠方での学会開催時に子供同伴で参加する場合のベビーシッター費用も援助いただけたことで、自分の研究成果を多くの研究者に見てもらい、今後の研究を進める上での有用な示唆を得ることができた。

・出張する度、残業する度に１万円、２万円とお給料がシッター代に消えていくむなしい

状況から脱却でき、積極的に様々な活動に参画することができた。また、日帰り可能な場所での講演会は気軽に引き受けることができるようになり、研究成果をいち早く学協会や社会に向けて公表できるようになった。

4　スタートアップ研究費

世界トップリーダーとなるような広い学問領域を見渡せる女性リーダーの育成を目的として、新規採用の女性研究者へスタートアップ研究費を支援する。（採用 1 年目：上限 100 万円、採用 2 年目：50 万円）

＜平成 27 年度採択者＞

Ｎｏ	区分	部局	職名	氏名
1	２年目	経済学研究科	准教授	金　熙珍
2	２年目	生命科学研究科	助教	一刀　かおり
3	２年目	病院	助教	小川　佳子
4	１年目	法学研究科	准教授	温　笑侗
5	１年目	法学研究科	助教	Roots Maia
6	１年目	医学系研究科	助教	松生　香里
7	１年目	理学研究科	助教	黒柳　あずみ
8	１年目	薬学研究科	助教	水野　夏実
9	１年目	情報科学研究科	助教	西　羽美
10	１年目	生命科学研究科	教授	経塚　淳子
11	１年目	環境科学研究科	助教	簡　梅芳
12	１年目	金属材料研究所	助教	仲村　愛
13	１年目	多元物質科学研究所	助教	朱　慧娥

＜利用者の声（一部抜粋・要約）＞

・２年間に渡り運営資金を提供して頂けるため、研究の基盤となる重要な実験を十分に検討することができました。得られた成果を基に外部資金の取得を目指していきたいと思います。

・本制度は、科研費などでは購入しにくい設備備品（例えば、実験台、作業台、パソコンなど）を購入することができ、スタートアップ経費としてとても有意義であった。

5　研究スキルアップ経費

世界トップリーダーとなるような広い学問領域を見渡せる女性リーダーの育成を目的として、研究スキルアップ経費として平成 27 年 5 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日の期間に開催される会議、シンポジウム、研究会等へ参加する女性研究者に、旅費、登録料、論文校閲費等の一部を支給する。年 2 回。（海外の場合 : 上限 40 万円、国内の場合 : 上限 15 万円）

＜平成 27 年度採択者（1 回目）＞

Ｎｏ	区分	部局	職名	氏名
1	国外	法学研究科	准教授	温　笑侗
2	国外	経済学研究科	准教授	井深　陽子
3	国外	理学研究科	准教授	関口　仁子
4	国外	医学系研究科	准教授	吉井　初美
5	国外	薬学研究科	講師	吉田　浩子
6	国外	工学研究科	助教	古川　幸
7	国外	農学研究科	助教	井上　奈穂
8	国外	農学研究科	助教	日出間　志寿
9	国外	多元物質科学研究所	助教	西本　一恵
10	国外	東北アジア研究センター	特任助教	前田　しほ
11	国外	災害科学国際研究所	助教	Carine　J.　Yi
12	国外	災害科学国際研究所	助教	Maly Elizabeth
13	国内	薬学研究科	助教	佐藤　恵美子
14	国内	農学研究科	助教	後藤　知子
15	国内	情報科学研究科	助教	西　羽美

＜平成 27 年度採択者（2 回目）＞

Ｎｏ	区分	部局	職名	氏名
1	国外	文学研究科	准教授	村上　祐子
2	国外	医学系研究科	助教	田口　敦子
3	国外	医学系研究科	助教	Samaneh Yazdanikivi
4	国外	流体科学研究所	准教授	伊賀　由佳
5	国外	多元物質科学研究所	助教	宇井　美穂子
6	国外	多元物質科学研究所	助教	朱　慧娥
7	国外	東北メディカル・メガバンク機構	助教	佐藤　ゆき
8	国外	東北大学病院	助教	山本　多恵
9	国外	東北大学病院	助教	中目　亜矢子
10	国外	東北大学病院	助教	藤川　真由
11	国外	東北大学病院	助教	森　菜緒子
12	国外	東北大学病院	助教	福島　梓
13	国内	歯学研究科	助教	塩飽　由香利
14	国内	薬学研究科	助教	佐藤　恵美子

15	国内	加齢医学研究所	助教	伊藤　亜里
16	国内	加齢医学研究所	助教	小林　美穂
17	国内	東北メディカル・メガバンク機構	助教	石黒　真美
18	国内	病院	助教	古積　麻衣子
19	国内	理学研究科	助教	藤野　智子

＜利用者の声（一部抜粋・要約）＞

・研究スキルアップ経費を助成いただき、経済的支援のみならず、研究の原動力となる大きな励みも得られ、大変ありがたく感謝しております。

・外部研究費の獲得が難しい課題に対して、このような支援をいただき大変助かりました。

・この出張で成果報告を行ったことで、２件の共同研究にこぎつけることができ、今後の研究の進展に非常に役立った。

６　サイエンス･エンジェル

次世代の女性研究者の育成補助、並びに自然科学研究に従事する使命・責任感を深めさせることを目的として、自然科学系部局に在籍する大学院女子学生をサイエンス・エンジェルとして任命し、中高生を対象とした次世代育成活動を行う。

＜平成 27 年度採択者＞

Ｎｏ	部局	学年	氏名
1	理学研究科	D2	森岡　真代
2	理学研究科	D1	菅井　祥加
3	理学研究科	M2	渡邊　あゆ美
4	理学研究科	M1	原山　麻奈美
5	理学研究科	M1	芳井　朝美
6	薬学研究科	M1	安部　瑛里奈
7	薬学研究科	M1	伊藤　史織
8	工学研究科	M2	石川　玲美
9	工学研究科	M2	倉田　絵莉
10	工学研究科	M2	滝沢　翠里
11	工学研究科	M1	井上　和香
12	工学研究科	M1	鍋島　史花
13	農学研究科	D2	早坂　咲
14	農学研究科	M2	安西　沙織
15	農学研究科	M2	金　ななせ

16	農学研究科	M2	成田　佳寿美
17	農学研究科	M2	多田　明日翔
18	農学研究科	M1	飯田　ひかる
19	農学研究科	M1	小柳　友佳子
20	農学研究科	M1	成田　萌
21	農学研究科	M1	松崎　郷子
22	生命科学研究科	D3	阿部　彰子
23	生命科学研究科	D2	三浦　佳奈
24	生命科学研究科	M2	中村　咲耶
25	生命科学研究科	M2	福井　友里子
26	生命科学研究科	M1	櫛間　桃子
27	生命科学研究科	M1	櫻田　茜
28	生命科学研究科	M1	畠山　ありさ
29	環境科学研究科	M2	沼賀　菜々美
30	環境科学研究科	M1	佐藤　明香輪
31	医工学研究科	D1	塩谷　真帆
32	医工学研究科	M2	佐藤　舞子
33	医工学研究科	M2	長谷川　蒔
34	医工学研究科	M2	藤林　里瑛
35	医工学研究科	M2	山田　あずさ
36	理学研究科	M2	内山　愛子
37	理学研究科	M2	古樫　加奈子
38	理学研究科	M2	所　悠香
39	理学研究科	M1	秋枝　智美
40	理学研究科	M1	松島　萌香
41	医学系研究科	D4	久保　有美子
42	医学系研究科	D1	菊地　まどか
43	医学系研究科	M2	松平　泉
44	医学系研究科	M2	松本　郁美
45	医学系研究科	M1	石井　若菜
46	医学系研究科	M1	及川　真紀
47	医学系研究科	M1	久保　尚子
48	医学系研究科	M1	坂井　舞
49	医学系研究科	M1	成田　愛
50	医学系研究科	M1	樋渡　麻衣

51	医学系研究科	M1	堀米　愛
52	医学系研究科	M1	宮原　杏奈
53	医学系研究科	M1	吉田　薫
54	歯学研究科	D3	龍　剣蘭
55	歯学研究科	D1	山内　しのぶ
56	薬学研究科	D2	山田　香織
57	工学研究科	M1	安西　瞳
58	工学研究科	M1	大野　敦子
59	工学研究科	M1	落合　由貴
60	工学研究科	M1	鳥屋部　果穂
61	工学研究科	M1	内藤　祥子
62	工学研究科	M1	邉見　ふゆみ
63	工学研究科	M1	宮森　智子
64	工学研究科	M1	渡邉　さくら
65	農学研究科	M1	上吉原　怜奈
66	農学研究科	M1	小舘　愛
67	農学研究科	M1	髙木　聖実
68	農学研究科	M1	那花　友莉恵
69	農学研究科	M1	宮本　あかり
70	環境科学研究科	M1	池川　未歩
71	環境科学研究科	M1	関　亜美
72	情報科学研究科	M1	角掛　沙也香
73	生命科学研究科	D1	萱場　敦子
74	生命科学研究科	M1	相川　奈津美
75	生命科学研究科	M1	上野　友紀
76	生命科学研究科	M1	梶野　祐未
77	生命科学研究科	M1	川村　弥司子
78	生命科学研究科	M1	近藤　なな
79	生命科学研究科	M1	佐藤　あや華
80	生命科学研究科	M1	髙楠　有希
81	生命科学研究科	M1	太宰　結
82	生命科学研究科	M1	山田　紗友美
83	生命科学研究科	M1	吉井　千尋
84	生命科学研究科	M1	吉川　彩香
85※	理学研究科	D2	小澤　友美

86※	理学研究科	D1	平田　萌々子
87※	薬学研究科	D1	堀　亜紀
88※	医学系研究科	D3	望月　麻衣
89※	工学研究科	D2	石井　彩子
90※	農学研究科	D1	一瀬　桜子

※はサイエンス・エンジェル・ボランティアとして活動

＜利用者の声（一部抜粋・要約）＞

・自分の研究を分かりやすく伝える力が身に付きました。また、自分の研究の面白さやどんなことに役立てられるかを思い返すことでモチベーションの向上にもつながりました。

・小学生から研究者まで、様々な人にアウトプットする能力が必要な仕事が多かったため、プレゼンをする力、コミュニケーション能力を鍛えることが出来た。

・周囲に女子大学院生が少なく、SA 活動で他分野の女子大学院生とつながることができたのはよいと思いました。さまざまな分野の女子大学院生が集まっているので、研究内容を知ることで刺激を受けました。

7　仙台Ｉゾンタクラブ東北大学女子学生海外渡航支援

海外において開催される国際学会等で研究発表を行う大学院女子学生を対象として、その渡航に係る費用を支援する。（上限 15 万円）

＜平成 27 年度採択者＞

Ｎｏ	部局	学年	氏名
1	理学研究科・多元物質科学研究所	D1	菅井　祥加
2	文学研究科	M1	栗田　陽子

＜利用者の声（一部抜粋・要約）＞

・私にとっては初めての海外開催学会への参加であり、学術面はもちろん個人の経験の面から考えても極めて意義深い体験であったと感じています。今後に向けての課題が明確化でき、研究の更なる発展および研究者としての能力向上に努めていきたいと改めて強く決意できました。

資料１

平成２７年度男女共同参画委員会委員名簿

平成27年4月

◎	理事（総務・国際展開・事務統括担当）		植木　俊哉
	総長特別補佐（男女共同参画担当）		大隅　典子
	文学研究科	教授	沼崎　一郎
	教育学研究科	教授	工藤　与志文
	法学研究科	准教授	石綿　はる美
	経済学研究科	准教授	若林　緑
	理学研究科	教授	寺田　眞浩
	医学系研究科	教授	朝倉　京子
	歯学研究科	教授	菅原　俊二
	薬学研究科	准教授	髙橋　信行
	工学研究科	教授	斎藤　浩海
	農学研究科	教授	磯貝　恵美子
	国際文化研究科	教授	藤田　恭子
	情報科学研究科	講師	坂田　邦子
	生命科学研究科	教授	福田　光則
	環境科学研究科	准教授	上高原　理暢
○	医工学研究科	教授	田中　真美
	教育情報学研究部	准教授	佐藤　克美
○	金属材料研究所	教授	米永　一郎
	加齢医学研究所	准教授	井川　俊太郎
	流体科学研究所	准教授	小宮　敦樹
	電気通信研究所	准教授	坂本　修一
	多元物質科学研究所	教授	永次　史
	災害科学国際研究所	准教授	有働　恵子
	東北アジア研究センター	准教授	柳田　賢二
	病院	准教授	宮崎　真理子
	高度教養教育・学生支援機構（学生相談・特別支援センター）	助手	佐藤　静香
	男女共同参画推進センター	助教	保坂　雅子
	総務企画部	部長	齋藤　仁

◎ は委員長

○ は副委員長

資料２

平成 27 年度東北大学男女共同参画委員会 委員会開催等記録
－委員会日程、主要議題及び具体的活動について－

平成 27 年 5 月 19 日　第 94 回男女共同参画委員会　開催

審議事項

(1) 副委員長の選出について

副委員長として平成 26 年度と同様に米永委員、田中委員を選出した。

(2) 各ワーキンググループの構成員等について

各ワーキンググループの構成員等について了承された。

(3) 第２回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞について

標記事業の実施について了承された。

(3) 第４回仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の公募について

標記事業の実施について了承された。

報告事項

(1) サイエンス・エンジェル採用状況について

標記事業の実施について報告があった。

(2) 男女共同参画・女性研究者支援事業の採択状況について

標記事業の採択状況について報告があった。

(3) 平成 27 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の受賞について

男女共同参画推進センター協力教員である倉田祥一朗教授の標記受賞について報告があった。

(4) APRU Asia-Pacific Woman in Leadership 2015 Workshop への参加について

標記 Workshop の参加報告があった。

(5) 全学教育科目 基幹科目・社会論「ジェンダーと人間社会」について

標記科目の開講について報告があった。

(6) 各部局からの報告

各部局の取組状況について報告があった。

平成 27 年 5 月 22 日　仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の公募開始

・応募締切　平成 27 年 6 月 15 日

平成 27 年 5 月 22 日　第 2 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）の公募開始

・応募締切　平成 27 年 7 月 31 日

平成 27 年 7 月 16 日　第 95 回男女共同参画委員会　開催

審議事項

(1) 第 12 回男女共同参画シンポジウムの開催について

標記シンポジウムの日程及び趣旨等について説明があり、引き続き検討することとした。

(2) 第 2 回澤柳記念賞の選考委員会委員の選出及び応募状況について

標記選考委員会の構成について了承された。また、応募状況について報告があり、部局内での周知及び推薦の依頼があった。

報告事項

(1) 第4回仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の審査結果について

標記支援事業の審査会及び審査結果の概要について報告があった。

(2) 第３期中期目標・中期計画について
標記計画（素案）について報告があった。
(3) 各部局からの報告
各部局の取組状況について報告があった。

平成 27 年 10 月 22 日　第 96 回男女共同参画委員会開催

(1) 第 12 回男女共同参画シンポジウムについて
標記シンポジウムについて説明があり、各部局内での周知及び当日の運営協力について依頼があった。
(2) 第２回澤柳記念賞の審査結果について
選考結果について報告があった。また次年度に向け、募集内容を検討することとした。
(3) 大学入試センター試験時の川内けやき保育園での一時保育について
標記取組を行う旨の報告があった。
(4) 男女共同参画推進基金について
標記基金パンフレットが完成した旨の報告があり、基金の周知に関する協力依頼があった。
(5) 年度報告書の作成について
年度報告書の構成について説明があり、執筆依頼があった。
(6) 各部局等からの報告
各部局等の取組状況について報告があった。

平成 27 年 11 月 21 日　第 12 回男女共同参画シンポジウム開催

テーマ　「科学とジェンダー」
場　所　東北大学医学部開設百周年記念ホール（星陵オーディトリアム）

平成 28 年 1 月 21 日　第 97 回男女共同参画委員会　開催

審議事項
(1) 平成２８年度 TUMUG 支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）の実施について
標記事業の概要について了承された。
報告事項
(1) 第３期中期目標・中期計画について
標記計画（素案）について報告があった。
(2) 第１２回男女共同参画シンポジウム開催報告
標記シンポジウムの開催について報告があった。
(3) 大学入試センター試験時の川内けやき保育園での一時保育について
標記取組について報告があった。
(4) 各部局等からの報告
各部局等の取組状況について報告があった。

資料３

男女共同参画委員会のあゆみ

（男女共同参画委員会の設置）

東北大学男女共同参画委員会は平成 13 年 4 月に設置されて以来、本学における男女共同参画状況の調査・広報活動、ジェンダー教育の振興、相談窓口の設置などを任務として積極的な活動を続けてきた。活動の基盤となっているのは、平成 13 年度にアンケート調査を基にまとめられた報告書「東北大学における男女共同参画推進の方針に関する提案」であり、とりわけそこに掲げられた 13 項目の提言である。

（平成 14 年度）

平成 14 年度には、その第 1 項目で提言されたシンポジウムを「第 1 回男女共同参画シンポジウム：学問・教育と男女共同参画」と題して開催するとともに、阿部博之総長（当時）のもとで「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を発表した。この宣言は、男女共同参画奨励賞（沢柳賞）の創設、研究・労働環境の改善、不服申立・救済制度の確立などの方針を打ち出し、日本の帝国大学の中で初めて女子学生に門戸を開放した歴史をもつ「東北大学が全国の大学の前駆となるべく、率先して推進する」ことを明らかにしたものである。

（平成 15 年度）

平成 15 年度には、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を受けて沢柳賞の公募と審査を行い、「第 2 回男女共同参画シンポジウム：性差とは何か？ヒトと人のあいだ」と併せて第 1 回授賞式を開催した。委員会内では、従来の「実態調査」「広報」「相談窓口」という 3 つの WG に加えて、「両立支援」「奨励制度」「報告書」をそれぞれ担当する WG を新たに設置し、取組の強化に努めた。また、各部局に「男女共同参画ワーキンググループ」を設け、部局ごとの状況調査や改善策の検討を開始した。

（平成 16 年度）

平成 16 年度には、「第 3 回男女共同参画シンポジウム：現代日本社会とジェンダー」と併せて沢柳賞の第 2 回授賞式を開催した。実態調査 WG では、前年度に実施した意識調査の結果をリーフレットにまとめ、全学生及び全教職員に配布した。また両立支援 WG では、教職員アンケート等で要望の強かった学内保育所の設置へ向けて本格的な準備を進め、前年度からの検討をもとに運営プランを策定するとともに、補助金の申請手続き等を進め、次年度の開所を目指して大きな一歩を踏み出した。

（平成 17 年度）

平成 17 年度には、待望の学内保育所「川内けやき保育園」が 9 月に開設され、運営には

各キャンパス代表からなる「運営会議」が携わることとなった。利用者は順調に増加し、当時の定員（25 名）を超過している状態であった。11 月 26 日には第 4 回男女共同参画シンポジウムが「どこまで進んだ大学の男女共同参画」をテーマに開催し、併せて第 3 回沢柳賞の授賞式を行った。また「大学等における男女共同参画を推進し、ネットワークを構築するための呼びかけ」が採択され、大学のネットワーク構築を推進していくことが確認された。

（平成 18 年度）

平成 18 年度には、文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル事業」に応募し、「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」が採択された。事業推進に当たっては、「女性研究者育成支援推進室」を設置し、委員会と密接に連携しながら各種事業を進めることとした。杜の都女性科学者ハードリング支援事業の一環として「育児のための短時間勤務制度の施行に関する協定書」をまとめ、平成 19 年度より実施されることとなり、併せて短時間勤務制度を利用する教員の研究業務評価において必要な配慮を行うこととした。10 月 15 日には第 5 回男女共同参画シンポジウムを「大学における女性研究者の育成と支援、その施策」をテーマに開催し、併せて第 4 回沢柳賞の授賞式を行った。また、男女共同参画に関する「部局長アンケート調査」及び「川内けやき保育園の利用に関するアンケート調査」を実施し、現状の把握に努めた。

（平成 19 年度）

平成 19 年度には「育児のための短時間勤務制度」の試行実施、「育児休業等の取得による任期の延長」の検討を行い、いずれも平成 20 年度から実施されることとなった。また、「仙台 I ゾンタクラブ」からの支援金による「大学院女子学生海外渡航支援事業（ローズ支援事業)」を立ち上げ、大学院女子学生を対象に主として海外渡航費用を援助することとした。11 月 17 日には第 6 回男女共同参画シンポジウムを「イノベーションを生みだす男女共同参画」をテーマに開催し、併せて第 5 回沢柳賞の授賞式を行った。実態調査 WG では教職員を対象にインタビューを実施し、きめ細やかな調査を行った。

（平成 20 年度）

平成 20 年度には「育児のための短時間勤務制度」及び「育児休業等の取得による任期の延長」について制度化を実現したほか、平成 19 年度から実施している「大学院女子学生海外渡航支援事業（ローズ支援事業)」では 2 件が採択（うち 1 件は辞退）となった。11 月 22 日には第 7 回男女共同参画シンポジウムを「大学の男女共同参画－見えない壁を打ち破るには－」をテーマに開催し、その基調講演では、オーゲ・B・グルットレ駐日ノルウェー王国大使より「ノルウェーの男女共同参画は今」を演題に講演いただいた。併せて第 6 回沢柳賞の授賞式を行った。また、実態調査 WG 及び両立支援 WG を中心として全教職員

及び大学院生、研究者等を対象に学内保育所についてのアンケート調査を実施した。なお、本委員会について、本学の男女共同参画をさらに推進する観点から、構成メンバーを拡充することとし、平成 21 年度から新たに各附置研究所（東北アジア研究センター含む）から各 1 名、病院からも 1 名の委員を選出することとした。

（平成 21 年度）

平成 21 年度には、第 8 回東北大学男女共同参画シンポジウムを 11 月 28 日に片平さくらホールで開催した。「東北大学男女共同参画の現状～本音で語る課題と展望～」をテーマに、本学の男女共同参画の現状について、報告講演を踏まえつつ、薬学研究科長及び農学研究科長の参加も得てパネルディスカッションを行った。併せて第 7 回沢柳賞の授賞式を行った。また、平成 13 年度に部局長の意識調査のためのアンケートが実施されたが、その後の進展などを調査するために部局長アンケートを実施した。さらに、星陵地区に「星の子保育園」を設置、平成 22 年 3 月にオープンした。このことは、本委員会の平成 20 年度両立支援 WG・実態調査 WG が担当した「第二保育所設置に関するアンケートまとめ」において、「川内けやき保育園に続き、星陵地区と青葉山地区に順次新たな保育施設を設置」とされた内容に沿うものであった。

また、文部科学省科学技術振興調整費による新規事業「女性研究者養成システム改革加速」に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」が採択され、初年度は 3 名の新規養成女性研究者を採用した。

（平成 22 年度）

平成 22 年度には、第 9 回東北大学男女共同参画シンポジウムを 12 月 19 日に片平キャンパスエクステンション教育研究棟で開催した。「男女共同参画政策と大学の使命」をテーマに、内閣府男女共同参画局長をお招きし、活発なパネルディスカッション等が行われた。

沢柳賞については、例年通り募集を行い、研究部門及びプロジェクト部門特別賞の各 1 件を採択し、ローズ支援事業においては、８件の応募の中から２件を採択した。また、「東北大学における研究者支援に関するアンケート」を実施し、学内で行われている男女共同参画の実現に向けた様々な取組について、どの程度浸透しているかの調査やどのような支援を必要としているのかの調査を実施した。

「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」については、昨年度に引き続き、既在籍女性研究者の支援事業や新規女性研究者１１名を採用した。

（平成 23 年度）

平成 23 年度は、東日本大震災の影響により、男女共同参画シンポジウムを開催することが出来なかったが、関係各位の尽力により、沢柳賞とローズ支援事業は、例年通り実施することが出来、沢柳賞は、研究部門 1 件を採択し、ローズ支援事業においては、２件を採

択した。「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」については、昨年度に引き続き、既在籍女性研究者の支援事業や新規女性研究者３名を採用した。

（平成 24 年度）

平成 24 年度は、平成 19 年度より「仙台Ｉゾンタクラブ」からの支援により 5 年間実施してきたローズ支援事業を、「仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業」へ名称変更し新たに 5 年間支援していただくことが確認されたため、平成 24 年 7 月から募集を行い、6 件の応募があり 2 件を採択した。男女共同参画シンポジウムについては、11 月 18 日（日）に片平さくらホールにおいて、「東北大学における男女共同参画の新たな展望」をテーマに開催された。第一部は、来賓の板東文部科学省高等教育局長の挨拶に続き、沢柳賞の受賞講演が行われた。第二部は、経済学研究科の吉田教授による「男女共同参画と研究者・社会・男性」をテーマに特別講演が行われ、引き続き「三度さきがけに向けて」をテーマに板東高等局長や辻村副委員長、吉田教授等によるパネルディスカッションが行われた。

また、第 10 回「男女共同参画奨励賞（沢柳賞）」について、奨励制度 WG（田中真美座長）を中心に公募と審査が行われ、活動部門 2 件の受賞者が決定された。プロジェクト部門は廃止され、研究部門と活動部門の２部門で実施された。実態調査アンケートについては、平成 22 年度に引き続き「研究者支援事業に関する第 2 回実態調査」を 12 月から 1 月にかけて、今後の男女共同参画を計画・立案するために必要な情報や意見を得ることを目的として実施し、約 900 人からのアンケート回答を得た。

昨年度に引き続き、「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」を実施し、平成 24 年度は新規養成女性研究者を 3 名採用した。

（平成 25 年度）

平成 25 年度は、女子学生入学から 100 周年を迎え、女子学生入学 100 周年記念事業ＰＴ（大隅典子座長）を中心に、記念シンポジウムの開催、サイエンス・エンジェルによる女子高校生向けのイベント、東北大学附属図書館及び史料館と連携した企画展の開催、記念ロゴマークの作成など各種記念行事を実施した。

同時に男女共同参画委員会の設置（平成 13 年）及び男女共同参画推進のための東北大学宣言（平成 14 年）から 10 年程度が経つことを踏まえ、今後 10 年の本学における男女共同参画推進のための指針として「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」を策定し、8 月に開催した記念シンポジウムにおいて里見進総長より発表した。

また、平成 21 年度に採択された「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」では、新規養成女性研究者を 3 名採用するとともに、災害科学国際研究所を新たに支援対象部局とし、未支援となっていた工学研究科の女性教員と合わせ 3 名の研究費を追加支援した。

（平成 26 年度）

平成 26 年度は、平成 25 年に策定した「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」に基づき、恒常的支援体制を整備するため、女性研究者育成支援推進室を発展的改組し、男女共同参画推進センターを設置した。また、平成 21 年度から平成 25 年度まで実施した「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」の事業終了に伴い、後継事業として学内予算を用いて、「男女共同参画・女性研究者支援事業」を実施した。

さらに、奨励制度WGを中心に、男女共同参画社会を目指す活発な取り組みの一助となるよう、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰する澤柳記念賞を設立した。

また、11 月 29 日に「未来の男女共同参画社会への新たなる発信～女子学生入学 101 年目の節目を迎えた東北大学から」をテーマにシンポジウムを開催した。森まさこ参議院議員による特別講演をはじめ、澤柳記念賞受賞講演などを実施した。

（平成 27 年度の活動）

（1）男女共同参画・女性研究者支援事業の実施

平成 26 年度に引き続き、男女共同参画・女性研究者支援事業を実施し、育児・介護等との両立支援、女性リーダー育成、次世代支援の取組を行った。

（2）第 4 回仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の実施

例年どおり奨励制度 WG（田中真美 WG 座長）を中心に、平成 27 年 5 月から募集を開始し、16 件の応募中、2 件を採択した。

（3）第 2 回澤柳記念賞の実施

平成 26 年に引き続き、奨励制度 WG（田中真美 WG 座長）を中心に、平成 27 年 5 月から募集を開始した。全 10 件の応募中、A 賞（本賞）・B 賞（奨励賞）ともに 1 件ずつ表彰し、後述の第 12 回男女共同参画シンポジウムで授賞式及び受賞講演を行った。

（4）第 12 回男女共同参画シンポジウムの開催

11 月 21 日（土）に星陵キャンパス医学部開設百周年記念ホール（星陵オーディトリアム）において、「科学とジェンダー」をテーマにシンポジウムを開催した。第 I 部は文部科学省の小松弥生研究振興局長による来賓挨拶に続き、澤柳記念賞の授賞式及び受賞講演を行った。第Ⅱ部は三重大学 小川眞里子名誉教授、第Ⅲ部は明治学院大学 柘植あづみ教授による特別講演を行い、最後に特別講演講師による総合討論を行った。

（5）男女共同参画推進基金の設立

東北大学特定基金の一つとして、男女共同参画推進基金を設立した。女性研究者のスキルアップやキャリアアップ、研究と育児の両立、次世代支援や学内保育環境の充実、伝統の継承等を目的に、基金を募ることとした。

平成13年度東北大学男女共同参画委員会報告（H14.4.16 評議会報告）に対する対応状況（抜粋）

報告書の概要		対応策	備考
1．全学的アピールの採択と部局WG等の設置			
(1)	・東北大学男女共同参画推進宣言	・第1回男女共同参画シンポジウムにおいて宣言（14.9.28）。	
(2)	・部局ごとに男女共同参画WGを設置	・設置について、委員会へ報告済（14.7.22）。	
2．ジェンダー学講座・科目の設置と広報活動の拡充			
(1)	・ジェンダー学等の男女共同参画関連分野の科目を複数開講 ・ジェンダー学専任教官の配置 ・ジェンダー研究関連講座担当候補者リストの作成	・全学教育科目　基幹科目として、平成17年度から継続して「ジェンダーと人間社会」を開講。また、平成 21 年度からは「体と健康」を開講。平成27年4月より一時中断していた「ジェンダーと人間社会」を開講。	学務審議会との連携
(2)	・男女共同参画委員会主催の講演会・シンポジウムの開催 ・全学教育審議会主催の講演会・シンポジウムの開催 ・各部局主催の講演会・勉強会の開催	・平成14年度から継続して、男女共同参画シンポジウムを開催し、計12回実施。 ・今後検討。 ・本報告書「各部局の取組み」参照。	広報WG
(3)	・研究補助・懸賞論文制度の導入 ・研究調査のための海外視察・調査研究プロジェクトの設立等 ・学外の研究者等との学際的な共同研究を奨励・促進	・平成15年度から継続して、男女共同参画奨励賞（沢柳賞）を実施し、計10回表彰。 ・21世紀COEプログラム「男女共同参画社会の法と政策」拠点と連携。 ・平成 26 年度から澤柳政太郎記念男女共同参画賞（澤柳記念賞）を実施。	奨励制度WG
(4)	・研究成果の公表と広報・啓発活動	・男女共同参画委員会HPにおいて、活動内容等を掲載。 ・男女共同参画シンポジウムにおいて、澤柳記念賞受賞者による受賞講演及び成果報告講演を実施。	広報WG

報告書の概要		対応策	備考
3. 方針決定機関等への女性教官の参画			
(1)	・東北大学の方針決定機関におけるジェンダー・バランスの確保	・平成 18 年度から総長特別補佐（男女共同参画担当）を設置し、同職へ女性教員が就任。 ・法学研究科とWPIで女性の部局長が誕生。	
(2)	・本学の各審議機関や計画分析評価等を行う「室」等に女性教官枠登用	・評議会に報告・了承済（14.4.16）。	
5. とくに女性教官が少ない分野での男女共同参画の推進			
(1)	・ジェンダー・バランスの現状と分析結果の取りまとめ	・評議会に報告・了承済（14.4.16）。 ・本報告書「中期目標・中期計画達成のための各部局の取組み」参照。 ・平成 18 年度から平成 20 年度まで文部科学省　科学技術振興調整費『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』を実施。平成 21 年度以降も事業継続。 ・平成 21 年度から文部科学省　科学技術振興調整費『杜の都ジャンプアップ事業 for 2013』を実施。	
(2)	・採用における性差別・性差に基づく不公正な取扱いの有無及び検証結果の取りまとめ		
6. 研究・教育における男女共同参画実現のための環境整備			
(3)	・研究費の配分、留学機会と費用配分での配慮	・平成 19 年度から大学院女子学生海外渡航支援事業（通称：ローズ支援事業）を実施。	奨励制度WG
(5)	・設備の改善（女性用トイレの増設、更衣室の整備等）	・現状について、委員会へ報告済（14.7.22）。 ・『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』において、「環境整備プログラム」を実施し、自然科学系全部局に女性用休憩室を設置。	
(6)	・子育て支援体制の確立 ・男性の育児休業制度の活用促進 ・産休・育休中の研究補助体制 ・介護休業制度等の確立	・「東北大学川内けやき保育園」を開園（17.9.1）。 ・育児休業、育児部分休業とも子が 3 歳に達するまで取得することができ、育休代替職員も雇用可能とした。 ・介護休業、介護部分休業とも約 6 月の範囲内で取得することができることとした。	両立支援WG

報告書の概要		対応策	備考
		・『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』において、「育児・介護支援プログラム」を実施。	
7. 職員等の雇用・昇進面での平等実現と労働環境の整備			
(5)	・労働時間の短縮 ・ワーク・シェアリング ・在宅勤務制度などの導入	・育児のための短時間勤務制度の新設(20.4.1)。 ・就業規則(育児休業等規程)により、職員から請求があった場合は、子(未就学児)を養育するため、労使協定にかかわらず超過勤務時間を1月24時間、1年150時間以内とすることとしている。 ・時間外労働時間の縮減等に努めるよう周知。	
8. 育児および介護における性別役割分業の改善と両立支援策			
(1)	・学内保育園の具体的な調査・検討	・「東北大学川内けやき保育園」を開園(17.9.1) ・「東北大学星の子保育園」を開園(22.3.1) ・青葉山キャンパスでの保育所設置を検討開始(21年度)	両立支援WG
(2)	・育児休業制度の運用システムの改善 ・産休・育休中の臨時雇用等の補助体制を確立	・平成16年4月以降、代替職員制度を一本化し、育児休業の請求期間を任期とする育休代替職員を雇用可能とした。 ・「教員の任期に関する規程」を改正し、育児休業等による任期の延長を認めることを可能とした。 ・『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』において、「育児・介護支援プログラム」を実施。	両立支援WG
(3)	・介護サービスの態様を検討	・平成16年4月以降、介護休暇制度から介護休業制度とし、負傷、疾病、老齢又は身体上若しくは精神上の障害により2週間以上の期間にわたり日常生活を営むのに支障があり、常時介護を必要とする状態にある者の介護をするため、休業することができることとした。	
(4)	・育児・介護、さらに病児看護のための休暇制度とともに、支援手当や支援金の一時貸与の制度	・平成14年4月以降、子(未就学児)の看護をするための特別休暇を年5日以内、取得できることとした。	

報告書の概要		対応策	備考
9．単身赴任者のための支援体制・環境整備の促進			
(2)	・単身赴任者手当の取得条件等を改善	・今後検討	
10．男女共同参画推進のための不服申立制度・救済制度等の整備			
(1)	・不服を申立制度、及び問題解決にあたる恒常的な機関の設置	・男女共同参画委員会内に相談窓口設置(14.1.18)	ハラスメント相談窓口との連携
(2)	・相談窓口や意見箱、日常的な調査・監督にあたるオンブズパーソン制度の設置	・今後検討	
11．教職員の旧姓使用の拡大			
	・旧姓使用者の便宜を検討	・適用済(H13.12.26)	
12．大学院生・学部学生の研究・勉学環境の改善			
(1)	・教育・厚生施設等の設備状況の点検・改善	・総長裁量経費により、川内南地区・北青葉山地区の厚生施設の改修及び設備改善を行った。(平成 16 年～17 年度)	
(2)	・カリキュラムや演習教育場面等においての性的差別取扱い等の調査改善	・今後検討。	
13．非常勤講師の処遇と研究環境の改善			
	・非常勤講師の教育環境・雇用環境について、性別に由来する差別的取扱いや慣行がないかを調査・改善	・今後検討。	

資料５

東北大学における男女共同参画推進のための行動指針（H25.8.8 策定）に対する対応状況

	行動指針	対応内容
1	両立支援･環境整備	・研究支援要員制度（通常型・シェア型）とベビーシッター利用料等補助制度を実施 ・第３保育所設置に向けて検討中
2	女性リーダー育成	・スタートアップ研究費支援制度（2 年間）と研究スキルアップ経費補助制度（国内外の学会参加等支援）を実施
3	次世代育成	・サイエンス・エンジェル制度を実施中
4	顕彰制度	・澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（及び同奨励賞）を創設し、第２回として２名を顕彰
5	地域連携	・東北地区大学への助言とともに、今後の連携体制を検討中
6	国際化対応	・各種資料等の英語版の発行
7	支援推進体制	・男女共同参画推進センター設置、専任助教を採用し、恒常的支援体制を確立

資料６

第12回東北大学男女共同参画シンポジウム

科学とジェンダー

平成27年

11.21(土)

13:00▸17:00

開催場所

東北大学星陵キャンパス
医学部開設
百周年記念ホール
（星陵オーディトリアム）

お問合せ先

東北大学総務企画部総務課
Tel. **022-217-4811**
Fax. **022-217-5906**
Mail. **danjyo@grp.tohoku.ac.jp**

東北大学男女共同参画委員会HP
http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

TOHOKU UNIVERSITY

ごあいさつ

東北大学 総長
里見　進

第12回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催するにあたり、ご挨拶させていただきます。

東北大学は「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」を大学理念としております。この大学理念の一つである「門戸開放」において、大正２（1913）年に本学は当時の国立大学として初めて３人の女子学生に対し、理学部への入学を許可しました。このような伝統と実績のもと、本学では平成13年に全学的組織として男女共同参画委員会を発足させて以降、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」(平成14年９月)、「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」(平成25年）を策定し、全学をあげて男女共同参画社会の実現に向け鋭意取り組んでまいりました。

12回目を迎える今回のシンポジウムは、科学の知／科学者世界におけるジェンダーについて討論し、科学領域における女性研究者のさらなる活躍を目指し、「科学とジェンダー」というテーマで開催します。

本日は、来賓として文部科学省から小松弥生研究振興局長にお越しいただきご挨拶を頂戴することにしております。また、科学史とジェンダーに関する研究分野の第一人者である三重大学小川眞里子名誉教授、そして医学分野の科学知に対するジェンダーの影響について卓越した研究をされている明治学院大学柘植あづみ教授にも特別講演をお願いしております。日本における男女共同参画社会推進の第一線にいらっしゃる皆様に、大変お忙しい中お集まりいただくことができ、光栄に存じます。

また、昨年度より設立した「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞)」に関しては、予想以上に多くの応募があった中、日本の女性研究者の研究環境改善に貢献してこられた日本大学大坪久子上席研究員に本賞を、さらには中高生を対象として、大学院生による文理融合型の出前授業を積極的に行い、次世代の女性研究者の増加・活躍を促進する活動を行っている新大 Wits（新潟大学）に奨励賞をそれぞれ授与します。

今回のシンポジウムの成果が本学及び全国の大学のみならず、日本全体の男女共同参画社会の実現に大きく寄与できますことを祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

平成27年11月21日

プログラム

総合司会　（男女共同参画委員会　広報・シンポジウム WG 座長　医学系研究科 教授）**朝倉　京子**

開会挨拶　東北大学　総長 **里見　進**　**13:00〜13:05**

来賓挨拶　文部科学省　研究振興局長 **小松　弥生** 氏　**13:05〜13:10**

第Ⅰ部　13:10〜14:15

第２回 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）授賞式及び講演会

Ａ賞（本賞）　日本大学　薬学部薬学研究所　上席研究員 **大坪　久子** 氏

Ｂ賞（奨励賞）　新大 Wits 代表　新潟大学男女共同参画推進室　准教授 **中野　享香** 氏

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

東北大学男女共同参画推進センター　副センター長（医工学研究科／工学研究科　教授）**田中　真美**

---------- **休憩**（14:15〜14:25） ----------

第Ⅱ部　14:25〜15:25

講演座長　生命科学研究科　教授 **福田　光則**

特別講演Ⅰ　「近代科学の歴史とジェンダー」

三重大学　名誉教授 **小川　眞里子** 氏

---------- **休憩**（15:25〜15:35） ----------

第Ⅲ部　15:35〜16:35

講演座長　総長特別補佐（男女共同参画担当）**大隅　典子**

特別講演Ⅱ　「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」

明治学院大学　社会学部社会学科　教授 **柘植　あづみ** 氏

総合討論　**16:35〜16:50**

講評・閉会挨拶　東北大学男女共同参画委員会　委員長 **植木　俊哉**　**16:50〜17:00**

来賓紹介

文部科学省　研究振興局長　**小松　弥生 氏**

1981年、京都大学法学部卒業後、文部省に入省。掛川市教育長、広報室長、仙台市教育長、初等中等教育局幼児教育課長、高等教育局医学教育課長、内閣府政策統括官付参事官、文化庁伝統文化課長、文化庁政策課長、科学技術・学術総括官、文化庁文化部長、国立美術館理事を経て、2015年８月から現職。

過去の澤柳記念賞受賞者紹介

第1回（平成26年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

「日本の男女共同参画社会の推進を牽引する先導的活動について」

明治大学法科大学院　教授　**辻村　みよ子 氏**

同氏は憲法学・ジェンダー法学を代表する学者の一人として、東北大学における男女共同参画実現に向けての礎を築きました。さらには、21世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムの拠点リーダーや、内閣府男女共同参画会議・専門調査会委員等を歴任し、学内外に研究成果や政策提言を発信しながら日本の男女共同参画社会推進を牽引してきました。この功績は特に顕著なものであり、ここに顕彰いたします。

第1回（平成26年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

「サイエンス・エンジェル修了生を中心とした有志団体による男女共同参画への取組み」

SA 輝友会（エスエーきゆうかい）

同団体は東北大学サイエンス・エンジェル※であった大学院修了生を中心とする自主的な活動団体として、修了後も研究分野や職種を超えて交流を続けています。自ら科学イベント等の企画を行うほか、現役学生の SA 活動や進路に関するアドバイスを行うなど、ロールモデルとしても貴重な役割を果たしています。このような異なる分野を横断した理系の女子大学院生修了生による活動の今後の一層の活躍を期待し、奨励賞として顕彰いたします。

※サイエンス・エンジェル（SA）…東北大学の自然科学系女子大学院生が、女性研究者のロールモデルとしてセミナーやイベントに参加し、科学の魅力・研究のおもしろさを伝えている。

第2回澤柳政太郎記念
東北大学男女共同参画賞審査結果及び講評

男女共同参画委員会
委員長
植木　俊哉

本学では、平成15年度より10年間にわたり、東北大学における男女共同参画を推進するため、「東北大学男女共同参画奨励賞（通称：沢柳賞）」として、教職員及び学生の皆さんの男女共同参画に関連する研究や活動を奨励してきました。

昨年、さらなる男女共同参画社会を目指し、沢柳賞を改め、「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）」を創設しました。この賞は、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰する目的で設置しました。これまでの沢柳賞と異なり、学内だけでなく学外からも広く公募することで、より多くの方へ男女共同参画推進の理念を広げたいと考えています。

名称は、東北大学の理念である「門戸開放」の方針を打ち出し、全国に先駆けて女子学生に帝国大学の門戸を開く素地を作った初代総長澤柳政太郎の功績にちなんでいます。澤柳記念賞は、本賞のほか、42歳以下の若手を奨励する目的で設置された奨励賞の2部門からなります。審査においては男女共同参画に関連する研究や活動の奨励、男女共同参画社会実現へ向けての積極的な提言や企画を重視しています。

厳正な審査により、以下のように受賞者が決まりましたので、審査の講評とあわせてご報告いたします。

第2回（平成27年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

「日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動」

日本大学　薬学部薬学研究所　上席研究員　**大坪　久子 氏**

同氏は理系分野における女性研究者の先達として、所属する大学の環境整備や学会での提言等、男女共同参画の推進に精力的に取り組んできており、こうした取組が政府による女性研究者の支援事業の創設につながるなど、日本における女性研究者の研究環境の改善に大いに貢献してきました。また、日本の理工系女性研究者が置かれている現状を国際的に発信し、著名な科学雑誌に取り上げられるなど、国内外を通じて数多くの業績を有しています。この功績は特に顕著なものであり、ここに顕彰いたします。

第2回（平成27年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

「“新大 Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育」

新大 Wits（しんだいうぃっつ）※

同グループは、中高生を対象として、大学院生による文理融合型の出前授業を積極的に行い、次世代の女性研究者の増加・活躍を促進するとともに、男性も含めた研究者全体の男女共同参画意識の醸成を図ってきました。また、出前授業の実施に留まらず、この効果等を科学的に分析し改善を図っており、今後の活動のより一層の発展を期待し、奨励賞として顕彰いたします。

※新大 Wits は、サイエンス・セミナー（出前授業）を行っている新潟大学大学院生の愛称

第2回「澤柳記念賞」受賞者

本賞

「日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動」

日本大学　薬学部薬学研究所　上席研究員　大坪　久子 氏

【講演要旨】

私の本来の専門は動く遺伝子（トランスポゾン）の分子生物学である。20代から30代の若い時期に、機会均等法施行後間もない米国の熱気のなかで研究生活を送り、自分自身の研究基盤を築いた。理工系分野の男女共同参画に関わることになったのは、2002年、日本分子生物学会の年会保育室設置の時にまで遡る。その後、複数の大学や学会、そして、理工系学協会の連携組織「男女共同参画学協会連絡会」で活動を続けてきた。私自身、研究と家庭の両立に苦しんだこともあり、そのような思いを後進にはさせたくないというのが動機の一つであった。ただ、在米当時、機会均等法に後押しされた若い女性研究者たちの明るく自然体の生き様を目にしていたこともあり、「日本でもいつかあのように・・」と潜在的に考えていたとは思う。連絡会では「大規模アンケートの解析→課題抽出→提言・要望作成→要望活動の展開」の繰り返しであった。手がけた提言の中には「子育て支援型研究員制度に関する提言」のように、後に政策（RPD 制度）に結びついた幸運なものもある。提言・要望活動の過程で私たちは「基盤整備」のみならず「リーダー育成」の必要性を確信し、学会活動において女性研究者を囲むバイアスとバリアの存在の「見える化」を試みた。その結果を英文で国際誌に発表したことが契機となり、Nature や Science 等の国際誌が日本の女性研究者の現状を何度か記事に取り上げてくれた。これはこれまでにない快挙であった。日本の女性研究者支援について国際語で発信することの重要性をあらためて実感することとなった。講演では、15年にわたる活動をたどり、その意義と今後の展望について述べる。

【主要著書・論文等】

- Homma MK, Motohashi R. and Ohtsubo H.: Japan's Lagging Gender Equality. Science Apr 26; 340 (6131) : 428-30 (2013)
- Homma MK., Motohashi R. and Ohtsubo H.: Maximizing the Potential of Scientists in Japan: promoting equal participation for women scientists through leadership development. Genes to Cells 18 (07) : 529-532 (2013)
- 相馬芳枝・大坪久子・荒川薫：女性研究者を支援する取り組み - 男女共同参画学協会連絡会の役割 - Biophilia No.5 No.4 (2009)
- 大坪久子：男女共同参画学協会連絡会のこれまでの活動と女性研究者支援の今後　解剖学雑誌88:51-56 (2013)
- 大坪久子：Beyond the Bias and Barriers ～日米にみる女性研究者支援～ 企画・制作：九州大学戦略企画室：九州大学・女性研究者養成システム改革加速事業「リーダー育成セミナー」講演記録、(2014年6月発行)

【略 歴】

1968年　九州大学薬学部薬学科卒業
1970年　九州大学大学院薬学研究科修士課程修了
1975年　博士号取得（薬学）九州大学大学院、論文博士
1970年　金沢大学がん研究所生物物理部門・助手
1974年　New York 州立 Stony Brook University 博士研究員、NIH 博士研究員
1979年　同上　研究准教授
1982年　東京大学応用微生物学研究所・助手
1994年　同上分子細胞生物学研究所・講師
2009年　日本大学総合科学研究所・教授、同女性研究者支援推進ユニット長
2011年　日本大学薬学部薬学研究所・上席研究員
2015年　沖縄科学技術大学院大学コンサルタント（男女共同参画担当）

その他、北海道大学女性研究者支援室・客員教授、上智大学女性研究者支援プロジェクト課題推進アドバイザー及びグローバルメンター、九州大学「女性研究者養成システム改革加速」事業・全学審査会外部委員等を歴任

第2回「澤柳記念賞」受賞者

奨励賞

「“新大 Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育」

受賞者：新大 Wits（しんだいうぃっつ）
代　表：新潟大学男女共同参画推進室　准教授　**中野　享香**

【講演要旨】

「女性活躍加速のための重点方針2015」の第2項目「社会の課題解決を主導する女性の育成」において、女性の理工系人材の育成を推進することが明言された。このような日本の女性研究者を支援し育成しようとする動きは、2006年以降、文部科学省の「女性研究者支援事業」を機に推進され、それまで妊娠や出産などの様々なライフイベントによって研究者への道を諦めざるを得なかった多くの若い女性たちの前に、その道筋をつけた。その道を次の世代へと繋ぐべく、女性研究者自らが次世代の研究者を育成する活動を牽引することは、今後の女性研究者の増加・活躍のために不可欠であると言える。

新潟大学は2008年に女性研究者支援事業に着手し、次世代の女性研究者の育成を目的として、女性大学院生による出前授業「サイエンス・セミナー」活動を立ち上げた。2010年には社会科学を含めた広義のサイエンスを扱う文理融合型の活動として、2011年には男性も活動メンバーに含め、“新大 Wit's”の名称を付して、男女若手研究者の意識の醸成を図りながら未来の研究者を育てる活動として現在まで継続している。この活動は、男女共同参画の視点に立った大学院生教育プログラムに基づいており、セミナーの質を担保しつつ大学院生と中高生双方の成長を図る仕組みになっている。また、活動によって構築されるメンバー同士のネットワークは、メンバーが各地に職を得てからも維持され、結婚や子育てを乗り越えながら活躍する姿が現役大学院生のキャリア形成の一助となっていることから、この活動が男女共同参画多世代キャリア教育としても意義を持つものへと発展していると考える。講演では、これらの報告を中心に、男女共同参画における次世代育成の意義を述べる。

【略 歴】

1996年3月　新潟大学理学部物理学科卒業
1997年4月　金沢大学自然科学研究科博士前期課程入学
1999年4月　金沢大学自然科学研究科博士後期課程進学
2002年3月　金沢大学自然科学研究科博士後期課程修了。博士（理学）の学位取得。
2002年4月～2008年5月　新潟大学自然科学研究科研究生。同教育人間科学部研究支援者。同自然科学研究科博士研究員。新潟県立女子短期大学非常勤講師。日本物理学会キャリア支援センター調査員。
2008年6月　新潟大学女性研究者支援室特任助教
2011年4月　新潟大学男女共同参画推進室准教授（現在に至る）

【主要著書・論文等】

[1] A comparative study of the effects of lecturer's gender in “Science Seminar”, Michika Nakano, Kohei Doi, Yuki Kusano, Maki Nishiyama, Takashi Sato, Proceedings of the 12th Asia Pacific Physics Conference, JPS Conf. Proc. 1, 018005 (2014)
[2] 出前授業を通じた大学院生の科学コミュニケーション能力養成　―理学系大学院生の特徴と傾向―，中野享香，大学の物理教育誌，Vol.19，No.2，pp.68-72，2013年07月
[3] 新潟大学発『女性大学院生によるサイエンス・セミナー(出前授業)』の取組とその成果，中野享香，三宅恵子，佐藤孝，五十嵐由利子，工学教育（J.of JSEE），Vol.59，No.3，pp.88-92，2011年05月
[4] Symmetry and Z_2-Orbifolding Approach in Five-dimensional Lattice Gauge Theory，K. Ishiyama, M. Murata, H. So, K. Takenaga，Progress of Theoretical Physics，Vol.123，No.2，pp.257-269，February 2010
[5] Study on the nonperturbative existence of Yang-Mills theories with large extra dimensions, Shinji Ejiri, Jisuke Kubo, and Michika Murata, Phys. Rev. D 62, 105025, 23 October 2000

東北大学における
男女共同参画の取り組みについて

男女共同参画委員会
副委員長
男女共同参画推進
センター副センター長
医工学研究科／
工学研究科　教授

田中　真美

東北大学では、全学での男女共同参画の実現に向けた活動とともに、女性研究者がキャリアパスの障害を乗り越え継続して活躍するための支援として、平成18-20年度に「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」(文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者支援モデル育成)、平成21～25年度に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」(文部科学省科学技術振興調整費：旧女性研究者養成システム改革加速事業、科学技術人材育成費補助金）を実施しました。日本の大学として初めて女子学生を受け入れてから100年となりました平成25年には「男女共同参画推進のための行動指針」(本パンフレット裏表紙に掲載）を策定しました。この行動指針に基づいて、前述の事業を継承し、発展的展開を進めています。平成26年4月に男女共同参画推進センターを設立し、さらに、公募による同センターの愛称「TUMUG」やロゴマークの決定、またアカデミアにおける男女共同参画推進に貢献されている方を顕彰する澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）の創設と第1回同賞の授与を行っています。男女共同参画委員会と男女共同参画推進センターは「行動指針」に基づき、1）両立支援・環境整備、2）女性リーダー育成、3）次世代育成、4）顕彰制度、5）地域連携、6）国際化対応、7）支援推進体制、の７プログラムを実施しています。平成27年には男女共同参画推進基金を新設しました。今後一層の男女共同参画の推進に向け邁進して参ります。

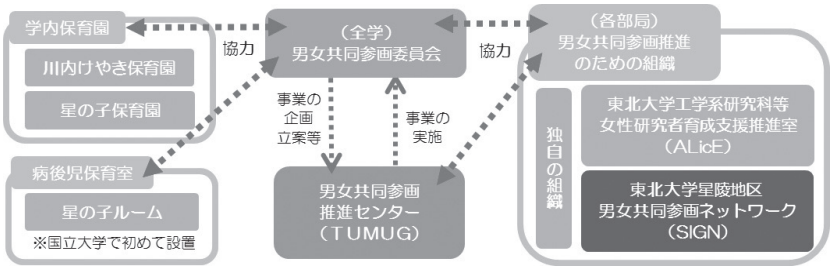


図１　男女共同参画・女性研究者支援の体制

表１　平成27年度男女共同参画・女性研究者支援事業（通称：TUMUG 支援事業）

	プログラム名	内容	対象部局
1	研究支援要員	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助（上限200万円）	自然科学系研究科
2	研究支援要員（シェア型）	採択者同士で事務補佐員（男女共同参画推進センターより派遣）をシェア	
3	ベビーシッター利用料等補助	研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等の補助（上限10万円）	全部局
4	スタートアップ研究費	１年目100万円、２年目50万円の研究費を支援	全部局
5	研究スキルアップ経費	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外：上限40万円、国内：上限15万円	全部局
6	サイエンス・エンジェル	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科
7	仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援（上限15万円）	全研究科

特別講演Ⅰ

「近代科学の歴史とジェンダー」

三重大学　名誉教授　**小川　眞里子**

【講演要旨】

科学は、自然を観察することによって発見された客観的な事実によって構築されるものと、多くの人は考えておられるのではないでしょうか。科学的真実は発見されるべきもので、けっして発明されるものではないと。しかし、科学の歴史を振り返ってみますと、事実は往々にして発明？されているようです。科学的事実も社会的構築物であり、けっしてジェンダー・フリーとは言い切れないことを、科学史上のいくつかの事例から説明したいと考えています。

とくにその顕著な事例は、近代科学の形成期に見られます。18世紀末には人権思想の高まりと共に男女の平等観が芽生え、イギリスではメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』、フランスではオランプ・ド・グージュが『人権宣言』ならぬ『女権宣言』、フランスほど自由主義の地盤が強固でなかったドイツにおいてさえ匿名ながら『女性の地位向上について』といった女性の完全な平等を支持する論説が現れました。ところがこれを打ち消す方向に作用したのが、当時の科学でした。

解剖学は、男女が平等には創られていないことを、観察された事実をもって示そうとしましたし、動物学は、女性が子産み子育てに専念すべきものとして創造されているという自然の説得力ある事実を発明しました。科学は歴史的に見てけっして男女に平等に開かれてきたものではありません。

このような科学の歴史的経緯を踏まえて、今日では歴史研究で有効なツールとなったジェンダー分析の手法を、今日の最先端の科学研究や技術開発に応用し、男女に等しく恩恵をもたらす Gendered Innovations が目指されています。歴史研究からの成果として、科学や技術の革新を展望したいと思います。

【略 歴】

1971年6月　東京大学教養学部基礎科学科　卒業
1971年7月　東京大学教養学部基礎科学科研究生
1972年3月　東京大学教養学部基礎科学科研究生修了
1972年4月　東京大学大学院理学研究科科学史科学基礎論修士課程入学
1974年3月　東京大学大学院理学研究科科学史科学基礎論修士課程修了
1976年4月　東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化博士課程入学
1978年9月　東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化博士課程退学
1978年4月　南山短期大学非常勤講師（1986年3月まで）
1985年4月　三重大学人文学部非常勤講師（1986年3月まで）
1986年4月　三重大学人文学部助教授
1993年4月　三重大学人文学部教授（至 2012年3月）
2012年4月　三重大学名誉教授

【主な活動】

2003年9月　お茶大 COE（ジェンダー研究のフロンティア）事業推進者（至2006年3月）
2006年4月　お茶大　ジェンダー研究センター客員教授（至2012年3月）

三重大学　学長補佐　（2007年度 入試広報・男女共同参画担当、2008年度 男女共同参画担当、2009～2010年度 女性研究者支援担当）
三重大学女性研究者支援室室長（2008年7月～2011年3月）
三重県男女共同参画審議会会長（2015年４月より）
名古屋大学非常勤講師（科学技術とジェンダー　担当）
科学とジェンダー関連の講義：早稲田大学、東京工業大学、お茶の水女子大学等。
「なぜ、女子に理系分野なのか」2012年女性研究者裾野拡大のための教員研修
「科学・技術教育と女性」岩手大学北桐ホール　2012年10月9日
基調講演「女性研究者の現状：世界・日本・三重」男女共同参画大学の実現に向けて　岐阜大学講堂　2012年12月5日

特別講演Ⅱ

「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」

明治学院大学　社会学部社会学科　教授　**柘植　あづみ**

【講演要旨】

これまで「男女共同参画」は、男女間の就業・昇進等の機会不均等、性別役割分業観に基づく女性のケア労働の負担とそれによる離職等、同一労働同一賃金の未達成などが課題・問題として掲げられてきた。男女雇用機会均等法が施行されて30年になるが、これらの問題はいまだ解消されずに存在し続けている。しかし何も変わってこなかったわけではない。大学を見る際に、教育・研究の場としての大学という視点が先にくるが、職場としての大学という視点は、研究所よりも遅れているように思う。職場として「男女共同参画」が進むことは、教育の場としても大きな意義がある。そして、それは女性研究者のみならず、男性研究者にとっても、環境改善になるべきだろう。

この講演では、まず、女性研究者をめぐる環境改善と課題を考える。つぎに、女性であること、男性であることが研究や教育にいかに影響するか（しないか）について具体的な事例を紹介しながら、そこにある課題を一緒に考えたい。そして、ケア労働をめぐる負担の軽減に、少子社会対策と高齢社会対策という「順風」と「逆風」について考える。最後に男女共同参画に加えて、「男女」という枠組みを越えた「共同参画」への試みが、科学研究（自然科学も人文社会科学も含む）と高等教育をいかに変革できるかについて述べたい。

【主な活動】

2000年～2004年　日本国際協力事業団イシュー別委員会（ジェンダー）委員
2009年～2011年　国際ジェンダー学会（旧国際女性学会）会長
2014年～　NPO 法人女性の健康と安全のための支援教育センター副代表理事
2014年～　日本学術会議第1部会連携会員、社会学委員会ジェンダー研究部会副委員長

（主な講演）2007年「人口政策に組み込まれる不妊治療―身体・医療・政治―」、日本医学会総会、2014年“Exploring Norms and Rational Choices Concerning Reproductive Technologies: Local Meanings of Having Children in Contemporary Japan”, Margaret Lock Conference: New Directions in Social Studies of Medicine, Science, and Ethics, East Asian Studies, Princeton University, NJ, USA.

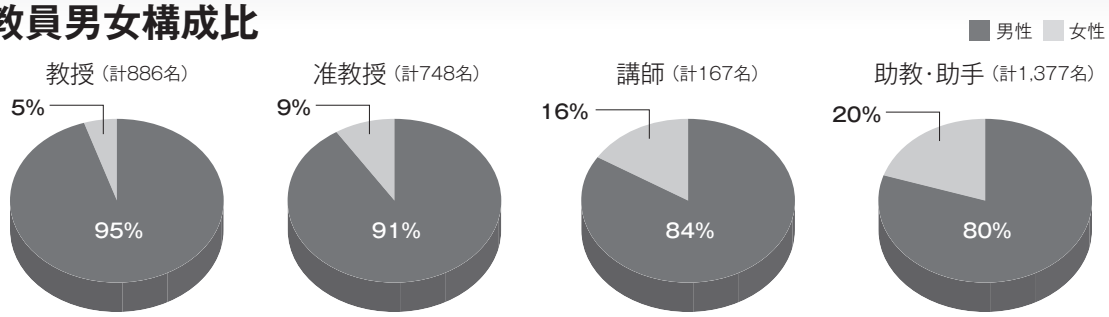
【略 歴】

1983年3月　埼玉大学理学部生体制御学科卒業
1983年4月　埼玉大学大学院理学研究科生体制御学専攻修士入学、1985年3月同修了
1985年6月～1989年3月　三重大学医学部助手
1990年4月　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻博士後期課程入学
1994年3月　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻博士後期課程単位取得退学
1996年3月　お茶の水女子大学より博士（学術）号授与
1994年4月　北海道医療大学基礎教育部教員（専任講師、97年より助教授）
1999年4月　明治学院大学社会学部教員（助教授、2003年より教授）

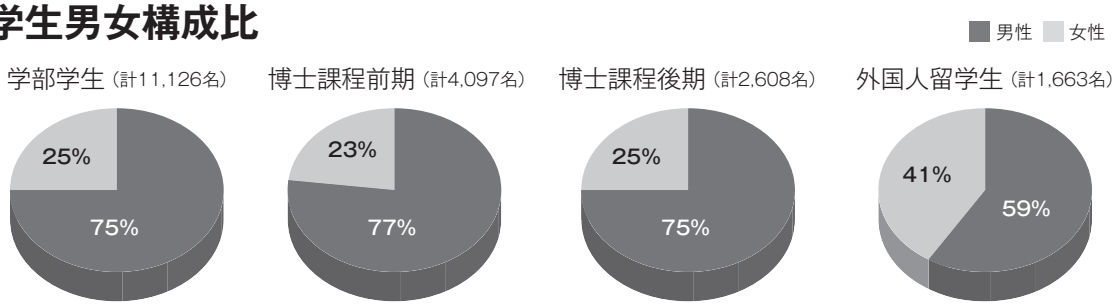
専攻は医療人類学。これまでに生殖医療を中心にして、患者・医療者へのインタビューから、技術が社会にもたらす課題と、社会がいかに技術の方向づけをしてきたのか、そこでの「選択」とは何かを分析してきた。主な著書、論文に『妊娠―あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください』(2009年刊、共著、洛北出版)、『生殖技術－不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』(2012年刊、単著、みすず書房）など。

東北大学における男女構成比と推移（平成27年5月1日現在）

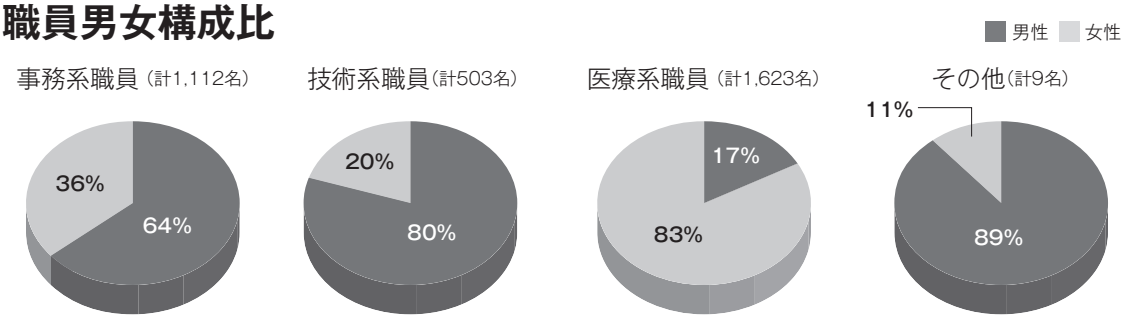
教員男女構成比



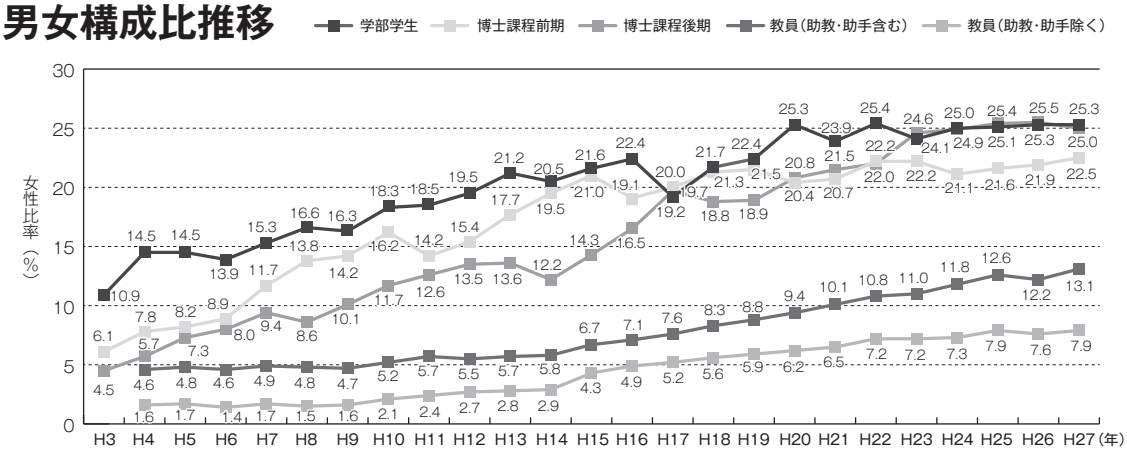
学生男女構成比



職員男女構成比



男女構成比推移



MEMO

MEMO

東北大学における男女共同参画推進のための行動指針

東北大学は、1913年に日本で初めて女子学生3名の入学を許可した。その3名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。
そして、2001年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」(2002年）のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。
また、2003年度に21世紀 COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008年度にはその成果を発展させたグローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。
自然科学系分野では、2006年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。
このように、男女共同参画の包括的推進（理論整備・活動支援）において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学100年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として以下の7項目を策定する。

【両立支援・環境整備】
本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

【女性リーダー育成】
アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

【次世代育成】
将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル（SA）活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

【顕彰制度】
アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

【地域連携】
東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

【国際化対応】
ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

【支援推進体制】
上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事（若しくは副学長）と総長特別補佐（男女共同参画担当）を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

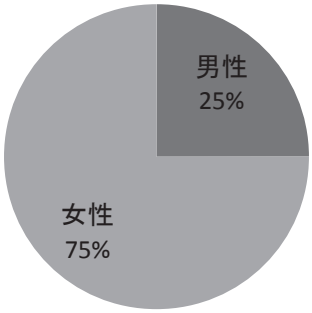
平成25年 8 月 8 日

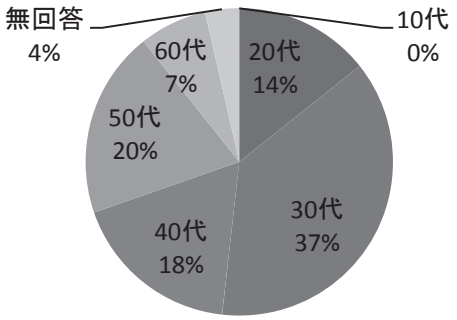
資料７

第12回東北大学男女共同参画シンポジウム アンケート集計結果

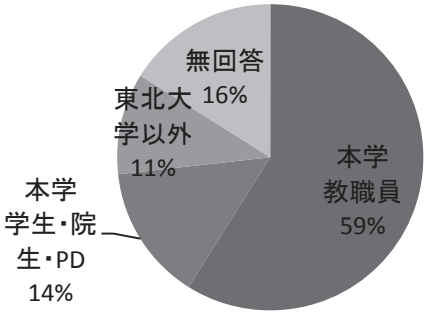
上記シンポジウムに参加された方々に、今後のシンポジウム開催の参考とするため、内容等に関してアンケートを行った。参加者113名のうち、56名の方から回答をいただいた。

Q1 あなたの性別と年齢をお教えください。



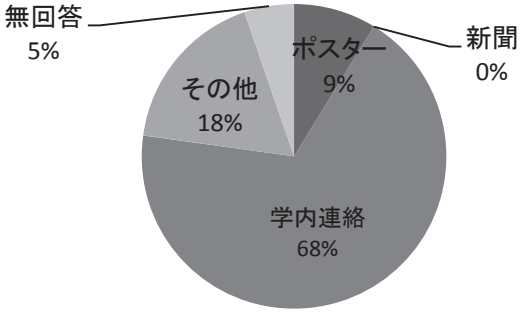


Q2 ご職業（もしよろしければ、会社名、職名も）をお教えください

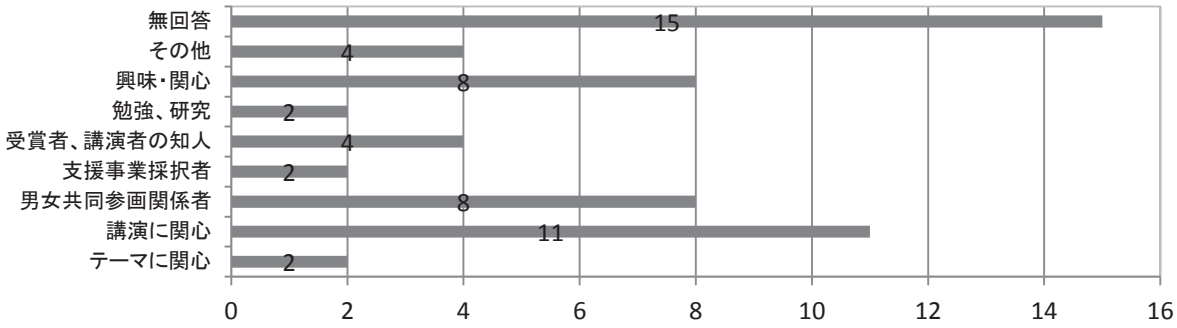


＜一般（アンケート記載分）＞
仙台青葉学院短大
お茶の水女子大学
産総研
自然教育研究センター
新潟県工技総研
宮城学院女子大学

Q3 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか。※複数回答あり

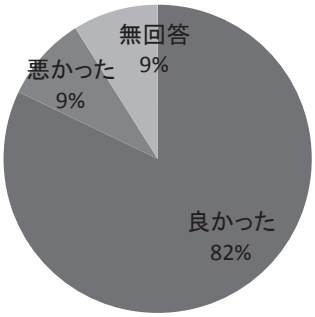


Q4 このシンポジウムに参加された動機は何ですか。



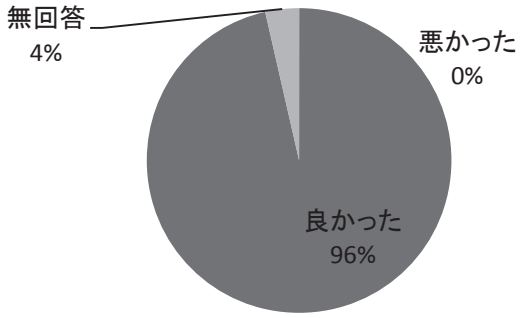
回答（一部抜粋）
この大学におけるジェンダー問題に興味があった／男女の社会的差異に関心あり／教授のすすめ／昨年参加し、大変興味深かったので／活躍をされている女性研究者の講演を聞くことができる貴重な機会だったため／女性として自分の今後を考えたとき男女共同参画は非常に興味ある内容だったから／研究協力及び支援業務を担当しており、近年の情報収集と女性研究者の生の声を聴いてみたかったから　等

Q5 開催時期について



「悪かった」とお答えの方、どのような時期がよいか：
残念ながら、この日は多くの学会と重なっていることが判明した。／土曜日でない方が良かった。／連休をはずすべき　等

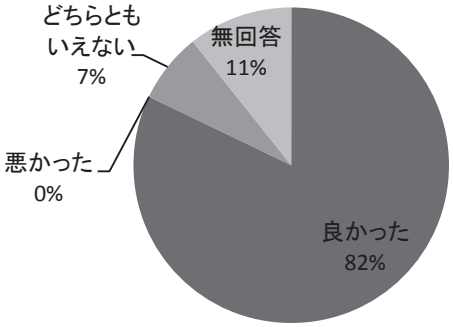
Q6 会場について



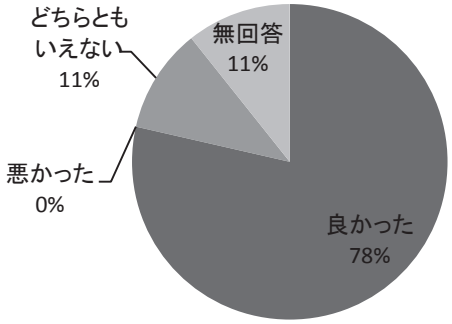
「良かった」とお答えの方のコメント
寒かった／星陵はちょっと遠い。建物が分かりにくい
職場に近かった／会場が明るくてよかったのですが前半スライドが見づらい気がしました。

Q7 内容について

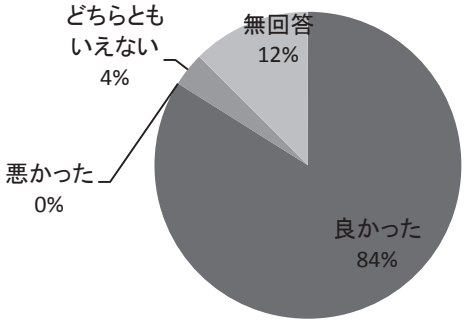
【澤柳記念賞受賞講演】



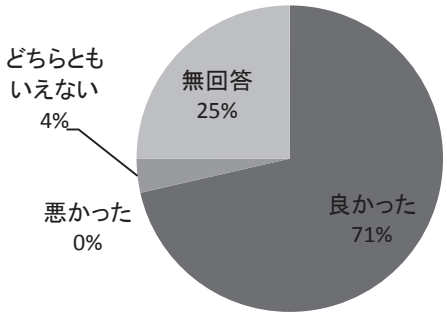
【男女共同参画の取組について】



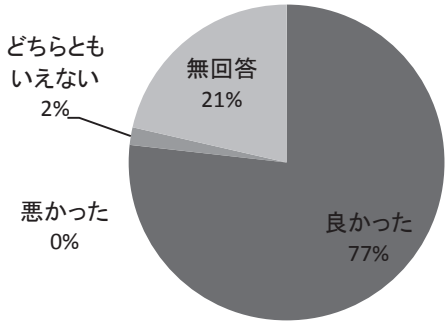
【特別講演Ⅰ】



【特別講演Ⅱ】



【全体として】



Q8 東北大学における男女共同参画の取り組みについてご意見をお聞かせください。

- 周知が不足していると思う（取組そのものを知りません）
- 助教の研究費が男女問わず極端に少ないことを視野に入れる必要があるのでは？そうしないとせっかくのポジティブアクションがいらぬ反発を招く恐れがある。
- かなり積極的にやっていると思います。ほかのイベントに付随してもっと可視化しても良いと思います。国際会議の誘致にとってプラスになるとよいかなあ。
- 積極的な取組を行っている。
- サイエンスエンジェルをはじめとして先導的な取組をしていると思います。今後いかに男性が女性研究者の支援に理解を深められるかの取組が重要になると感じられました。
- tenure trackについても考えて戴きたい
- 文系の女性教員、女子学生への取り組みを充実させていくことも今後の課題ではないかと感じました。
- 研究のために以前、調査（報告書など）させていただきましたが、素晴らしいとりくみをされていると感じました。今後も一層のとりくみをおねがいします！
- 文系分野にもSAのような取り組みが導入できるとよいのでは。
  大学の構成員の多様性に合わせた制度の構築と実現を進めていければと思います。
- 男女共同参画シンポジウムがもう12回目ということ自体が感慨深いものがあります。
  この12年の間に学内の空気、考え方は大きく変わりました。ご尽力いただいた多くの先生に本当に感謝しております。
- 先進的で多くの大学等に影響を与えていると思います。
- ほとんど知られていないように思います。特に男性に。
- 女性への共同参画の広報は十分かもしれないが、男性への呼びかけが足りていないのは。女性教員の参加者を集める熱意は感じるが、興味を持っていない男性職員に今回の話を聞かせるほうが効果が高く出るのかも。他人事な人に話を聞かせるには事務方からの命令しか手段はないのでしょうか。研修に取り入れるとかできないのでしょうか。
- トップダウン式で積極的に先進的な施策を進めていることを評価している。一方でボトムアップはまだまだ不足している（部局レベル等）。特に男性に当事者意識が薄いと感じている。
- まだまだ男女共同参画の浸透が少ない
- 研究者だけでなく院生を対象にした活動も行われており門戸が開かれている印象。ただ大学参加者のうち、男性が少ない印象を受けます。
- 様々な取り組みをされているようですが、実際に利用したい方々がそれを知らないという現状があると思います。また私は助手なのですが助教以上でなければ利用できない制度が多い理由を知りたいです。より若い人への支援が必要なのではないでしょうか。
- やっている側なので微力なことしか貢献できず申し訳なく思いますがいずれにしても取組がおこなわれていることに帰属意識が高まります。
- 準職員でも利用可能な制度が整備されていて働かせていただいている身としてはとても有難い。
- 名古屋大学の活動でもあるように男性教員、男子学生の参加を拡大させてほしい。本参画の推進のためには、男女双方の理解・努力が必要であると考えています。
- 多様なご配慮に富む取組で支援制度などは学内利用させていただきありがたいです。
- 外国人である私が東北大学で勉強と子育てを両立できるのは周りの環境と本男女共同参画のおかげです。引き続きご支援お願いします。
- 他大学の取組の詳細を完全に把握しているわけではありませんが、学内にいて東北大学は女性教職員、女性大学院生に対する手厚い取組をしているように感じます。（まだ理解に乏しい男性教員が多い現実は厳しいことですが・・・）東北大学は男女共同参画への理解に乏しい男性教員（特に年配の方）が多いとも感じているので、もっと皆に理解していただけるような取組をやっていただきたいとも思います。
- 研究支援要員の助成を利用していますがとても助かっております。今後もお願いします。ただ研究支援要員で採用された人が継続的に雇用できるようになるとより良いと思いました。
- 様々な取組をされているのだと知りました。
- 女性研究者支援の様々な取組があり、利用させてもらっています。子育て中の男性研究者、職員に対しても啓蒙活動をさらにしていただけるとさらによいのではないでしょうか。
- 女性の役割を生かしつつ、男女共に仕事、研究に参画できる取組は大変進んでいるように思えて嬉しい。

・沢柳奨励賞・新大Witsのように本学のSAもぜひ男性メンバーを取り入れられたら良いじゃないかと思います。それは男女共同参画は女性だけでなく「男女共同参画」だから。

・男性教員の理解、協力が得られるような取り組みをして欲しいです。

Q9 男女共同参画に関連したシンポジウムで、何かご希望の企画がありましたらお書きください。

・キャリアパスに関するシンポがあると良いですが。ロールモデルになる方、学会、企業に限らず。

・パネルディスカッション。奥山市長なども参加して。

・女性の比較的多い文系に問題はないのか。

・予め参加者から事前アンケートで「訊きたいこと」「本課題で抱える悩みや疑問」等を集約いただければ

・男女共同参画推進における男性の取り組みを取り上げてほしい

・男女共同参画分野で国内外で活躍される方のお話を聞きたいと思います。

・文系理系での共同参画の取り組み方の違い、理系の中での分野による共同参画の違いなどに講演があるといいかも。

・本日の講演者の方々のように男女共同参画推進に関して素晴らしい知見やご経験をお持ちの方とよりフランクに懇談できる場が欲しい（小規模で）

・若手世代も含めた方々から幅広いキャリアパスの話を聞きたいです。

・対象世代（マーケット）が今回は教員、世代もやや上であったか。一般市民に親しみ易く啓発する企画もよいかもしれない

・東北大の男女共同参画の委員やセンターの先生方の話をもう少し聞きたい。

・coffee break や立食式の食事会などがあれば人脈を作りやすいです。講演者、発表者は女性だけではなく男性もあった方がいいのではないかと思います。

・輝いている女性の研究者の方のお話はとても勉強になりますが、もし男性の意見を示すのも面白い話題ではないかと思います。

・名古屋大学の事例（女性リーダー育成合宿）のような取組を非常に面白いと感じました。学内外の女性研究者を招いたり、学内の男性教員に頼んだりして、このような取組をやっていただけるならぜひ参加したいです。

・特になし

・1、ジェンダーとキャリア形成（デザイン）に興味あります
2、社会的参画とジェンダー
仕事、家庭、家族における男女の役割と歴史的変遷に興味あります

Q10 今回のシンポジウムについてご感想をお聞かせください。

・大変興味深いご講演ありがとうございました。

・ポスターやプログラムだけを見ると「科学」という語を「理学、工学」と同義に使っているように見えるが、これは男女問わず文系の人々にとって違和感を感じざるを得ないことである。特別講演がそのような狭い内容ではなかっただけに残念である。

・良かったと思います。時間が足りなかったかも。

・予想していたよりも興味深い講演が聞けて良かったです。

・学内外での活動について聞くことができ、非常に重要な知見を得ることができた。

・小川先生の話は女性が研究者として独立していくのに科学の歴史的背景から容易ではないことを示しており、長期的視点で男女共同参画の取組を行うことが重要であると改めて認識させられました。とてもためになる講演でした。柘植先生の話では「男女共同参画」を若手研究者育成としてとらえなおすという視点は自分も同じ感覚であると思いました。シンポジウムの時間が4時間は少々長いように感じました。

・大変興味深く来てよかったと思う。ただ現実に女性の多い職場にいるのでいまひとつ今日の内容をどう生かすかぴんと来なかった。

・ありがとうございました

・いずれの講演も興味深かったですが、特に小川先生の講演がよかったです。小川先生、柘植先生のお話共にとくに女性への期待は社会のニーズと密接に関連していることを様々なデータや文献から教えていただき改めて気づくことがたくさんありました。

・大変興味深く、楽しく、実り多い時間となりました。皆様ありがとうございました。

- 特別講演をはじめ、講演内容が非常に興味深かったです。可能ならばハンドアウトが欲しかったです。
- 充実した内容でした、ありがとうございました。たいへん勉強になりました。
- 大坪先生のスライドがずれてしまっていたのがとても残念でした。（MacとWinの互換性の問題だとおもいますが、自分もmacユーザーなので身につまされました。）
- 科学とジェンダー、どのような内容になるか想像がつきませんでしたが、とても面白かったです！！大学らしくて良かったと思います。
- 大変興味深く面白いご講演、楽しく拝聴しました。
- 参加者がもっと多いといいですね。
- 非常に講演もおもしろかった。女性職員に集中した呼びかけだけでなく、大学内だけでなく、一般の人への講演にしても十分に興味を持ってもらえると思う。広告をもう少し改善した方がいいかもしれない。あのポスターを見た人から、オレには関係ないという意見を聞いた。
- 女性を増やすことと多様性の確保はこれから両輪として進めていくことが必要と感じました。
- 澤柳記念賞受賞者の大坪久子氏の講演が、実際に女性研究者の支援や情報発信に取り組んでいる立場からのお話で、非常に説得力があり、実践的で役立てられそうだと感じた。ほかの2名の講演も大変ダイナミックだった。
- 興味深かった。
- 特に小川先生のお話が面白かったです。
  昨年に比べて男性の参加者が多いような印象を受けました。うれしく思います。
  毎回若手研究者カップル支援の話が出るが、なぜカップル（研究者同士）に限定するのか。パートナーが（若手）研究者でない場合は考慮しなくてよいのか毎回疑問に思います。
- 講演の内容が非常に示唆に富むものでした。
- オーディエンスを見ていると、若い男性は少なく、関心が低いのかと思いました。若い男性に限らず、男性への関心を促さないと男女共同参画は広まらないと思います。
- 駐車場のゲート解放についてもう少し分りやすくして下さい。
  明日からのマネジメント業務に役立つ内容であった。
- 機器の不備など事前準備不足では
- 講演の内容は非常に興味深かった。しかし、それ以上に活躍されている女性研究者の方々のプレゼンの方法等がすごく勉強になった。今後の研究発表に生かしていきたいと感じました。
- シンポジストの先生や受賞された先生の講演は大変刺激的であり、励みとなりました。ありがとうございました。
- 女性自身にあるbiasに気づくというのはまさに気づかされた気がする。
- 東北大学のことだけではなく、日本のほかの大学の男女共同参画の取組も聞かせて、とても有意義だと感じる。
- 動物実験の都合で途中までしか参加できませんでしたが、澤柳記念賞の大坪先生や中野先生の講演など非常に面白く、興味深く拝聴いたしました。今後もできるかぎりシンポジウムなど参加したいと思います。
- 男女共同参画がどういうものか理解できた。
- たいへん興味深いお話が聞けて良かったです。
- 小川先生のご講演が大変興味深く、機会があればまた聞きたい。映像プロジェクタについては事前に確認できなかったのか（進行の妨げとなる）。参加者が少なく、事前告知活動が足りないのでは。せっかくの素晴らしい講演がもったいないと感じる。
- 男女共同参画はスバラシイか、次世代を担う子供への影響はどうであろうか。子供は親の愛情で豊かな精神のもと育てることで近代の「イジメ」「ひきこもり」「殺人」等減少するのではないでしょうか。従って女性の労働形態を十分に考えることが大切に思える。
- 男女共同参画を「科学」ではなく、もっと社会的またはグローバルに認識したくなりました（社会とは、教育や科学は、女性が高学歴に行く割合が高くないから必然な結果になっている気がするから。もっと義務教育や社会構造の面からジェンダーのことを考えたくなりました。それと関連してキャリア形成（デザイン）とジェンダーとのテーマに興味あります）
- 特別講演Ⅰが大変面白かったです。

資料８

第4回 仙台Iゾンタクラブ

東北大学大学院 女子学生海外渡航 支援事業

TOHOKU UNIVERSITY

世界で活躍できる女性の人材育成のため、渡航費用を支援します。

応募資格

本学に在籍する大学院女子学生（渡航時にも本学大学院女子学生の身分を有する者。研究分野、国籍は問わない。なお、これまで海外において開催される国際学会等で研究発表を行う機会が少なかった者を優先する。）

応募要件 ※下記(1)～(3)を全て満たすものであること。

1. **平成27年7月～平成28年3月**の間に海外で開催される国際学会、シンポジウム、セミナー及び研究集会等であること。（学会運営のための委員会等は対象としない。）
2. 特定の主題について、当該大学院生が研究発表を行うことを目的として、参加するもの。（資料収集のための参加等は対象としない。）
3. 本事業に応募するものと同一内容で他からの助成を受けていないもの。

※交通費（電車、バス、航空機の運賃等）が15万円を超える場合、不足分を大学（研究室など）で補填できることをご確認の上ご応募ください。

採択件数

2件（予定）

支援内容

申請に基づき、渡航に係る費用を**15万円を上限**として、事後に支給（精算払）する。

応募方法

下記書類を郵送にて、応募書類提出先まで送付すること。

(1) 応募申請書（下記ホームページよりダウンロードすること。）

(2) 発表演題（予定）の英文アブストラクト（様式任意）
※発表演題と発表者名（共同発表者があれば、その氏名）も記入すること。

(3) 航空運賃見積書
※エコノミークラスで、開催地と本邦間の最も経済的な経路による航空運賃（空港使用料・航空保険料等を含む。）

(4) 参加する国際学会等の概要が分かる書類（開催通知又はプログラム等）
※申請時点で取り寄せることができる、当該国際学会等の概要－開催期間、全体会、分科会等の構成が記載されたもの－がわかるもの、もしくは会議主催者からの採録通知等。

応募締切

平成27年6月15日（月） 必着

※審査結果は、応募者へ6月下旬ごろ本人宛てに通知予定。

採択者の義務

1. 帰国後30日以内に別に定める様式により、報告書を提出すること。
※この報告書は仙台Ｉゾンタクラブへ送付するほか、本学男女共同参画委員会ホームページへ掲載する。
2. 事後に本事業出資者である仙台Ｉゾンタクラブの例会において、国際学会等での発表や体験などについて報告すること。

※採択者はその氏名、学年、参加した国際学会等の名称及び報告内容について、仙台Ｉゾンタクラブホームページ上で紹介されることがあるので、あらかじめ承知すること。
※採択後、学外へ転出、またはやむを得ない事情により、申請内容について変更が生じた場合又は参加を取り止めた場合は、速やかに下記問い合わせ先へ連絡すること。

東北大学男女共同参画委員会

【応募書類提出先・お問合せ先】応募書類は郵送のみにて受け付けます。

東北大学男女共同参画推進センター（TUMUG）〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1

TEL：022-217-4811（総務企画部総務課） E-mail：danjyo@grp.tohoku.ac.jp HP：http://www.morihime.tohoku.ac.jp/

第４回　仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院
女子学生海外渡航支援事業　公募要項

【主旨および目的】

２００７（平成 19）年に本学創立 100 周年を記念して、国際理解と社会奉仕、女性の社会的地位向上を目指す団体「仙台Ｉゾンタクラブ」から、これからの社会を担う前途有為な人材への支援として、本学に在籍する大学院女子学生を対象とした支援金（名称：仙台Ｉゾンタクラブローズ支援金）が本学へ贈呈されました。

２０１２（平成２４）年度からは、仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業として継続されており、海外において開催される国際学会等で研究発表を行う大学院女子学生を対象として、その渡航に係る費用を支援することにより、世界で活躍できる女性の人材育成並びに本学における男女共同参画を推進することを目的として実施しています。

【応募資格】

本学に在籍する大学院女子学生（渡航時にも本学大学院女子学生の身分を有する者。研究分野、国籍は問わない。なお、これまで海外において開催される国際学会等で研究発表を行う機会が少なかった者を優先する。）

【応募要件】※下記（１）～（３）を全て満たすものであること。

（１）平成２７年７月～平成２８年３月の間に海外で開催される国際学会、シンポジウム、セミナー及び研究集会等であること。（学会運営のための委員会等は対象としない。）

（２）特定の主題について、当該大学院生が研究発表を行うことを目的として参加するもの。（資料収集のための参加等は対象としない。）

（３）本事業に応募するものと同一内容で他からの助成を受けていないもの。

※交通費（電車・バス・航空機の運賃等）が 15 万円を超える場合、不足分を大学（研究室等）で補填できることをご確認の上ご応募ください。

【採択件数】

２件（予定）

【支援内容】

申請に基づき、渡航に係る費用を、１５万円を上限として、事後に支給（精算払）する。

【応募方法】

下記書類を郵送にて、応募書類提出先まで送付すること。

（１）応募申請書（下記ホームページよりダウンロードすること。）

（２）発表演題（予定）の英文アブストラクト（様式任意）※

※発表演題と発表者名（共同発表者があれば、その氏名）も記入すること。

（３）航空運賃見積書※

※エコノミークラスで、開催地と本邦間の最も経済的な経路による航空運賃（空港使用料・航空保険料等を含む。）

（４）参加する国際学会等の概要が分かる書類（開催通知又はプログラム等）※

※申請時点で取り寄せることができる、当該国際学会等の概要－開催期間、全体会、分科会等の構成が記載されたもの－がわかるもの、もしくは会議主催者からの採録通知等。

【注意事項】

（１）応募にあたっては、指導教員の承認を受けること。

（２）同一研究室内で同一国際学会等への渡航支援を希望する女子学生が複数いる場合、当該研究室教授等は申請書の推薦欄に推薦順位も記載すること。

（３）提出された申請書等は原則として返却しない。

（４）審査の過程において又は採択された場合、さらに必要な資料の別途作成、提出を求める場合がある。

（５）申請内容について、採用後に大幅な変更が生じた場合は採用を取り消す場合がある。

（６）申請は１名１件限りとする。

【応募締切】

平成２７年６月１５日（月）必着

【結果通知】

６月下旬ごろ本人宛てに通知予定

【採択者の義務】

（１）帰国後３０日以内に別に定める様式により、報告書を提出すること※。

※この報告書は仙台ＩゾンタクラブへＨ送付するほか、本学男女共同参画委員会ホームページへ掲載する。

（２）事後に仙台Ｉゾンタクラブの例会において、国際学会等での発表や体験などについて報告すること。

【その他】

（１）採択者はその氏名、学年、参加した国際学会等の名称及び報告内容について、仙台Ｉゾンタクラブホームページ上で紹介されることがあるので、あらかじめ承知すること。

（２）採択後、学外へ転出、又はやむを得ない事情により、申請内容について変更が生じた場合又は参加を取り止めた場合は、速やかに下記お問合せ先へ連絡すること。

東北大学男女共同参画委員会

【応募書類提出先及びお問合せ先】

※応募書類は郵送のみにて受け付けます。

東北大学男女共同参画推進センター（TUMUG）

〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1

電話番号：022-217-4811（総務企画部総務課総務係）

メールアドレス：danjyo@grp.tohoku.ac.jp

ホームページ: http://www.morihime.tohoku.ac.jp/

資料９

第2回（平成27年度）

澤柳政太郎記念 東北大学男女共同参画賞 （澤柳記念賞）

公　募

東北大学に脈々と受け継がれる
男女共同参画の精神を広げよう

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎氏により打ち出された
「門戸開放」という理念のもとに、
1913年（大正2年）に全国に先駆けて帝国大学の門戸を女性に開きました。
それから100年の歴史を経て、本学ではさらなる男女共同参画社会を目指し
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）を創設しました。
この賞はアカデミアにおける男女共同参画の先駆として
各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰いたします。
今年度下記の要領で募集いたしますので、推薦をお願いいたします。

応募締切

平成27年 **7月31日（金）** 当日消印有効

受賞課題発表

平成27年 **9月22日（火）**

受賞内容

A　澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について特段に優れた成果を挙げている個人またはグループ）

B　澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞
（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活動を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手（42歳以下）の個人または若手で構成されるグループ）

◎ 受賞は上記A、B各1件の合計2件です。
◎ 上記AとBへの重複推薦はできません。
◎ 選考委員会にて受賞者を決定いたします。
◎ 受賞者（受賞グループ）は、受賞年に開催される東北大学男女共同参画シンポジウム（秋に開催予定）で成果を発表していただきます。

対象資格

◎ 東北大学の内外に関わらず、個人、グループが対象です。
◎ 本賞に相応しい個人、グループを自薦・他薦できます。

推薦方法

以下の❶～❹を下記提出先まで郵便またはメールにて提出して下さい。

❶ 推薦書（下記ホームページよりダウンロードして下さい。）
❷ 受賞候補者について確認できる資料（略歴、パンフレット等）
❸ 成果資料等（成果が分かりやすい業績一覧表、代表的な論文、著書、報告書、活動内容などをまとめたものや成果資料等。）
❹ 推薦理由書

注意事項

◎ 提出された書類等は原則として返却しません。
◎ 後日参考資料の追加提出をお願いすることがあります。

東北大学男女共同参画委員会
【応募書類提出先・お問合せ先】
東北大学男女共同参画推進センター（TUMUG）
〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1
TEL：022-217-4811（総務企画部総務課総務係）
E-mail：danjyo@grp.tohoku.ac.jp
HP：http://www.morihime.tohoku.ac.jp/

TOHOKU UNIVERSITY

第２回（平成２７年度）
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
（通称：澤柳記念賞）公募要項

【主旨及び目的】

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎により打ち出された「門戸開放」という理念のもと、1913 年（大正 2 年）に全国に先駆けて女子に帝国大学の門戸を開きました。通称「沢柳賞」と呼ばれる東北大学男女共同参画奨励賞は、東北大学における男女共同参画の推進を目指して、平成 15 年度に設立されました。この活動を続けること 10 年、また 1913 年から 100 年の時を経て、平成 26 年に新たに発展した**澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（ 通称: 澤柳記念賞）**を創設しました。男女共同参画社会をめざす活発な取り組みの一助となるよう、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰いたします。

今年度も下記の要領で募集いたしますので、推薦をお願いいたします。

【種類】

Ａ：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、特段に優れた成果を挙げている個人又はグループ）

Ｂ：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活躍を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手（42 歳以下）の個人又は若手で構成されるグループ）

・受賞は上記 A、B 各 1 件の合計 2 件です。
・上記 A と B への重複推薦はできません。
・選考委員会にて受賞者を決定いたします。
・受賞者（受賞グループ）は、受賞年に開催される東北大学男女共同参画シンポジウム（秋に開催予定）で成果を発表していただきます。

【対象資格】

・東北大学の内外に関わらず、個人、グループが対象です。
・本賞に相応しい個人、グループを自薦・他薦できます。

【推薦方法】

以下の（１）～（４）を下記提出先まで郵便又はメールにて提出して下さい。

（１）推薦書（下記ホームページよりダウンロードして下さい。）

（２）受賞候補者について確認できる資料（個人の場合は略歴、団体の場合は団体のパンフレット、紹介文等）

（３）成果資料等（成果が分かりやすい業績一覧表、代表的な論文、著書、報告書、活動内容などをまとめたものや成果資料等、形式自由）

（４）推薦理由書（形式自由）

東北大学男女共同参画委員会

【応募書類提出先・お問合せ先】

東北大学男女共同参画推進センター（ＴＵＭＵＧ）

〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1

電話番号：022-217-4811（総務企画部総務課総務係）

メールアドレス：danjyo@grp.tohoku.ac.jp

ホームページ: http://www.morihime.tohoku.ac.jp/

【注意事項】

・提出された書類等は原則として返却いたしません。

・後日参考資料の追加提出をお願いすることがあります。

【応募締切】

平成 27 年 7 月 31 日（金）

※郵送の場合は当日消印有効

【受賞課題発表】

平成 27 年 9 月 22 日（火）

Column

リーダーの育成

才田　いずみ
文学研究科・
日本語教育学講座・教授

女性リーダーの育成と言われて、改めて考えてみた。私が携わっている日本語教育学という分野は、女性の多い分野である。一般に語学関係には女性が多いが、プロの教師に研究者、地域ボランティアと、日本語教育関係者を集めたら、おそらく9割近くは女性なのではないだろうか。そんな女性優位の業界なので、女性の上司は当たり前。優れたロールモデルも多数いらっしゃる。

だから、と言うのは非論理的だが、リーダーの育成については、女性にしろ、男性にしろ、全く意識してこなかった。分野の特性から、研究者としてだけでなく、実践家としてもきちんと仕事のできる人材を育てることのみを考えてきた。日本語教員はチームで仕事をすることが多いが、場合によっては、たった1人の専門家として全てを任されることもある。そんな時でも、自分に何が求められているかを判断し、状況に合わせ、学習者や周囲の人間関係にも配慮して、最大の効果を上げ得るコースをデザイン・運営し、結果に責任を持つ。それが「きちんとした仕事」であろう。分析・判断・実行力と社会的スキル。きちんとした仕事ができる力を養うことが、リーダー育成に繋がるように思う。

Information

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を顕彰するため、平成26年度に澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）を創設しました。本賞は、「門戸開放」という理念のもとに1913年（大正2年）に全国に先駆けて帝国大学の門戸を女性に開いた当時の初代総長の名前にちなんでいます。

●澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について特段に優れた成果を挙げている個人またはグループ

●澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞
東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活動を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手（42歳以下）の個人または若手で構成されるグループ

【募集締切】 2015年7月31日　【受賞課題発表】 2015年9月22日
お問い合わせ先／総務企画部総務課総務係（TEL 022-217-4811）
●センターホームページにも募集要項を掲載しています。

Report of the Seminar

女性リーダー育成 平成27年度第1回 沢柳フェロー・ランチミーティングの開催

女性リーダー育成の一環として、7名の沢柳フェローの先生方を囲んでランチミーティングを開催しました。本年度第1回目の開催にあたっては、4月に医学研究科創生応用医学研究センター長に就任されたばかりの大隅典子教授（総長特別補佐（男女共同参画）、医学系研究科教授）からスピーチをいただきました。その後、沢柳フェローの先生方をはじめとして参加者全員も自己紹介し、和やかに歓談しました。

【開催日】 2015年6月5日（金）12:00-13:30
【会場】　生命科学プロジェクト総合研究棟103号室
【参加した沢柳フェロー（50音順、所属部局省略）】
磯貝恵美子教授、大隅典子教授、経塚淳子教授、才田いずみ教授、
末松和子教授、杉本亜砂子教授、永次史教授
【参加者】 23名

女性リーダー育成関係のイベントのご案内

外部資金獲得セミナー

日時：2015年9月3日（木）12:00～
会場：片平北門会館2F セリシィール
講師：理学研究科 寺田 眞浩 教授
平成27年度第2回沢柳フェロー・ランチミーティングと同時開催します。

第1回TUMUG Forum

日時：10-11月頃
会場：未定
本学に着任5年以内の女性研究者による研究発表会を行います。
男女を問わず、ご参加ください。

Science Angel

平成27年度　サイエンス・エンジェル活動予定　（2015年6月1日現在）

6/23（火）	出張セミナー　秋田県立秋田南高等学校
6/29（月）-7/6（月）	サイエンス・エンジェルスキルアップ講習会（全2回）
7/19（日）	カタールサイエンスキャンパス・サイエンスデイへの出展
7/29（水）-30（木）	オープンキャンパスfor女子高校生2015
8/1（土）-2（日）	国立科学博物館「サイエンスクエア2015」への出展
8/21（金）	「楽しい理科のはなし～不思議の箱を開けよう～」への出展
9/5（土）	出張セミナー　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校
11月	出張セミナー　山形県立山形西高等学校
11/14（土）-15（日）	「サイエンスアゴラ2015」への出展
12/4（金）	出張セミナー　宮城県宮城第一高等学校
3月	平成27年度サイエンス・エンジェル活動報告会

TUMUG
東北大学男女共同参画推進センター
Tohoku University Center for Gender Equality Promotion
TEL 022-217-6092
〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平2−1−1
E-mail　tumug@morihime.tohoku.ac.jp　HP　www.morihime.tohoku.ac.jp

TOHOKU UNIVERSITY

TUMUG

2015 VOL. 3

「TUMUG」とは「Tohoku University（東北大学）」「Movement（運動、活動）」「United（団結、協力）」「Gender（ジェンダー、男女）」からなる頭字語（アクロニム）。東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組が、ムーブメントとして拡がっていくことを目指しています。

TOPICS

センター長および副センター長／男女共同参画推進センター（TUMUG）の看板の前で

01 ▶ サイエンス・エンジェル任命
▶ 科学技術分野の文部科学大臣賞受賞
02 ▶ 男女共同参画委員会について
03 ▶ オープンキャンパス
▶ 相談窓口の紹介
▶ 「ジェンダーと人間社会」開講
▶ センター関係者による学外での活動
04 ▶ コラム:才田いずみ先生

Science Angel Information

オリエンテーションに参加したSA

サイエンス・エンジェル任命

10周年を迎えた今年、新たにサイエンス・エンジェル（SA）が任命されました。任命されたのは過去最高の90名（うち18名は博士課程後期に在籍）です。中でも理学研究科、医学系研究科、工学研究科、農学研究科、生命科学研究科からはそれぞれ10名以上の学生が任命されました。

6月6日に開催したオリエンテーションには76名が出席し、植木俊哉男女共同参画推進センター長をはじめとする諸先生方からSA活動の意義やSA活動に参加する上での心得等についてお話を伺いました。SA経験者も、出張セミナーや体験型科学イベントについてそれぞれ経験に基づいた具体的な話を提供しました。

Winning a Prize!

倉田教授が 科学技術分野の文部科学大臣表彰を受賞

本センターの協力教員である倉田祥一朗教授（大学院薬学研究科）が、サイエンス・エンジェル制度を創設し、責任者としてSA活動を推進してきたとして平成27年度科学技術賞（理解増進部門「サイエンス・エンジェル活動による理系女性研究者の普及啓発」）を受賞されました。

大臣表彰にて

About Us

男女共同参画委員会

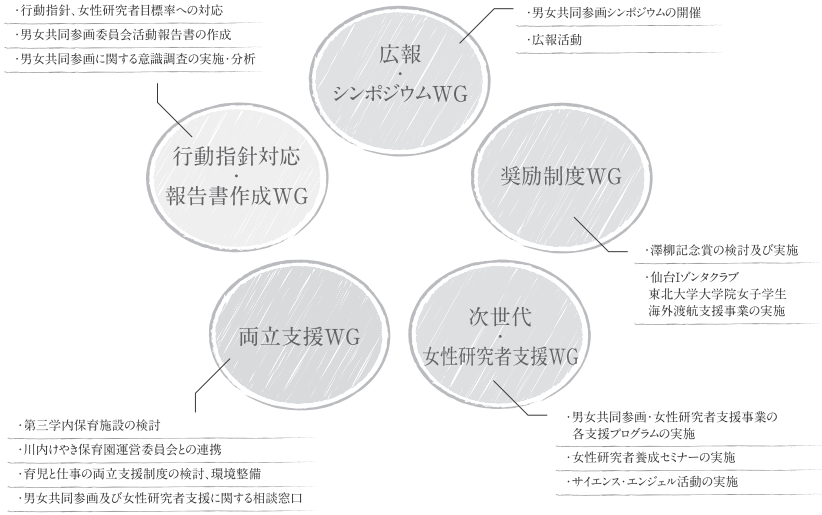
東北大学では、平成13年に男女共同参画委員会を設置して以来、大学における男女共同参画を積極的に推進しています。

現在、委員会には、5つのワーキンググループ（広報・シンポジウム、奨励制度、次世代・女性研究者支援、両立支援、行動指針対応・報告書作成）がおかれ、座長の下、男女共同参画の推進に取り組んでいます。

去る5月19日には平成27年度の第1回目となる第94回男女共同参画委員会が開かれました。委員会では、副委員長の選出、ワーキンググループの構成の確認の他、以下の事項等について審議をしました。

●第2回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞の公募

●第4回仙台Iゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の公募



［ 学内での動き ］ 第94回委員会で報告された部局の取組をご紹介します。

農学研究科

男女共同参画・女性研究者支援事業の募集時に、独自にポスターを作成し、周知の徹底に努めている。単独でシンポジウムを開催し、女子学生に対してロールモデルの提供に努めている。

金属材料研究所

3月9日に名古屋工業大学の川島慶子教授を講師に招き、「ジェンダーと科学イメージの問題―マリー・キュリーの1911年」と題して男女共同参画セミナーを開催した。

流体科学研究所

在籍女性教職員の職場環境整備、独自のベビーシッター利用料等補助プログラム制度の整備を行った。また、育児休業等を取得した任期付教員については、任期を延長できるように、任用・業績評価基準の弾力的な運用を行っている。

東北アジア研究センター

平成26年度は研究に関連する職種に女性を積極的に採用した。うち、特任助教として採用された女性は、平成26年度～平成27年度の男女共同参画・女性研究者支援事業研究スキルアップ経費の採択を受け、海外の学会で報告するなどして活躍している。

Science Angel Information

今年もオープンキャンパスに参加します

本センターで行う本学への入学を希望する女子高校生を対象にした「オープンキャンパス for 女子高校生 2015」では、サイエンス・エンジェル（SA）が若手女性研究者とともに大学での学習や大学生活、研究の面白さを伝えます。

日時：2015年7月29日・30日　12:00-13:30
場所：理学研究科合同A棟第2・第3共通講義室（204号室、205号室）
内容：若手女性研究者・SAによる講演および
　　SAによる進路に関するグループトーク

オープンキャンパスの様子（2014）

参加したサイエンス・エンジェル

7/29（水）

▶簡 梅芳（環境科学研究科 助教）
「全てが「面白い」から」

▶一刀 かおり（生命科学研究科 助教）
「くすりのサイエンス」

▶森岡 真代（理学研究科天文学専攻 博士後期課程2年）
「星空のロマンと科学～宇宙の謎を探る天文学」

7/30（木）

▶升谷 敦子（環境科学研究科 助教）
「機能性金属錯体の分析化学的応用」

▶星野 由美（農学研究科 助教）
「卵子を知り、卵子を活かす」

▶小澤 友美（理学研究科数学専攻 博士後期課程2年）
「整数の奥深さに惹かれて」

Consultation

相談窓口の紹介

男女共同参画に関するお問い合わせは、下記の男女共同参画委員会相談窓口にお寄せください。

本センターでも、男女共同参画に関する一般的なご相談（学会開催時の託児サービス等）を受け付けています。

東北大学男女共同参画委員会相談窓口

総務企画部総務課総務係（男女共同参画担当）
TEL　：022-217-4811
メール：danjyo@grp.tohoku.ac.jp

他にも、学内には次のような相談窓口があります。

東北大学学生相談・特別支援センター
学生相談所（川内北キャンパス）

相談時間：平日 9:30～17:00
申込み先：022-795-7833
ＨＰ　：http://www.ccds.ihe.tohoku.ac.jp/
内容　：学業、将来の進路、人間関係、性格、心の健康など、学生生活上のさまざまな悩みに関する相談。

高度イノベーション博士人財育成ユニット – ILP -

相談方法：登録後、随時受付。
ＨＰ　：http://www.ilp.tohoku.ac.jp/
内容　：就職を希望するポスドクや博士課程後期学生のための専門スタッフによる個別面談等。

Course

「ジェンダーと人間社会」開講

全学教育科目（基幹科目）として「ジェンダーと人間社会」（前・後期とも木曜2講時）を開講しています。

「ジェンダーと人間社会」は、人間社会に存在するジェンダーに関する問題を取り上げ、それが私たちの日常生活や人生にどのように関わっているのかを理解し、その上で男女共同参画社会を形成することの重要性について考察することを目的としています。19名の先生方にご協力いただき、オムニバス形式で実施しています。前期は51名が受講中です。

【担当教員】大隅 典子（副センター長）、米永 一郎（副センター長）、田中 真美（副センター長）、三隅 多恵子（法学研究科附属法政実務教育研究センター　講師）

Activities

センター関係者による学外での活動状況

（2015年1月～5月）

2015年1月26日
熊本大学「バッファリングによる女性研究者の加速」総括シンポジウムでの総合討論への参加
「女性研究者をとりまく現状と未来」（米永一郎（副センター長））

2015年2月17日
千葉大学理系女性教員キャリア支援プログラム総括シンポジウムでの講演
「東北大学の男女共同参画の取り組みについて」（田中真美（副センター長））

2015年3月8日
明治大学女性研究者研究活動支援事業キックオフシンポジウムでの基調講演
「学術における男女共同参画―東北大学の事例をもとに」（大隅典子（副センター長））

2015年3月11日
APRU Asia-Pacific Women in Leadership (APWiL) Workshop 2015
での報告「Supporting faculty members who are parents
through research assistant programs」（保坂雅子（センター助教））

Column

ワークライフバランス

鈴木（升谷）敦子
環境科学研究科
自然共生システム学講座
助教

これまでワークライフバランスをあまり意識しないできましたが、先日結婚したことを機に仕事と家庭について考えてみました。

私は、母が専業主婦だったこともあり、以前は「仕事をする女性」というものを具体的にイメージできませんでした。学生の頃には、仕事と家庭どちらも大変そうに思えて、両立できるかなと自信がありませんでした。今年で助教4年目ですが、実際に働いてみて考えは変わりました。一番大きな変化は、仕事を通して社会に貢献することにやりがいを感じるようになったことです。ぜひ仕事を続けていきたいと思うようになりました。

一昔前まで女性が一手に引き受けていた家事、育児、介護等はどうすればよいのか、という疑問は依然としてあります。男性・女性両方の価値観の変化や、支援制度の整備などにおいて今は転換期だと思います。

幸い、夫は私が働くことに賛成で家事も協力してやっていこうと言っています。家庭と両立させて仕事をしている先輩女性研究者から具体的に話を聞く機会も増え、参考になっています。前向きに、仕事も家庭もこれからがんばっていこうと思います。

Science Angel

平成27年度　サイエンス・エンジェル活動実績　（2015年11月1日現在）

6/23(火)	出張セミナー　秋田県立秋田南高等学校
6/29(月)-7/6(月)	サイエンス・エンジェルスキルアップ講習会（全2回）
7/19(日)	「学都仙台・宮城サイエンスデイ2015」への出展
7/29(水)-30(木)	オープンキャンパスfor女子高校生2015
8/1(土)-2(日)	国立科学博物館「サイエンススクエア2015」への出展
8/19(水)	出張セミナー　山形県立山形北高等学校
8/21(金)	「楽しい理科のはなし～不思議の箱を開けよう～」への出展
9/5(土)	出張セミナー　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校
9/24(木)	出張セミナー　鳥取県立倉吉東高等学校
10/10(土)-11(日)	片平まつりへの出展
	特別企画「サイエンス・エンジェルと話そう！ ～女子の視点から見た理系の学び～」

平成27年度　サイエンス・エンジェル活動予定　（2015年11月1日現在）

11/14(土)	「みやぎサイエンスフェスタ」への出展
11/14(土)-15(日)	「サイエンスアゴラ2015」への出展
11/20(金)	出張セミナー　宮城県石巻西高等学校
11/21(土)	出張セミナー　山形県立山形西高等学校
12/4(金)	出張セミナー　宮城県宮城第一高等学校
3/5(土)	平成27年度サイエンス・エンジェル活動報告会

Report of the Seminar

外部資金獲得セミナー 平成27年度第2回 沢柳フェロー・ランチミーティングの開催

女性リーダー育成の一環として、沢柳フェローの先生方を囲んで、講師に理学研究科の寺田眞浩教授をお迎えし、外部資金獲得のための情報交換を目的としたランチミーティングを開催しました。当センター副センター長である田中真美教授の司会進行のもと、寺田教授や沢柳フェローの先生方からは「申請分野の選択方法をよく検討するとよい」「熱意を伝えることが大切」など具体的な助言がありました。また、活発な質疑応答も交わされ、参加者からも「審査のポイントがよく分かった」「科研費の書き方等に関して、アドバイスをいただける機会がなかったので、ありがたかった」との声が聞かれました。

【開催日】 2015年9月3日(木) 12:00-13:30
【会　場】 片平北門会館2Fセリシィール
【講　師】 理学研究科 寺田眞浩 教授
【参加した沢柳フェロー（50音順、所属部局省略）】
栗原和枝教授、田中真美教授、永次史教授
【参加者】 18名

TUMUG支援事業募集のお知らせ

東北大学では、出産・育児期の研究者やリーダーを目指す女性研究者のための支援としてTUMUG支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）を行っております。平成28年度TUMUG支援事業は、平成28年1月に募集予定です。プログラムによって締切日や対象者が異なりますのでご注意ください。

研究支援要員	（10名）
研究支援要員（シェア型）	（6名）
ベビーシッター利用料等補助	（39名）
スタートアップ研究費	（10名）
研究スキルアップ経費	（15名）
サイエンス・エンジェル	（90名）

（）内は平成27年度の採択状況
（ただし、研究スキルアップ経費は第1回のみ）

Information

東北大学一般事業主行動計画

東北大学では、「東北大学一般事業主行動計画」（計画期間：平成27年度～平成31年度）で以下の5つの目標を掲げ、仕事と家庭の両立支援体制の充実及び研究・労働環境の改善を目指しています。

目標1 仕事と家庭の両立支援のための学内制度の充実を図る。
目標2 職員が利用できる学内制度の周知方法の改善を図る。
目標3 学内託児施設の拡充を図る。
目標4 所定時間外労働の縮減を図る。
目標5 年次有給休暇を取得しやすい環境づくりの推進を図る。

詳しくは、人事企画部のホームページ（学内限定）をご覧ください。「子育てを行う職員への支援制度一覧」等、役に立つ情報が整理して提供されています。センターホームページでもTUMUG支援事業や学内託児施設に関する情報を提供しています。

東北大学男女共同参画推進センター
Tohoku University Center for Gender Equality Promotion
TEL 022-217-6092
〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平2−1−1
E-mail　tumug@morihime.tohoku.ac.jp　HP　www.morihime.tohoku.ac.jp

TOHOKU UNIVERSITY
TUMUG
2015 VOL. 4
「TUMUG」とは「Tohoku University（東北大学）」「Movement（運動、活動）」「United（団結、協力）」「Gender（ジェンダー、男女）」からなる頭字語（アクロニム）。東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組が、ムーブメントとして拡がっていくことを目指しています。

楽しい理科のはなし

TOPICS

01 ▸ 第1回 TUMUG Forum
02 ▸ 第12回 東北大学男女共同参画シンポジウム
▸ 第2回 澤柳記念賞 受賞課題及び受賞者決定
▸ 工学系女性研究者育成支援推進室の取組
03 ▸ 女性教員数データ
▸ SA活動「進路選択支援事業」「体験型科学イベント」
04 ▸ コラム：鈴木（升谷）敦子助教

TUMUG Information

男女問わず、学内教職員、
大学院生、学生の皆さん、
ご参加お待ちしております。

女性研究者による研究発表・交流会

第1回 TUMUG Forum

今年は、東北大学において「杜の都女性研究者ハードリング支援事業」をきっかけとした女性研究者支援が本格的に開始されて10年目にあたります。男女共同参画推進センターでは東北大学の女性研究者のリーダー育成の一環として、着任後5年以内の女性研究者が研究内容及び研究成果を学内で発信する場としてTUMUG Forumを開催することにいたしました。今回は田中真美教授（工学研究科/医工学研究科）および末松和子教授（高度教養教育・学生支援機構）を座長とし、4名の女性教員が発表します。講演の後には発表者を囲んで交流会を実施します。男女を問わず、学内教職員および大学院生、学生の皆様のご参加をお待ちしています。

日時：2015年11月24日(火)
13:00-15:30
場所：カタールサイエンス
キャンパスホール
（青葉山キャンパス）

発表者および発表タイトル

鶴岡 典子
工学研究科　助教
「微小還流を用いた皮膚貼り付け型乳酸センサの開発」

Carine J. Yi
災害科学国際研究所　助教
「GISを利用した多様な災害分析紹介 -USLEモデルを用いた、土壌流出によるセシウム137の流出推測など」

有松 唯
学際科学フロンティア研究所　助教
「国家の起源と成り立ち -人類史の新たな画期をもとめて-」

菅 陽子
経済学研究科 講師
「環境教育を取り入れた日本語クラスの試み－中国大連における実践活動と今後の課題」

詳細は本センターのTUMUG Forumに関するホームページ
http://www.morihime.tohoku.ac.jp/blog/2015/10/09/3049/をご覧ください。

Event Information

入場無料・事前申込不要　どなたでもご参加いただけます！

第12回 東北大学男女共同参画シンポジウム

「科学とジェンダー」

●日時　2015年11月21日(土)13:00-17:00　●場所　医学部開設百周年記念ホール(星陵オーディトリアム)

東北大学は1907年に東北帝国大学として創立されて以来、日本の科学の発展をリードしてきました。本シンポジウムでは、科学の知/科学者世界におけるジェンダーについて討論し、科学領域における女性研究者のさらなる活躍を目指す東北大学のメッセージを発信します。

当日は、第2回澤柳記念賞授賞式および受賞者による講演の後、2つの特別講演を行います。皆さん、お誘いあわせの上、ぜひご参加ください。

詳細は男女共同参画委員会の
男女共同参画シンポジウムに関するホームページ
http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/index3.htmlを
ご覧ください。

来賓　文部科学省
研究振興局長　小松 弥生 氏

特別講演Ⅰ
「近代科学の歴史とジェンダー」
講師　三重大学 名誉教授　小川 眞里子 氏

特別講演Ⅱ
「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」
講師　明治学院大学 教授　柘植 あづみ 氏

Winning Prize!

受賞課題及び受賞者決定

第2回 澤柳記念賞

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
(通称：澤柳記念賞)

東北大学では平成26年度より澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(通称：澤柳記念賞)を創設しました。本賞は男女共同参画社会をめざす活発な取組の一助となるよう、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し、多大な貢献をされた方々を選考し顕彰するものです。

第2回澤柳記念賞は、本賞を日本における女性研究者の研究環境の改善に貢献されてきた大坪久子氏に、奨励賞を大学院生による中高生を対象とした文理融合型の出前授業を行っている新大Witsに授与することになりました。

A賞
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

日本大学 薬学部薬学研究所
上席研究員　大坪 久子氏
(課題名)
日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動

B賞
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

新大 Wits(しんだいうぃっつ)※
(課題名)
“新大 Wits”による
出前授業活動から生まれた
男女共同参画多世代キャリア教育

※新大Witsは、サイエンス・セミナー(出前授業)を行っている
新潟大学大学院生の愛称

Support Activity

工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)の取組

ALicEキャラクター
ずんだぬき

工学系※女性研究者育成支援推進室(ALicE、Association of Leading Women Researchers in Engineering)は①女子学生・女性研究者の育成・支援、②工学分野における男女共同参画意識の醸成、③女子学生が将来継続的に働く意識を高めるためのグランドデザインの策定を目的として、平成25年度に設置されました。

託児室(ずんだぬきっずるーむ)

女性研究者の研究に係る出張経費を助成するSTEP-ALICEプログラム、育児・社会貢献と研究との両立を支援する事務補佐員の派遣、工学系ベビーシッター利用料等補助などの研究支援活動を行っており、これまで7名、8名、3名の方が利用しました。さらに、今年8月には託児室「ずんだぬきっずるーむ」を青葉山キャンパス内に設置し、育児と研究活動の両立のための環境整備を推進しております。

交流会の様子

工学系に所属する女子学生・女性研究者を対象とした交流会の開催やメーリングリストによる情報発信なども行っております。また、「ちょっと聴いてほしい・訊いてみたい」という際に気軽に相談ができる、おはなし窓口も開設しております。

ALicEの活動詳細についてはWebの他、お気軽におはなし窓口へお問い合わせください。

※工学系：工学研究科, 情報科学研究科, 環境科学研究科, 医工学研究科, 災害科学国際研究所,
未来科学技術共同センター, 環境保全センターおよび国際集積エレクトロニクス研究開発センター

ALicE/東北大学工学系女性研究者育成支援推進室(工学研究科総務課総務係内)
TEL: 022-795-5040(内線 5040)
H P: http://alice.eng.tohoku.ac.jp/
おはなし窓口: alice_ohanashi@m.tohoku.ac.jp

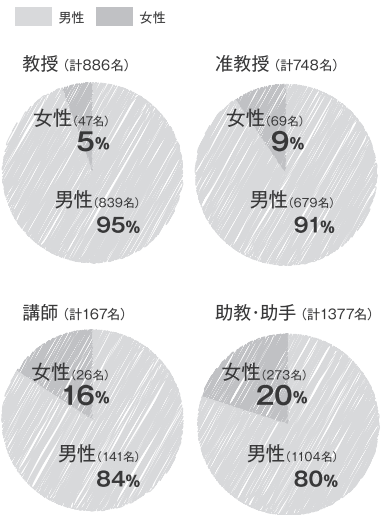
Women Researchers

教員に占める女性の割合
～東北大学の場合～

女性の活躍が求められる中、我が国においては大学や企業で活躍する女性研究者の割合が少ないと指摘されています。東北大学も教員に占める女性の割合が13．1%(助教・助手を除く場合は7．9%)(平成27年5月現在)と例外ではありません。グラフから分かるように、職位が上がるにつれて女性教員の割合は低くなっています。教授の場合、886名のうち女性は47名と5%を占めるに過ぎません。東北大学では、杜の都ジャンプアップ事業等により女性教員を積極的に採用してきましたが、まだまだ女性の占める割合が少ないのが現状です。今後とも皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

東北大学における男女構成比と推移

(平成27年5月1日現在)



Activities

センター関係者による学外での活動状況

(2015年6月～9月)

2015年9月24日
日本遺伝学会第87回大会男女共同参画
ランチョンワークショップでの講演
「男女共同参画への東北大学の取組」(田中真美(副センター長))

Science Angel Information

オープンキャンパス
for女子高校生2015

女子中高生の理系進路選択を応援しています

東北大学サイエンス・エンジェルは、出張セミナーやオープンキャンパスへの出展を行い、女子中高生の理系進路選択を応援しています。

今年は、「オープンキャンパスfor女子高校生2015」(理学研究科と共催)に加えて、片平地区を中心とする東北大学附置研究所の一般公開イベントである片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」(10月10日・11日)の特別企画として、「サイエンス・エンジェルと話そう！～女子の視点から見た理系の学び～」を2日間4回にわたって開催しました。各回2名のサイエンス・エンジェルによる講演の後、グループに分かれて中高生とグループトークを行いました。

子ども達に科学を身近に感じてもらいたい

特定非営利活動法人natural sciences主催の「学都仙台・宮城サイエンスデイ2015」では、昨年大人気だった導電糸を使って手芸感覚で電子工作を行う「ちくちく縫ってLEDが光る かわいい小物づくり」に加えて、新たに3ブース「紫キャベツでコースター」「振り子メトロノーム」「手作りプラネタリウム」を設けて、小学校高学年を中心とする子ども達に原理について説明し、一緒に工作や実験をしました。「楽しい理科のはなし2015」(河北新報社・東京エレクトロン宮城主催)ではプラスチックコップを使った工作「エコーマイクをつくろう～音のふしぎ～」や化学反応でカラフルな球体を作る「カラフル人工いくらを作ろう！」の他、「オレンジパワーでスタンプを作ろう」「ドロドロようかいをつかまえよう！」「けんびきょうをのぞいてみよう」等、5つのブースに約500人の親子が訪れ、楽しい時間を過ごしてもらいました。

楽しい理科のはなし

サイエンスデイ

Column

アベノミクス「新・三本の矢」は、男女共同参画でこそ実現される。

吉田　浩
経済学研究科　教授

昨年9月、アベノミクスの第二弾として、新・三本の矢が公表された。その内容は、①2020年までに名目GDP（国内総生産）を600兆円にすること、②希望出生率1.8を実現すること、そして③家族の介護のために離職しなければならない人をゼロとすることの3つであった。このうち、②と③は明らかにワークライフバランスの実現によって実現されなければならないものである。すなわち、仕事と子育ての両立であり、また女性を中心になされている家族介護の現状を改めることである。

また、GDP600兆円についても、女性の就業の促進なしには達成できない。なぜならば、現在の日本のGDPは名目で490兆円余りであり、これをあと5年で600兆円にするためには、年率名目で3.4%の成長を5年連続で続けなければならない。2012年は1947年からのベビーブーマーが65歳を迎えた年であり、2014年までの3年間に毎年100万人ずつの労働者の退職があった。これを、補うためには生産性の高い能力のある女性が企業社会でなおー層活躍することが求められる。

以上のことを考えると、アベノミクス新・三本の矢は男女共同参画社会の実現なくしては実現できないのである。したがって、男女共同参画社会の実現は、もはや国家の成長と国民の幸福をかけた重大なプロジェクトである。このため、義務だから仕方なく目標まではやるという後ろ向きの姿勢だけではなく、いかにより多くより早く達成して、成果を享受するかという戦略的な視点が必要なのである。

Science Angel

（2016年1月1日現在）

平成27年度　サイエンス・エンジェル活動実績

6/23(火)	出張セミナー　秋田県立秋田南高等学校
6/29(月)-7/6(月)	サイエンス・エンジェルスキルアップ講習会（全2回）
7/19(日)	「学都仙台・宮城サイエンスデイ2015」への出展
7/29(水)-30(木)	オープンキャンパスfor女子高校生2015
8/1(土)-2(日)	国立科学博物館「サイエンススクエア2015」への出展
8/19(水)	出張セミナー　山形県立山形北高等学校
8/21(金)	「楽しい理科のはなし～不思議の箱を開けよう～」への出展
9/4(金)	出張セミナー　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校
9/24(木)	出張セミナー　鳥取県立倉吉東高等学校
10/10(土)-11(日)	片平まつりへの出展　特別企画 「サイエンス・エンジェルと話そう！～女子の視点から見た理系の学び～」
11/14(土)	「みやぎサイエンスフェスタ」への出展
11/14(土)-15(日)	「サイエンスアゴラ2015」への出展
11/20(金)	出張セミナー　宮城県石巻西高等学校
11/21(土)	出張セミナー　山形県立山形西高等学校
12/4(金)	出張セミナー　宮城県宮城第一高等学校
1/30(土)	出張セミナー　山形県立山形東高等学校
2/15(月)	出張セミナー　青森県立三本木高等学校
3/5(土)	平成27年度サイエンス・エンジェル活動報告会
3/9(水)	出張セミナー　仙台白百合学園中学・高等学校　※1月以降は予定

Report of the Seminar

「第1回 TUMUG Forum」（女性研究者研究発表・交流会）の開催

11月24日に本学女性研究者の研究発信および異分野間の人的ネットワーク形成促進を目的として女性研究者による研究発表・交流の場「第1回 TUMUG Forum」を開催しました（共催：工学系女性研究者育成支援推進室（ALicE）、工学研究科、医工学研究科、高度教養教育・学生支援機構）。2部構成とし、それぞれ沢柳フェローを座長におき、本学に着任5年以内の女性研究者4名が自らの研究を分かりやすく発表しました。発表者と参加者との間で活発な質疑応答が行われ、研究発表に対する関心の高さがうかがわれました。

発表会終了後には、ALicEの休養室および託児室を見学しました。また、ALicEとの共催により、発表者4名を囲んで交流会（第3回沢柳フェロー茶話会）を実施し、研究環境や子育て経験、学会等での男女共同参画について、意見や情報を交換しました。

【開催日】 2015年11月24日（火）13:00-15:30
【会　場】 青葉記念会館4階会議室
【参加した沢柳フェロー（50音順、所属部局省略）】末松和子教授、田中真美教授
【参加者】 26名

セミナー後の交流会の様子

Information

子育て中の休業制度について

お子さんが3歳になるまで期間を定めて休業できる育児休業。東北大学では、毎年100名近く出産する教職員がいますが、ここ数年はそのうち約9割が育児休業を取得しています。男性取得者も毎年います。

なお、お子さんが小学校に就学するまでは、以下の2つの制度が利用できます。いずれも教職員とも利用が可能ですので必要に応じて利用を検討ください。

●育児短時間勤務
　1週間あたり20時間～25時間の範囲内で勤務することができる。
●育児部分休業
　始業あるいは終業の時刻までの連続する時間帯において
　1日2時間以内まで休業できる。

詳しくは、所属部局の担当者にお問い合わせください。
人事企画部のホームページ（学内限定）には「子育てを行う職員への支援制度一覧」等、役に立つ情報が整理して提供されています。

東北大学男女共同参画推進センター
Tohoku University Center for Gender Equality Promotion
TEL 022-217-6092
〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平2−1−1
E-mail　tumug@morihime.tohoku.ac.jp　HP　www.morihime.tohoku.ac.jp

TOHOKU UNIVERSITY

TUMUG

2016 VOL. 5

「TUMUG」とは「Tohoku University（東北大学）」「Movement（運動、活動）」「United（団結、協力）」「Gender（ジェンダー、男女）」からなる頭字語（アクロニム）。東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組が、ムーブメントとして拡がっていくことを目指しています。

第12回東北大学男女共同参画シンポジウム

T O P I C S

01 サイエンス・エンジェル（SA）の活動
▶ サイエンスアゴラ2015にて「KADOKAWA賞」受賞
▶ 活動報告会開催のご案内
02 ▶ 平成28年度 TUMUG支援事業募集のお知らせ
03 ▶ 第12回東北大学男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」開催
04 ▶ コラム：吉田 浩教授

Science Angel Information

サイエンス・エンジェル（SA）の活動

サイエンスアゴラ2015にて「KADOKAWA賞」受賞

2015年11月14日・15日に東京で開催された日本最大級の科学フォーラム「サイエンスアゴラ2015 つくろう、科学とともにある社会」（主催：国立研究開発法人科学技術振興機構）に出展し、理系女子に関して語り合う座談会を2日間にわたり計4回実施しました。「サイエンス・エンジェルと語ろう 理系女子の現在・過去・未来」と名付けられた座談会には、大学生・大学院生を中心に、大学・学校関係者、公務員、マスコミ、産業界、さらには保護者の方々が多数参加し、「女性であるために困ること」、「『理系女子』と言われることについての思い」、「理系女子を増やすために必要なこと」といった話題について1時間余り語り合いました。なお、座談会は協賛している株式会社KADOKAWAより「KADOKAWA賞」を受賞しました。

活動報告会開催のご案内

入場無料・事前申込不要
どなたでもご参加いただけます！

来る3月5日、「平成27年度サイエンス・エンジェル活動報告会」を開催します。

中学校や高等学校での出張セミナーや体験型科学イベントを行っている理系女子大学院生であるSAがそれぞれの活動について報告します。また、SA修了者によるトークや本学と同様のプログラムを実施している名古屋大学の事例紹介もあります。男女を問わず、皆様のご参加をお待ちしております。

【日時】2016年3月5日（土）13:30-15:30
【場所】片平北門会館2Fエスパス　※詳細は本センターのホームページをご覧ください。

TUMUG Program

平成28年度 TUMUG支援事業募集のお知らせ

男女共同参画委員会が実施する平成28年度TUMUG支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）の募集がはじまりました。
平成28年度より、両立支援プログラムは対象範囲が広がりましたので、公募要領をご確認の上、是非ご応募ください。

※プログラムによって対象と締切が異なります。各部局での締切にご注意ください。
※詳細は男女共同参画委員会のホームページをご覧ください。

お問い合わせ先／総務企画部総務課総務係 TEL 022-217-4811

両立支援 ～男性も対象～

研究支援要員 （募集）A型：6名程度 B型：若干名

内容：A型：研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助（上限100万円）
B型：大学から事務補佐員を派遣（週1～2日）

対象者：出産・育児・介護を行う教員・技術職員

本部締切：2月15日

ベビーシッター利用料等補助 （募集）20名程度

内容：研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等の補助（上限5万円/半期）

対象者：育児を行う教員、技術職員、ポスドク、博士学生等

本部締切：第1回　2月15日
第2回　9月中旬

女性リーダー育成

リーダー研究支援要員 （募集）若干名

内容：大学から事務補佐員を派遣（週1～2日）

対象者：国の審議会委員等の要職に就く女性教員

本部締切：2月15日

スタートアップ研究費 （募集）5名程度

内容：1年目100万円、2年目50万円の研究費を支援

対象者：新規採用の女性教員（助教以上）

本部締切：7月11日

研究スキルアップ経費 （募集）10名程度

内容：会議・シンポジウム等の旅費支援（海外：上限30万円、国内：上限15万円）

対象者：女性教員（准教授、講師、助教）

本部締切：第1回　4月11日
第2回　10月上旬

次世代育成

サイエンス・エンジェル （募集）40名程度

内容：高校等での出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施

対象者：自然科学系部局に所属する大学院女子学生

本部締切：第1回　3月20日
第2回　5月1日

仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生 海外渡航支援 （募集）2名程度

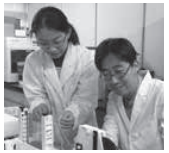
内容：海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援（上限15万円）

対象者：大学院女子学生

本部締切：6月頃

※詳細は5月に通知予定

［ 利用者の声 ］


研究支援要員と作業中の女性研究者（環境科学研究科所属）

●自身で研究を立案し、実行することはとても楽しくやりがいがある仕事です。しかし、研究、臨床、育児はいずれも非常に手間がかかり、一握りのスーパーウーマンを除いて、現実的に両立は困難です。現在は、本制度により採用させていただいた優秀な研究支援要員にお手伝いいただき、一人では実現が難しかった臨床研究の推進や国際学会での発表などの貴重な経験をしており、研究のさらなる発展へと夢を膨らませています。（病院所属／研究支援要員制度を利用）

●突然子供の具合が悪くなったりして保育園から迎えに来るよう連絡が来たとき、どうしても仕事から抜けられない状況だったので、急遽シッター会社に電話しシッターさんに来ていただき、病気の子を家で看てもらいました。もし、この制度がなかったら、結構値もはることですし、積極的にベビーシッターを探そうという気にならず、自分の仕事をあきらめてしまったかもしれない、そのくらい重要な補助です。本当に助かっています。（情報科学研究科所属／ベビーシッター利用料等補助制度を利用）

●私は、スタートアップ研究費制度に採用して頂き、昨年度からご支援して頂きました。本学に学生として在籍しているころから、男女共同参画推進センターの活動に興味があり、本制度を利用した先生方からの勧めもありまして、本制度に応募させて頂きました。本制度は、採用されたばかりの新人教員を対象にしており、新人教員が取得できる研究資金の中でもこのような潤沢な支援制度はなかなかないと思います。２年間に渡る支援をして頂けるので研究テーマの基盤となる研究を十分に行うことができます。今後も本制度を継続して頂き、少しでも多くの女性研究者が東北大学でキャリア形成できるよう応援しています。（生命科学研究科所属／スタートアップ研究費を利用）

●当初、予定していなかった学会での講演が入り、赤字覚悟で引き受けましたが、研究スキルアップ経費から旅費を出していただけて大変助かりました。また時間がなかったにもかかわらず、いろいろと柔軟に対応していただき、どうもありがとうございました。（文学研究科所属／研究スキルアップ経費を利用）

支援を受け発表する女性研究者（農学研究科所属）

Event Information

多元物質科学研究所シンポジウム 開催のご案内

日　時：2016年2月23日（火）15:00-17:00
場　所：片平キャンパス 南総合研究棟2（材料・物性総合研究棟Ⅰ）大会議室
講演「前例をつくり、道をつくる」（仮題）講師：森 郁恵氏（名古屋大学大学院理学研究科 教授）

講演の後、パネルディスカッション～女性教員採用に向けたシステムづくり～を、大隅 典子教授（医学系研究科/副センター長）と杉本 亜砂子教授（生命科学研究科）をパネリストにお迎えして行います。

Activities

センター関係者による学外での活動状況

（2015年10月～12月）

2015年12月7日
東京医科歯科大学 キックオフ・シンポジウム
基調講演「女性研究者とダイバーシティ」
（大隅典子（副センター長））

Event Report

第12回東北大学 男女共同参画シンポジウム 「科学とジェンダー」開催

11月21日に星陵キャンパス医学部開設百周年記念ホールにおいて、第12回東北大学男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」が開催されました（主催：男女共同参画委員会）。当日は、文部科学省研究振興局長の小松弥生氏から来賓のご挨拶をいただいた後、澤柳記念賞受賞者である大坪久子氏（日本大学 薬学部薬学研究所 上席研究員）と中野享香氏（新大Wits代表 新潟大学男女共同参画推進室 准教授）にご講演頂きました。その後の特別講演では、小川眞里子氏（三重大学 名誉教授）が「近代科学の歴史とジェンダー」、柘植あづみ氏（明治学院大学社会学部社会学科 教授）が「男女共同参画は科学と高等教育をいかに変革できるか」について興味深い講演をされました。

また、男女共同参画委員会副委員長でもある田中真美教授（副センター長）が、本学の女性研究者育成支援制度をはじめとする男女共同参画の取組について説明し、支援を受けている女性研究者18名がポスター発表を行いました。

里見進総長ならびに植木俊哉理事（センター長）、男女共同参画委員会委員、学内外の皆様、約120名にご参加いただきました。

総長 里見 進

小松 弥生 氏

大坪 久子 氏

中野 享香 氏

小川 眞里子 氏

柘植 あづみ 氏

［ 学内での動き ］

医学系研究科 男女共同参画推進委員会の取組

医学系研究科男女共同参画推進委員会は、平成27年に医学部が創立100周年を迎えた機会に記念事業として東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞を設置しましたので、ご報告いたします。

東北大学医学部は、東北大学の「門戸開放」の理念のもと昭和の初期から女子を入学者として受け入れ、女性医師/女性研究者を輩出してきました。しかしながら、現在、医学系研究科の大学院生に占める女子学生の割合は約30%であり、依然として性別比の偏りが続き、女性教員になると職位が上がるにつれて女性比率が極端に低くなります。

このような状況の中、優秀な女子大学院生が自信を持ち、諦めることなく研究者キャリアの道を進むことを奨励し、医学・医療等の分野で活躍する女性リーダー育成の一翼を担うことを目的として、この賞を設置しました。

この賞の受賞人数は最大3名で、受賞者には、医学部の同窓会である艮陵同窓会から副賞が授与されることになっております。また、授賞式及び授賞記念講演は、毎年5月に開催される艮陵同窓会総会にて執り行います。

（男女共同参画委員会委員　朝倉京子教授）

医学系研究科女子大学院生奨励賞にご関心のある方は、
医学系研究科男女共同参画推進委員会（医学部総務課総務係 TEL 022-717-8006）
までお問い合わせください。

農学研究科における男女共同参画の取組

農学研究科では平成２５年度に、全学の行動指針にそって、農学研究科としての姿勢や方向性（部局内指針）を表明しました。その一環として農学研究科では、毎年教職員研修のテーマに男女共同参画を掲げて意識の醸成を図っております。また今年度から新たな取組として、女性研究者のロールモデルを紹介する講演会を研究科の男女共同参画委員会が企画し、開催しました。技術職員においても独自の取組として男女共同参画に関する講演会を予定しております。全学制度を参考に情報窓口を設置し、ポスターを作成しました。これらの取組は今後も続けていく予定です。平成２８年度には農学研究科は青葉山へ移転します。両立支援のための環境整備として保育園の設置が順調に進むことを祈っております。女性研究者が切り開く明日を信じて、その支援を大学のトップが決断していることは東北大学が世界へ躍進することに通じるといえます。

（男女共同参画委員会委員　磯貝恵美子教授）

2015年12月11日
農学研究科男女共同参画委員会が講演会を開催

須田桃子氏（毎日新聞東京本社 科学環境部）による講演の様子

資料 11

Science
Angel Report
2015

東北大学
サイエンス・エンジェル
活動報告 2015

TOHOKU
UNIVERSITY

Science Angel

東北大学サイエンス・エンジェル(SA)について

自然科学研究に従事する 使命感・責任感の醸成・ 研究者の卵としてのスキルアップ

平成27年度サイエンス・エンジェル

東北大学サイエンス・エンジェル(SA)は、女子大学院生が次世代を担う小中高校生に科学の魅力を伝え、身近なロールモデルとなることを通して次世代の女性研究者となることを目的として、平成18年度から平成20年度に実施された科学技術振興調整費「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」で誕生しました。事業終了後は、東北大学独自の活動として継続しています。SAは自然科学系の10部局に所属する修士・博士課程(前期・後期)の女子大学院生によって構成されています。年度毎に学内で公募され、採用者は総長によって任命されます。

[トピック]

プレゼンテーション力向上研修会実施

出張セミナー等で役に立つプレゼンテーション力を向上させるための研修会を、知の創出センターにて2回に分けて実施しました(6月29日・7月6日)。第1回では、副センター長の大隅典子教授(医学系研究科)および井上奈穂助教(農学研究科)による講義を行い、第2回では、SA各自が事前に用意した研究紹介をグループで発表・批評し合うワークショップを行いました。

片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」への出展

10月10日・11日に東北大学附置研究所等一般公開として行われた片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」に、特別企画「サイエンス・エンジェルと話そう!〜女子の視点から見た理系の学び〜」を出展しました。理系学部への進学を検討している女子中高生とその保護者を対象に、SAが自らの経験を踏まえて理系学部への進学や大学での学習・研究等に関する講演・グループトークを行いました。

サイエンスアゴラ2015にてKADOKAWA賞受賞

11月14日・15日に東京・お台場地域で行われたサイエンスアゴラ2015「つくろう、科学とともにある社会」に出展し、優れた企画に対して主催・共催・協力・協賛機関が授与する賞として新たに設けられたKADOKAWA賞を受賞しました。「サイエンス・エンジェルと語ろう　理系女子の現在・過去・未来」と名付けられた企画では、計4回、学生・大学院生等が参加して1時間余り理系女子について語り合いました。

SAの採用人数

部局名／年度	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
理学研究科	10	8	8	4	8	3	10	9	9	12
医学系研究科	4	5	6	7	5	3	1	5	12	14
歯学研究科	4	2	1	3	4	5	4	1	4	2
薬学研究科	5	7	8	6	6	6	8	7	7	4
工学研究科	3	8	9	4	6	8	8	11	9	14
農学研究科	1	6	5	3	4	5	4	9	10	15
情報科学研究科	1	1	2	1	1	1	3	1	0	1
生命科学研究科	11	11	7	6	4	4	7	14	13	19
環境科学研究科	0	4	2	4	4	3	8	3	3	4
医工学研究科	—	—	2	1	2	3	4	3	4	5
合計	39	52	50	39	44	41	57	63	71	90
修士課程	19	21	26	23	35	30	40	44	62	72
博士課程	20	31	24	16	9	11	17	19	9	18

SAOGは国内外の大学・研究所、官公庁、民間企業など広範に就職しています

【大学・研究所・官公庁など】　東北大、九大、阪大、佐賀大、国連大学、東京医科歯科大、極地研、科捜研、シカゴ大、IGB(ドイツ)、KU Leuven(ベルギー)、文科省、国土地理院、医薬品医療機器総合機構、日本原子力研究開発機構、工業高等専門学校教員、高校教員など

【民間企業など】　製薬、食品、自動車、化粧品、医療機器、化学、繊維メーカーなど多数

女性研究者支援・育成活動の伝播効果を期待

毎月SAは活動しております

6月　オリエンテーション、出張セミナー1件、研修1件
7月　オープンキャンパス、体験型科学イベント1件
8月　体験型科学イベント2件、出張セミナー1件
9月　出張セミナー2件
10月　進路選択支援イベント1件
11月　出張セミナー2件、その他イベント2件
12月　出張セミナー1件
1月　出張セミナー1件
2月　出張セミナー1件
3月　出張セミナー1件、SA活動報告会
4月　(新規SA募集)

夢が遠く霞み、道に迷いが生じた頃、思い切って挑戦したことが転機に。

東北大学
理学研究科
石川（千代延）仁子

宮城県立水戸第二高等学校卒業。信州大学理学部地質科学科卒業。東北大学大学院理学研究科地学専攻博士前期課程修了。同大学院理学研究科地学専攻博士後期課程修了。博士（理学）。現在、石油資源開発株式会社技術本部技術研究所に勤務。

大昔の歴史や生物の進化に興味があったので、私は大学で地学を学びました。子供の頃から博物館で働くことをずっと夢見ていましたが、実際、博物館の研究員（学芸員）の職は、超難関の狭き門の先にあるものでした。大学院生時代に夢が遠く霞み、道に迷いが生じた頃、SA募集の知らせに出会い、思い切って挑戦したことが転機になりました。それまで知らない人と話すことが大の苦手でずっと避けてきた私でしたが、SAとして小学校で化石観察イベントなどをやるうちに、色々あった苦手意識は薄れ、「自分が変化（成長）したこと」を実感し、ひとつの大きな自信を得ました。卒業後は、大学時代に取り組んだ化石研究の知識と技術を生かせる、石油や天然ガスなどの地下資源を開発する会社で働いています。新しい世界には初めてのことや苦手なことがたくさんありますが、今ではどんどん前向きに取り組むことができます。それは、経験（成長）が次の仕事を行う上での大事な基礎になることを、SA活動から学んだからです。なので、みなさんも色々なことに思い切って挑戦してみてください。結果はどうあれ一生懸命やった分、大きく成長し飛躍できるはずです。

What are your hobbies?

私の趣味は…

私の趣味は、最近始めたゴルフ。気の合う仲間と仕事の後に練習で汗を流したり、たまにラウンドしたりするのがいい運動で、とても楽しいです。

やりたい事がわからない人は、多種多様なことに興味を持ち、ためらわず飛び込んでみて。

東北大学
環境科学研究科
大里（加藤）　彩

富山県立高岡高等学校卒業。東北大学工学部化学・バイオ工学科卒業。同大学院環境科学研究科環境科学専攻博士前期課程修了。修士（環境科学）。現在、JFEエンジニアリング株式会社に勤務。

何か大きなものを創りたい!その思いで、私は今の会社に入社しました。エンジニアリングとはあまり聞きなれない言葉かと思いますが、工場やガス・電気を作り出すプラントを造る仕事です。私は大学時代に化学工学を専攻し、ラボスケールでの製造を、大きな工場にスケールアップする方法について学びました。今は水処理に関わるプラントをメインに、ラボでの基礎実験から大型機へのスケールアップ検討等の仕事に携わっています。私は特にやりたいことがあって大学に入ったのではない分、大学で様々な事に興味を持ち、たくさんの事に挑戦しました。SA活動もその一つです。いろんな人に出会い、いろんな考えに触れ、いろんな夢があることを知りました。今の私の夢は、世界の水不足問題を解決するシステムをつくることです。この夢を持てるようになったのも、SA活動を通して世界中には知らない問題が多くあることに気づけたからです。夢がある人はもちろん、まだやりたい事がわからない人は、ぜひ多種多様なことに興味を持ち、ためらわず飛び込んでみてください。そこには未知の素敵な世界が広がっていることと思います。

What are your hobbies?

私の趣味は…

趣味は旅行です。国内/海外問わず、知らない世界を五感全てで味わえる瞬間が大好きです。（写真はハワイの海岸です。）

私たちが応援され優遇される今がチャンスの時。後輩たちにも頑張ってほしい。

東北大学
工学研究科
大野 直子

神奈川県立横須賀高等学校卒業。東北大学工学部材料物性学科卒業。東北大学大学院工学研究科知能デバイス材料学専攻博士前期課程修了。同博士後期課程修了。博士（工学）。2008年ー2011年3月京都大学エネルギー理工学研究所。北海道大学大学院工学研究院助教。

私はSAの1期生です。河北新報から新聞取材を受けたことがあります。当時からプロジェクトの目的は明確で、高校に入って文理選択を行うまでの間に、科学に対して希望を持つ10代の女性を増やすことが私たちの使命でした。女子高生を対象とした談話会などが行われていました。女性研究者を対象としたシンポジウムの手伝いをしながら、男女共同参画について先生方の人生経験を聴く機会もありました。理系の女性は数が少なかったので、顔を覚えやすく、イベントなどで仲間と顔を合わせると、ほっとしたことを覚えています。

現在、私の所属する専攻には12名の助教が在籍し、うち6名が女性、そのうち4名が外国人です。北大のポジティブアクションの成果だと思います。同僚の男性では、奥様の出産に合わせて育休を取る人が増えています。仕事をするときには、自分が女性であることについて、あまり考えたことはありません。SA1期当時の小谷先生が、「寧ろ私たちが応援され優遇される今がチャンスの時と捉えて」、元気に進んで行こうと仰っていた気がします。これから同じ立場で働いていく後輩たちにも、頑張ってほしいと思います。

What are your hobbies?

私の趣味は…

合唱です。大学時代は東北大学混声合唱団で歌っていました。現在も地域の一般合唱団で歌い続けています。週1回の練習はリフレッシュする貴重な時間です。

一つ一つの実験から新しい知見を紡ぎだす過程にやりがいと好奇心を感じた

東北大学
歯学研究科
塩飽 由香利

愛知県立旭丘高等学校卒業。東北大学歯学部歯学科卒業。東北大学大学院歯学研究科歯科学専攻博士課程修了。博士（歯学）。ハーバード大学歯学部博士研究員、東京医科歯科大学医学部特任助教を経て、現在、東北大学大学院歯学研究科歯学イノベーションリエゾンセンター助教。

歯学部に入学したばかりの頃は、自分の目指す歯科医師像がはっきりと見えていませんでしたが、二つの出来事が私の将来を決めました。一つは、骨を再生するバイオマテリアル（生体材料）の研究室に配属され、自ら手を動かして実験する楽しさに夢中になったことです。教科書の暗記とは全く異なり、一つ一つの実験から新しい知見を紡ぎ出す過程にやりがいと好奇心を感じました。もう一つの出来事は、病院見学をする中で、どんな名医でも救えない（幸せにすることができない）患者様がいることが分かったことです。

私は、現代の歯科治療が解決できない課題に対して、基礎研究を通して貢献する歯科医師になりたいと思っています。現在は、東北大学大学院歯学研究科で、骨とバイオマテリアルの界面で起こる生体反応に着目し、骨再生治療に関する研究に没頭する日々です。また、大学院生の教育にも携わっており、若い世代の人達に科学とイノベーションの素晴らしさを伝えていければと思っています。サイエンスの世界は拓かれた環境で、男女問わず活躍できる体制が整っています。私もプライベートを充実させながら、研究者として成長できるように挑戦する毎日です。

What are your hobbies?

私の趣味は…

月に一回ネイルサロンに通っています。ネイリストさんとは2時間ぐらい喋り続けています。綺麗になった爪を見ると、仕事のモチベーションが格段に上がります。

教育・研究と臨床を両立。学生の教育を通して日々新しいことを学んでいる。

東北大学
医学系研究科
髙根 侑美

浜松学芸高等学校卒業。東北大学医学部保健学科卒業。東北大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了。同博士後期課程修了。博士（保健学）。2014年4月–2015年3月東北大学大学院医学系研究科Autopsy Imaging (Ai) センター助手。現在、九州大学大学院医学研究院助教。

私は、大学で放射線技術科学を専攻し、乳癌の画像診断について研究をしていました。保健学科では、学部を卒業すると大半の学生が病院に就職します。また、保健学という領域はまだ歴史の浅い分野で、博士号を取得しながら働いている先輩方はそれほど多くありませんでした。将来どのような道に進めるかも分からないまま博士課程まで進み、悩んでいた時、SAの活動に興味を持ちました。高校への出張セミナーでは、大勢の高校生の前で私の研究や学科紹介、大学生活について講演をしました。凄く緊張して上手に話せませんでしたが、講演後、個人的に質問や相談に来てくれる高校生たちと接する中で、「大学教員になりたい」という気持ちが芽生えました。私が今の道を選択したのは、SA活動のお陰といっても過言ではありません。

現在は助教として、教育・研究と臨床を両立しています。毎日忙しく大変な面もありますが、学生の教育は自分にとっても良い刺激になり、日々新しいことを学んでいます。若い研究者ほど任期付きのポストしか空きがなく、今後の将来を不安に想う気持ちもありますが、SA活動を通して得た気持ちを忘れずに日々精進していきます。

What are your hobbies?

私の趣味は…

ディズニーが大好きで、暇を見つけては東京ディズニーランド・シーに遊びに行っています。海外ディズニーで遊びに行ったフロリダのウォルトディズニーワールドがとても刺激的だったので、他の5つも絶対に制覇したいです。

もっとレベルアップするため社会人博士課程で勉強中。結果が出た時の喜びやワクワク感は何にも代え難い。

東北大学
薬学研究科
浅野 成美

宮城学院高等学校卒業。東北大学薬学部創薬科学科卒業。東北大学大学院薬学研究科分子薬科学専攻博士前期課程修了。修士（薬科学）。現在、アステラス製薬株式会社に勤務。2015年より東北大学大学院薬学研究科分子薬科学専攻博士後期課程（社会人特別選抜）在籍中。

学部、修士課程では地球温暖化の原因物質である二酸化炭素の有効活用法を、有機化学の観点から研究しました。SA活動では、熱意を持って研究に取り組む仲間に出会い、刺激を受けました。修士課程卒業後は就職と進学で迷いましたが、人の役に立つ研究をやりたいと思い、自分の専攻を最も活かせる製薬企業に就職しました。

現在は薬の有効成分である原薬のスケールアップ研究に取り組んでいます。薬を大量合成する場合、安全、品質、環境、コスト、スピードを考慮に入れながら、堅牢な合成プロセスを構築する必要があります。有機化学の他、分析化学、化学工学、安全工学、環境工学など、様々な知識を動員して研究を行うのは、大変でありながらも勉強になり、日々やりがいを感じます。研究者としてもっとレベルアップしたいと考え、2015年度からは東北大学に戻り、社会人博士課程で勉強しています。

研究は失敗がほとんどで落ち込むこともありますが、それだけに望む結果が出た時の喜びやワクワク感は何にも代え難く、この道を選んで良かったと感じます。みなさんも進路選択をするにあたり、まず自分は何にワクワクするのか、じっくり考えてみるとよいと思います。

What are your hobbies?

私の趣味は…

運動が大の苦手で学生時代は体を動かすことを避けてきましたが、社会人になり一念発起してジムに通い始めました。スカッシュやズンバ、キックボクササイズなどやってみると意外と面白く、今では週末の楽しみとなっています。

オープンキャンパスfor女子高校生2014

平成27年7月29日・30日　12:00〜13:30

担当したサイエンス・エンジェル　21名
来場した高校生とその保護者　2日間合計来場者数170名

理系進学を志す女子高校生の進路選択の一助として、平成18年より東北大学オープンキャンパスにて講演会とグループトークを実施しています。2日間にわたり、全国から訪れた高校生と選択進路や大学での勉強などについて対話しました。

SAの声

●活動を通して自分自身も他の分野について多くのことを知ることができました。研究室生活を送っているうちに視野が狭くなってしまっていたことに気づかされました。今後も活動を通して他の研究科の話を聞いていきたいと思います。

●自分自身にとっても大学生活や研究について振り返る良い機会になりました。自分だけでなく、高校生のみなさんにも「面白い!」「もっと知りたい!」と思ってもらえるような研究をしていきたいと思います。

参加した高校生の声

●自分が進路について悩んでいることや、大学入試のしくみ、大学生活などについてくわしく聞くことができました。将来のイメージについてある程度固めることができました。

●親しく話していただき、とても楽しかったです。進路・勉強法など親身になってアドバイスしてくださり、今後の勉強に生かそうとやる気がでてきました。

体験型科学イベント　企画・実施・出展など

平成27年度の実施場所一覧
（平成18年度より累計46回以上実施）

学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2015への出展
平成27年7月19日出展・担当SA20名・来場者約100名・
東北大学カタールサイエンスキャンパスホール（会場）
※主催:NPO法人natural science

国立科学博物館 2015夏休みサイエンススクエア への出展
平成27年8月1日・2日出展・担当SA2名・来場者約50名・国立科学博物館上野本館（会場）
※主催:（独）国立科学博物館

楽しい理科のはなし〜不思議の箱を開けよう〜 への出展
平成27年8月21日出展・担当SA17名・SA企画の来場者約500名・東京エレクトロンホール宮城（会場）
※主催:河北新報社、東京エレクトロン宮城株式会社

小中高校への出張セミナー
平成27度の実施校一覧 10校

秋田県立秋田南高等学校
（平成27年6月23日実施・担当SA1名・対象:高校2・3年生　117名）

山形県立山形北高等学校
（平成27年8月19日実施・担当SA2名・対象:高校2年生　40名）

茨城県立竜ケ崎第一高等学校
（平成27年9月4日,5日実施・担当SA2名・対象:高校1・2年生　50名）

鳥取県立倉吉東高等学校（母校出張セミナーとして実施）
（平成27年9月24日実施・担当SA2名・対象:高校1・2年生　48名）

宮城県石巻西高等学校
（平成27年11月20日実施・担当SA1名・対象:高校1・2年生　56名）

山形県立山形西高等学校
（平成27年11月21日実施・担当SA9名・対象:高校1年生　31名）※本学来校

宮城県宮城第一高等学校
（平成27年12月4日実施・担当SA6名・対象:高校1年生　80名）

山形県立山形東高等学校
（平成28年1月30日実施・担当SA3名・対象:高校1・2年生　44名）

青森県立三本木高等学校
（平成28年2月15日実施・担当SA4名・対象:高校2年生　89名）

仙台白百合学園中学・高等学校
（平成28年3月9日実施・担当SA2名・対象:中学3年生・高校2年生　92名）

過去の実施校一覧　平成18年度より実施 延べ93校へ訪問（来校対応含む）

高校）[県外]青森県立三本木高等学校, 青森県立青森東高等学校, 秋田県立秋田南高等学校, 秋田県立本荘高等学校, 秋田県立大館鳳鳴高等学校, 秋田県立角館高等学校, 岩手県立宮古高等学校, 山形県村山市立楯岡中学校, 山形県立山形西高等学校, 山形県立山形東高等学校, 山形県立山形北高等学校, 山形県立寒河江高等学校, 茨城県立竜ヶ崎第一高等学校, 茨城県立水戸第二高等学校, 栃木県立宇都宮女子高等学校, 栃木県立大田原女子高等学校, 群馬県立前橋女子高等学校, 東京都立三鷹高等学校, 私立湘南白百合学園高等学校, 清泉女学院高等学校, 福井県立藤島高等学校, 京都教育大学附属高校, 鳥取県倉吉東高等学校, 沖縄県立八重山高等学校[県内]宮城県宮城第一高等学校, 宮城県仙台二華高等学校, 宮城県第二女子高等学校, 宮城県仙台第三高等学校, 宮城県宮城野高等学校, 宮城県古川黎明高等学校, 宮城県白石女子高等学校, 宮城県石巻西高等学校, 仙台市立仙台高等学校, 仙台白百合学園中学高等学校, 仙台向山高等学校

小・中学校）盛岡市立仙北小学校／仙台市立荒町小学校／仙台市立郡山小学校／仙台市立旭丘小学校／名取市立館腰小学校／仙台市立五橋中学校／仙台市立郡山中学校／仙台白百合学園中学校／村山市立楯岡中学校／山形市立第八小学校　他、小中学校訪問実績あり

スキルアップ講習会「プレゼンテーション力向上研修会」実施
6月29日・7月6日実施・第1回（講義）29名、第2回（ワークショップ）24名参加

東北大学附置研究所等一般公開
片平まつり2015「感じてみよう、科学のチカラ」への出展
特別企画「サイエンス・エンジェルと話そう!
〜女子の視点から見た理系の学び〜」
平成27年10月10日・11日実施・担当SA19名・女子中高生を対象に
講演およびグループトーク、約40名参加

「みやぎサイエンスフェスタ（主催:宮城県教育委員会）」への出展
平成27年11月14日実施・担当SA2名・高校生約100名を対象に講演

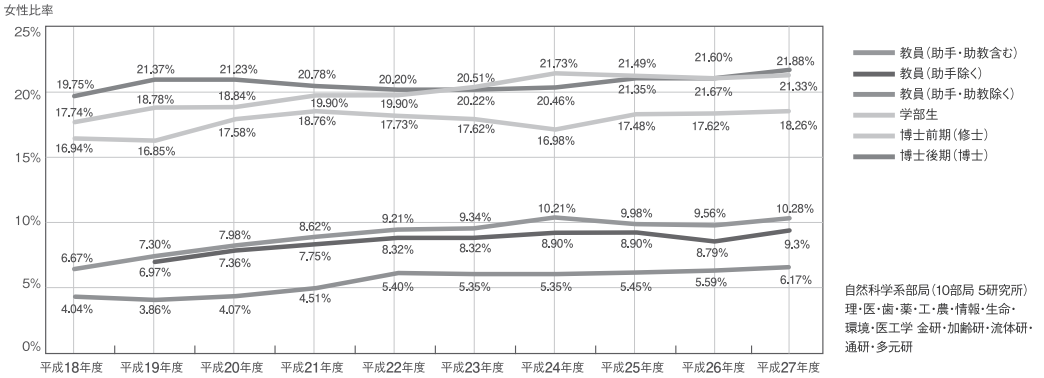
東北大学サイエンス・エンジェルセミナー
for山形県立山形西高等学校の実施
平成27年11月21日実施・担当SA9名・高校1年生31名を対象に講演・グループトーク・研究室訪問

「サイエンスアゴラ2015　つくろう、科学とともにある社会」への出展
「サイエンス・エンジェルと語ろう　理系女子の現在・過去・未来」
平成27年11月14日・15日実施・担当SA2名・一般市民（約30名参加）を対象に座談会開催

第12回東北大学男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」への参加
平成27年11月21日・SA4名参加（シンポジウム来場者数約120名）

第1回TUMUG Forum（女性研究者による研究発表・交流会）への参加
平成27年11月24日・SA1名参加（Forum参加者数約30名）

自然科学系部局における在籍教員・学生の女性比率



自然科学系部局（10部局 5研究所）
理・医・歯・薬・工・農・情報・生命・環境・医工学 金研・加齢研・流体研・通研・多元研

東北大学における男女共同参画推進体制

東北大学は、大正2年（1913年）、当時の国立大学として初めて女性に門戸を開き、3名の女子学生を理学部へ入学させました。その伝統のもと、本学では平成13年に全学的組織として男女共同参画委員会を発足させ、男女格差の是正、研究・労働環境の改善、学内保育園の設置・運営を含めた両立支援体制の充実などに努めてまいりました。平成25年（2013年）には、日本初の女子学生が入学してから100年を迎えたことを記念して、1）両立支援・環境整備、2）女性リーダー育成、3）次世代育成、4）顕彰制度、5）地域連携、6）国際化対応、7）支援推進体制からなる「男女共同参画推進のための行動指針」を策定し、記念シンポジウムの開催などの行事を展開しました。平成26年4月には、本学全体の男女共同参画の取組を円滑に推進することを目的として男女共同参画委員会の支援機関として「男女共同参画推進センター」を設置しました。

東北大学サイエンス・エンジェル活動 運営体制

サイエンス・エンジェル活動は、男女共同参画推進センターが次世代育成活動の一環として行っています。

センター長	植木俊哉　男女共同参画委員会委員長／理事（総務・国際展開・事務統括担当）
副センター長	大隅典子　総長特別補佐（男女共同参画担当）／医学系研究科　教授
副センター長	米永一郎　男女共同参画委員会副委員長／金属材料研究所　教授
副センター長	田中真美　男女共同参画委員会副委員長／医工学・工学研究科　教授
協力教員	倉田祥一朗　薬学研究科　教授
スタッフ	保坂雅子（助教）、中戸川政江、野中久美

TUMUG

東北大学 男女共同参画推進センター

〔サイエンス・エンジェルへのご依頼・お問い合わせ先〕

ホームページ　http://www.morihime.tohoku.ac.jp/　メールアドレス　sa_office@morihime.tohoku.ac.jp

募金概要

募金使途

研究と育児の両立、次世代育成などの女性研究者支援や学内保育環境の充実、伝統の継承等を行います。

目標額

各年度1,000万円

ご寄附の方法

◆法人としてお申込みをいただく場合

基金事務局よりご案内をお送りします。

◆個人としてお申込みをいただく場合

クレジットカード決済、郵便振替、銀行振込によるご寄附をお願いいたします。

税制上の優遇措置

東北大学基金へのご寄附につきましては、税制上の優遇措置を受けることができます。

◆法人の場合

寄附金額全額を損金に算入することができます。

◆個人の場合

税務署に確定申告をしていただくことにより、所得税の寄附金控除が受けられます。また、宮城県に住所を有する方は併せて個人県民税（一部市町村の個人市町村民税を含む）の寄附金税額控除も受けられます。

感謝の気持ちを込めて

寄附者の皆様への感謝を込めて、数々の特典をご用意しました。

●賞の贈呈

ご寄附の総額に応じて、賞を贈呈させていただきます。

種別	個人	法人・団体
栄誉功労賞	3,000万円以上	1億円以上
特別功労賞	1,000万円以上	5,000万円以上
功労賞	100万円以上	1,000万円以上
特別功績賞	50万円以上	500万円以上
功績賞	10万円以上	100万円以上

●寄附者顕彰銘板へのご芳名の掲載

賞を受けられた寄附者様のお名前を、東北大学片平キャンパス内エクステンション教育研究棟に設置している「東北大学基金寄附者顕彰銘板」に掲載いたします。

●感謝のつどいへのご招待

賞を受けられた寄附者様を、東北大学総長が主催する「感謝のつどい」など大学が主催する催事にご招待いたします。

●東北大学萩友会（しゅうゆうかい）プレミアム会員特典

賞を受けられた個人の寄附者様には、萩友会プレミアム会員として様々な特典を提供させていただきます。

※詳しくは、東北大学基金ＷＥＢサイトをご覧ください。

東北大学基金（東北大学総務企画部広報課基金係）
〒980-8577仙台市青葉区片平２丁目１番１号
TEL：022-217-5058・5905　E-mail：kikin@grp.tohoku.ac.jp
URL：http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kikin/japanese/

東北大学特定基金へのご協力のお願い

男女共同参画推進基金

男女共同参画のさらなる推進のために

TOHOKU UNIVERSITY

東北大学基金
Tohoku University Fund

女性研究者のスキルアップやキャリアアップ、研究と育児の両立、次世代育成などの支援や学内保育環境の充実、伝統の継承等を行うため、次のような事業を推進します。

TUMUG支援事業

TUMUGでは研究と育児を両立するために研究支援要員を雇う費用や新規で採用された女性研究者の研究費等の支援を行っています。今後はさらに国の審議会委員等の社会貢献や介護等を行う女性研究者への支援も充実させていきます。

「TUMUG」とは
男女共同参画推進センターの愛称です。
「Tohoku University」「Movement」「United」「Gender」からなる頭字語で、東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組みが、ムーブメントとして拡がっていくことを目指しています。
Mail：tumug@morihime.tohoku.ac.jp
URL：http://www.morihime.tohoku.ac.jp/

●本学における女性研究者比率

10.7%（平成26年度）　国立大学の平均 14.7%

●現在実施している支援制度

1.両立支援
子供を持つ自然科学系女性研究者が出産、育児等を理由に研究を断念することがないよう、研究と育児を両立させることを目的として、下記費用の一部を補助します。

◎研究支援要員
自然科学系の女性教員を対象に、研究支援要員雇用のために必要な人件費を補助
◎ベビーシッター利用料等補助
教員、技術職員、PD、博士学生を対象に、研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等を補助

2.女性リーダー育成
世界トップリーダーとなるような広い学問領域を見渡せる女性リーダーの育成を目的として、下記を支援します。

◎研究支援要員（シェア型）
自然科学系の女性教員を対象に採択者同士で事務補佐員をシェア
◎スタートアップ研究費
新規採用の女性教員を対象に研究費を支援
◎スキルアップ研究費
女性教員を対象に、会議・シンポジウム等の旅費を支援

サイエンス・エンジェル活動の充実

サイエンス・エンジェル（SA）とは次世代の研究者を目指す中高校生等に「女性研究者ってかっこいい！」、「理系進学って楽しい！」という思いを伝えるために結集した、東北大学の自然科学系女子大学院生の集まりです。女性研究者のロールモデルとしてセミナーやイベントに参加し、科学の魅力・研究のおもしろさを伝えています。将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するため、このサイエンス・エンジェル活動のさらなる充実を図ります。

◀サイエンススクエア2014参加者の集合写真

オープンキャンパスの様子▼

年間に、全国10ヶ所程度の中学校・高等学校でセミナーを開催するほか、体験型科学イベントをはじめとしたさまざまな催事への出展を行っています。

学内保育環境の充実

子供達が安心・安全な環境で保育を受けられるよう、学内保育所（川内けやき保育園、星の子保育園）の遊具等の整備を進めるほか、新たに保育所を設置し、受入体制を充実させます。

【現在の学内保育施設】
●川内けやき保育園（全学対象）　定員30名
●星の子保育園（星陵地区職員対象）　定員25名
●星の子ルーム（全学対象、病後児保育）
▶青葉山新キャンパスに新たに保育園を設置することを検討中

伝統の継承と機運の醸成

日本初の「女子学生」が誕生してから100年を迎えたことを記念し、学内に記念碑等を設置して、建学以来の理念の一つである「門戸開放」の伝統を継承するとともに内外に発信し、男女共同参画推進の機運を醸成していきます。

また、初代総長である澤柳政太郎を記念して、平成26年度より澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）を創設しました。アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰していきます。

第1回澤柳政太郎記念 東北大学男女共同参画受賞者

【本　賞】
明治大学法科大学院教授 辻村みよ子氏
【奨励賞】
ＳＡ輝友会（エスエーきゆうかい）

女子学生入学100年の歴史と東北大学男女共同参画委員会について

1913年（大正2年）、東北帝国大学に、日本の大学として初めて３名の女子学生が入学しました。黒田チカ（佐賀県）、牧田らく（京都府）、丹下ウメ（鹿児島県）です。

彼女たちは、化学、数学を専攻して日本初の女性学士となりました。さらに、黒田は日本で二番目の女性理学博士となり、丹下は当時男性でも異例であった日米両方で博士号を取得するなど、女性研究者のパイオニアとして活躍しました。

その後、本学は全国に先駆けて2001年に男女共同参画委員会を発足させるなど、男女共同参画の包括的推進において、日本をリードする活動を展開してきました。

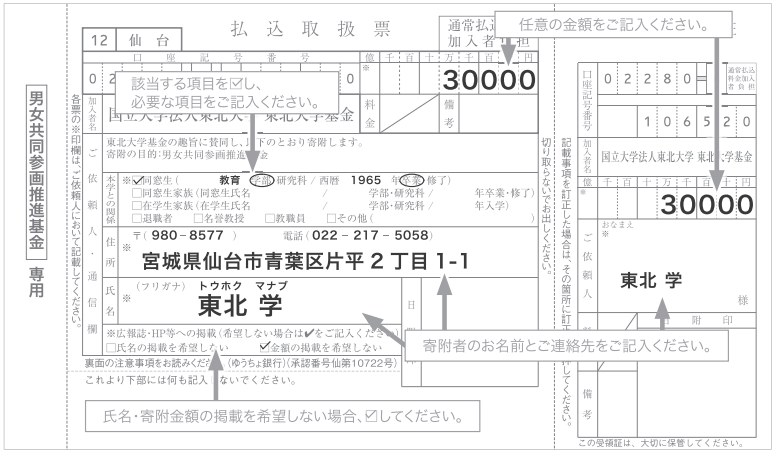
東北大学はこのような女子学生入学100年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として平成25年に「男女共同参画推進のための行動指針」を制定しました。この行動指針に基づき、①両立支援・環境整備、②女性リーダー育成、③次世代育成、④顕彰制度、⑤地域連携、⑥国際化対応、⑦支援推進体制、の7プログラムを実施していきます。

年齢・性別等を問わず、誰もが夢や希望を持って、あらゆる分野で活躍できる社会を目指して、男女共同参画の推進に取り組んでいきます。

First Women Students in 1913 Tohoku University

▲東北大学女子学生入学百周年記念ロゴマーク

記入例



資料１３

東北大学における在籍教員・学生の女性比率

①主要部局における在籍教員の女性比率（教授・准教授・講師・助教）

各年度5月1日現在

部局名	平成25年度				平成26年度				平成27年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文学研究科・文学部	80	15	95	15.79%	80	15	95	15.79%	79	15	94	15.96%
教育学研究科・教育学部	30	6	36	16.67%	32	4	36	11.11%	32	4	36	11.11%
法学研究科・法学部	46	15	61	24.59%	46	14	60	23.33%	45	15	60	25.00%
経済学研究科・経済学部	54	7	61	11.48%	53	8	61	13.11%	54	8	62	12.90%
理学研究科・理学部	242	10	252	3.62%	239	11	250	4.40%	235	8	243	3.29%
医学系研究科・医学部	250	54	304	17.76%	255	57	312	18.27%	255	59	314	18.79%
歯学研究科・歯学部	76	18	94	19.15%	79	19	98	19.39%	78	22	100	22.00%
薬学研究科・薬学部	58	9	67	13.43%	55	9	64	14.06%	55	9	64	14.06%
工学研究科・工学部	334	15	349	4.30%	336	14	350	4.00%	334	14	348	4.02%
農学研究科・農学部	103	15	118	12.71%	104	16	120	13.33%	109	18	127	14.17%
国際文化研究科	35	7	42	16.67%	33	5	38	13.16%	33	5	38	13.16%
情報科学研究科	78	7	85	8.24%	79	5	84	5.95%	83	7	90	7.78%
生命科学研究科	69	10	79	12.66%	66	8	74	10.81%	69	8	77	10.39%
環境科学研究科	50	3	53	5.66%	51	5	56	8.93%	48	5	53	9.43%
医工学研究科	25	3	28	10.71%	31	4	35	11.43%	32	4	36	11.11%
教育情報学研究部	9	0	9	0.00%	9	0	9	0.00%	8	1	9	11.11%
金属材料研究所	116	7	123	5.69%	121	5	126	3.97%	120	5	125	4.00%
加齢医学研究所	53	7	60	11.67%	56	5	61	8.20%	51	4	55	7.27%
流体科学研究所	39	2	41	4.88%	39	2	41	4.88%	40	1	41	2.44%
電気通信研究所	67	1	68	1.47%	66	1	67	1.49%	62	1	63	1.59%
多元物質科学研究所	128	4	132	3.03%	135	4	139	2.88%	131	4	135	2.96%
災害科学国際研究所	50	8	58	13.79%	58	11	69	15.94%	53	11	64	17.19%
東北アジア研究センター	22	1	23	4.35%	23	1	24	4.17%	22	1	23	4.35%
病院	273	47	320	14.69%	269	46	315	14.60%	252	51	303	16.83%
高度教養教育・学生支援機構					61	12	73	16.44%	62	14	76	18.42%
合計	2287	271	2558	10.59%	2376	281	2657	10.58%	2342	294	2636	11.15%

※　毎年5/1に行われる学校基本調査より男女共同参画委員が在籍する部局のみ抜粋（助手を除く）

（参考）文系、自然科学系別　女性比率（助手を除く）

部局名	平成25年度				平成26年度				平成27年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文系	254	50	304	16.45%	253	46	299	15.38%	251	48	299	16.05%
自然科学系	2011	220	2231	9.86%	2039	222	2261	9.82%	2007	231	2238	10.32%

※文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、病院の合計値。

②主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率

部局名		平成２５年５月１日現在 平成２５年度				平成２６年５月１日現在 平成２６年度				平成２７年５月１日現在 平成２７ 年度			
		男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率
文学研究科	教授	38	4	42	9.52%	41	4	45	8.89%	40	4	44	9.09%
	准教授（助教授）	29	6	35	17.14%	27	6	33	18.18%	28	6	34	17.65%
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教	13	5	18	27.78%	12	5	17	29.41%	11	5	16	31.25%
	助手			0	–	1		1	0.00%	1		1	0.00%
	教員数（総数）	80	15	95	15.79%	81	15	96	15.63%	80	15	95	15.79%
文学研究科　学生	学部	463	534	997	53.56%	448	529	977	54.15%	475	502	977	51.38%
	修士（博士前期）	92	81	173	46.82%	96	77	173	44.51%	89	81	170	47.65%
	博士（博士後期）	99	76	175	43.43%	97	72	169	42.60%	96	71	167	42.51%
教育学研究科	教授	16	2	18	11.11%	16	1	17	5.88%	14	1	15	6.67%
	准教授（助教授）	11	2	13	15.38%	11	2	13	15.38%	13	2	15	13.33%
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教	3	2	5	40.00%	5	1	6	16.67%	5	1	6	16.67%
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）	30	6	36	16.67%	32	4	36	11.11%	32	4	36	11.11%
教育学研究科　学生	学部	153	149	302	49.34%	150	158	308	51.30%	164	158	322	49.07%
	修士（博士前期）	28	45	73	61.64%	26	50	76	65.79%	26	41	67	61.19%
	博士（博士後期）	43	43	86	50.00%	38	42	80	52.50%	27	38	65	58.46%
法学研究科	教授	24	5	29	17.24%	27	5	32	15.63%	28	5	33	15.15%
	准教授（助教授）	16	8	24	33.33%	14	7	21	33.33%	11	7	18	38.89%
	講師		1	1	100.00%		1	1	100.00%		1	1	100.00%
	助教	6	1	7	14.29%	5	1	6	16.67%	6	2	8	25.00%
	助手	1	3	4	75.00%	1	3	4	75.00%	0	2	2	100.00%
	教員数（総数）	47	18	65	27.69%	47	17	64	26.56%	45	17	62	27.42%
法学研究科　学生	学部	522	184	706	26.06%	530	189	719	26.29%	532	191	723	26.42%
	修士（博士前期）	156	69	225	30.67%	144	35	179	19.55%	123	35	158	22.15%
	博士（博士後期）	35	21	56	37.50%	31	15	46	32.61%	28	10	38	26.32%
経済学研究科	教授	34	2	36	5.56%	32	2	34	5.88%	34	2	36	5.56%
	准教授（助教授）	16	5	21	23.81%	18	6	24	25.00%	19	5	24	20.83%
	講師	4		4	0.00%	3		3	0.00%	1	1	2	50.00%
	助教			0	–			0	–			0	–
	助手		5	5	100.00%		5	5	100.00%		5	5	100.00%
	教員数（総数）	54	12	66	18.18%	53	13	66	19.70%	54	13	67	19.40%
経済学研究科　学生	学部	946	212	1158	18.31%	949	217	1166	18.61%	943	224	1167	19.19%
	修士（博士前期）	106	56	162	34.57%	97	62	159	38.99%	97	76	173	43.93%
	博士（博士後期）	43	22	65	33.85%	41	22	63	34.92%	41	23	64	35.94%
理学部・理学研究科	教授	73	1	74	1.35%	75	1	76	1.32%	75	1	76	1.32%
	准教授（助教授）	75	2	77	2.60%	75	3	78	3.85%	75	3	78	3.85%
	講師	7		7	0.00%	4		4	0.00%	5		5	0.00%
	助教	87	7	94	7.45%	85	7	92	7.61%	80	4	84	4.76%
	助手	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%
	教員数（総数）	245	11	256	4.30%	242	12	254	4.72%	238	9	247	3.64%
理学部・理学研究科　学生	学部	1184	227	1411	16.09%	1192	220	1412	15.58%	1203	231	1434	16.11%
	修士（博士前期）	493	85	578	14.71%	501	85	586	14.51%	487	95	582	16.32%
	博士（博士後期）	255	29	284	10.21%	254	43	297	14.48%	244	43	287	14.98%
医学部医学科・医学系研究科	教授	78	11	89	12.36%	76	12	88	13.64%	79	13	92	14.13%
	准教授（助教授）	62	7	69	10.14%	64	7	71	9.86%	62	10	72	13.89%
	講師	28	8	36	22.22%	27	7	34	20.59%	25	6	31	19.35%
	助教	82	28	110	25.45%	88	31	119	26.05%	89	30	119	25.21%
	助手	12	13	25	52.00%	14	11	25	44.00%	12	12	24	50.00%
	教員数（総数）	262	67	329	20.36%	269	68	337	20.18%	267	71	338	21.01%
医学部医学科・医学系研究科　学生	学部	643	106	749	14.15%	667	106	773	13.71%	689	114	803	14.20%
	修士（博士前期）	85	84	169	49.70%	80	87	167	52.10%	82	99	181	54.70%
	博士（博士後期・博士）	498	206	704	29.26%	491	197	688	28.63%	518	190	708	26.84%
医学部保健学科	教授			0	–			0	–			0	–
	准教授（助教授）			0	–			0	–			0	–
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教			0	–			0	–			0	–
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）			0	–			0	–			0	–
医学部保健学科　学生	学部	173	424	597	71.02%	179	413	592	69.76%	179	403	582	69.24%
歯学部・歯学研究科	教授	19	1	20	5.00%	21	1	22	4.55%	20	1	21	4.76%
	准教授（助教授）	9	1	10	10.00%	13	1	14	7.14%	13	1	14	7.14%
	講師	9	1	10	10.00%	6	1	7	14.29%	7	1	8	12.50%
	助教	39	15	54	27.78%	39	16	55	29.09%	38	19	57	33.33%
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）	76	18	94	19.15%	79	19	98	19.39%	78	22	100	22.00%
歯学部・歯学研究科　学生	学部	201	129	330	39.09%	205	129	334	38.62%	196	130	326	39.88%
	修士（博士前期）	6	6	12	50.00%	5	12	17	70.59%	8	13	21	61.90%
	博士（博士後期）	108	58	166	34.94%	115	51	166	30.72%	116	54	170	31.76%
薬学部・薬学研究科	教授	18		18	0.00%	20		20	0.00%	20		20	0.00%
	准教授（助教授）	12	3	15	20.00%	10	3	13	23.08%	11	3	14	21.43%
	講師	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%
	助教	25	5	30	16.67%	22	5	27	18.52%	21	5	26	19.23%
	助手	3	3	6	50.00%	3	2	5	40.00%	3	3	6	50.00%
	教員数（総数）	61	12	73	16.44%	58	11	69	15.94%	58	12	70	17.14%
薬学部・薬学研究科　学生	学部(4年制＋6年制)	280	103	383	26.89%	277	103	380	27.11%	273	116	389	29.82%
	修士（博士前期）	97	29	126	23.02%	87	33	120	27.50%	98	27	125	21.60%
	博士（博士後期）	69	14	83	16.87%	64	16	80	20.00%	59	23	82	28.05%

部局名		平成２５年５月１日現在 平成２５年度				平成２６年５月１日現在 平成２６年度				平成２７年５月１日現在 平成２７ 年度			
		男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率
工学部・工学研究科	教授	111	1	112	0.89%	115	1	116	0.86%	110	1	111	0.90%
	准教授（助教授）	96	2	98	2.04%	100	4	104	3.85%	107	4	111	3.60%
	講師	1		1	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	助教	126	12	138	8.70%	119	9	128	7.03%	115	9	124	7.26%
	助手	4	4	8	50.00%	4	3	7	42.86%	3	4	7	57.14%
	教員数（総数）	338	19	357	5.32%	340	17	357	4.76%	337	18	355	5.07%
工学部・工学研究科学生	学部	3278	415	3693	11.24%	3282	444	3726	11.92%	3280	458	3738	12.25%
	修士（博士前期）	1351	156	1507	10.35%	1338	141	1479	9.53%	1334	160	1494	10.71%
	博士（博士後期）	469	51	520	9.81%	474	54	528	10.23%	477	46	523	8.80%
農学部・農学研究科	教授	39	2	41	4.88%	40	2	42	4.76%	35	2	37	5.41%
	准教授（助教授）	39	4	43	9.30%	38	4	42	9.52%	41	4	45	8.89%
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教	25	9	34	26.47%	26	10	36	27.78%	33	12	45	26.67%
	助手	5	1	6	16.67%	4	0	4	0.00%	3	0	3	0.00%
	教員数（総数）	108	16	124	12.90%	108	16	124	12.90%	112	18	130	13.85%
農学部・農学研究科　学生	学部	396	281	677	41.51%	381	288	669	43.05%	380	285	665	42.86%
	修士（博士前期）	193	109	302	36.09%	161	106	267	39.70%	163	99	262	37.79%
	博士（博士後期）	85	37	122	30.33%	80	36	116	31.03%	68	34	102	33.33%
国際文化研究科	教授	21	4	25	16.00%	22	4	26	15.38%	21	4	25	16.00%
	准教授（助教授）	14	3	17	17.65%	11	1	12	8.33%	12	1	13	7.69%
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教			0	–			0	–			0	–
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）	35	7	42	16.67%	33	5	38	13.16%	33	5	38	13.16%
国際文化研究科　学生	修士（博士前期）	20	54	74	72.97%	26	59	85	69.41%	25	45	70	64.29%
	博士（博士後期）	21	40	61	65.57%	24	40	64	62.50%	22	41	63	65.08%
情報科学研究科	教授	27		27	0.00%	32		32	0.00%	32		32	0.00%
	准教授（助教授）	28	5	33	15.15%	27	4	31	12.90%	28	5	33	15.15%
	講師	1	1	2	50.00%	0	1	1	100.00%	0	1	1	100.00%
	助教	22	1	23	4.35%	20	0	20	0.00%	23	1	24	4.17%
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）	78	7	85	8.24%	79	5	84	5.95%	83	7	90	7.78%
情報科学研究科　学生	修士（博士前期）	259	29	288	10.07%	262	29	291	9.97%	255	37	292	12.67%
	博士（博士後期）	88	22	110	20.00%	85	23	108	21.30%	91	22	113	19.47%
生命科学研究科	教授	25	1	26	3.85%	25	1	26	3.85%	24	2	26	7.69%
	准教授（助教授）	16		16	0.00%	16		16	0.00%	16		16	0.00%
	講師	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	助教	26	9	35	25.71%	23	7	30	23.33%	27	6	33	18.18%
	助手	1		1	0.00%	1		1	0.00%	0		0	–
	教員数（総数）	70	10	80	12.50%	67	8	75	10.67%	69	8	77	10.39%
生命科学研究科　学生	修士（博士前期）	140	48	188	25.53%	142	59	201	29.35%	133	61	194	31.44%
	博士（博士後期）	57	26	83	31.33%	56	27	83	32.53%	57	20	77	25.97%
環境科学研究科	教授	19		19	0.00%	19		19	0.00%	15	1	16	6.25%
	准教授（助教授）	17		17	0.00%	20		20	0.00%	19		19	0.00%
	講師			0	–		1	1	–		1	1	–
	助教	14	3	17	17.65%	12	4	16	25.00%	14	3	17	17.65%
	助手	3	2	5	40.00%	3	2	5	40.00%	2	2	4	50.00%
	教員数（総数）	53	5	58	8.62%	54	7	61	11.48%	50	7	57	12.28%
環境科学研究科　学生	修士（博士前期）	166	42	208	20.19%	166	33	199	16.58%	180	29	209	13.88%
	博士（博士後期）	76	24	100	24.00%	65	25	90	27.78%	19	24	73	32.88%
医工学研究科	教授	17	1	18	5.56%	20	1	21	4.76%	21	1	22	4.55%
	准教授（助教授）	5	2	7	28.57%	5	2	7	28.57%	5	2	7	28.57%
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教	3		3	0.00%	6	1	7	14.29%	6	1	7	14.29%
	助手		1	1	100.00%		0	0	–		0	0	–
	教員数（総数）	25	4	29	13.79%	31	4	35	11.43%	32	4	36	11.11%
医工学研究科　学生	修士（博士前期）	67	17	84	20.24%	67	16	83	19.28%	67	7	74	9.46%
	博士（博士後期）	34	5	39	12.82%	44	6	50	12.00%	45	6	51	11.76%
教育情報学研究部・教育部	教授	4		4	0.00%	4		4	0.00%	3		3	0.00%
	准教授（助教授）	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	講師			0	–			0	–			0	–
	助教	3		3	0.00%	3		3	0.00%	3	1	4	25.00%
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）	9	0	9	0.00%	9		9	0.00%	8	1	9	11.11%
教育情報学研究部・教育部　学生	修士（博士前期）	11	16	27	59.26%	8	16	24	66.67%	8	17	25	68.00%
	博士（博士後期）	17	6	23	26.09%	15	8	23	34.78%	18	7	25	28.00%
金属材料研究所	教授	26		26	0.00%	28		28	0.00%	30		30	0.00%
	准教授（助教授）	36	2	38	5.26%	34	2	36	5.56%	34	2	36	5.56%
	講師	1		1	0.00%	2		2	0.00%	3		3	0.00%
	助教	53	5	58	8.62%	57	3	60	5.00%	53	3	56	5.36%
	助手	4	1	5	20.00%	6	1	7	14.29%	5	2	7	28.57%
	教員数（総数）	120	8	128	6.25%	127	6	133	4.51%	125	7	132	5.30%
加齢医学研究所	教授	18	1	19	5.26%	19	2	21	9.52%	19	2	21	9.52%
	准教授（助教授）	10	1	11	9.09%	11	0	11	0.00%	9	0	9	0.00%
	講師	4		4	0.00%	3	0	3	0.00%	3	0	3	0.00%
	助教	21	5	26	19.23%	23	3	26	11.54%	20	2	22	9.09%
	助手			0	–			0	–			0	–
	教員数（総数）	53	7	60	11.67%	56	5	61	8.20%	51	4	55	7.27%

部局名		平成２５年５月１日現在 平成２５年度				平成２６年５月１日現在 平成２６年度				平成２７年５月１日現在 平成２７ 年度			
		男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率
流体科学研究所	教授	15		15	0.00%	15		15	0.00%	15		15	0.00%
	准教授（助教授）	9	1	10	10.00%	10	1	11	9.09%	11	1	12	8.33%
	講師	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	0	1	0.00%
	助教	14		14	0.00%	13		13	0.00%	13		13	0.00%
	助手			0	－			0	－			0	－
	教員数（総数）	39	2	41	4.88%	39	2	41	4.88%	40	1	41	2.44%
電気通信研究所	教授	24		24	0.00%	24		24	0.00%	22		22	0.00%
	准教授（助教授）	20		20	0.00%	18		18	0.00%	19		19	0.00%
	講師			0	－			0	－			0	－
	助教	23	1	24	4.17%	24	1	25	4.00%	21	1	22	4.55%
	助手			0	－			0	－			0	－
	教員数（総数）	67	1	68	1.47%	66	1	67	1.49%	62	1	63	1.59%
多元物質科学研究所	教授	42	1	43	2.33%	43	1	44	2.27%	41	1	42	2.38%
	准教授（助教授）	29		29	0.00%	32		32	0.00%	30		30	0.00%
	講師	4		4	0.00%	2		2	0.00%	4		4	0.00%
	助教	53	3	56	5.36%	58	3	61	4.92%	56	3	59	5.08%
	助手			0	－			0	－			0	－
	教員数（総数）	128	4	132	3.03%	135	4	139	2.88%	131	4	135	2.96%
災害科学国際研究所	教授	22	0	22	0.00%	23	0	23	0.00%	20	0	20	0.00%
	准教授（助教授）	10	2	12	16.67%	11	3	14	21.43%	12	3	15	20.00%
	講師	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%
	助教	17	5	22	22.73%	23	7	30	23.33%	20	7	27	25.93%
	助手	3	1	4	－	3	1	4	－	3	1	4	－
	教員数（総数）	53	9	62	14.52%	61	12	73	16.44%	56	12	68	17.65%
東北アジア研究センター	教授	11	0	11	0.00%	11	0	11	0.00%	10	0	10	0.00%
	准教授（助教授）	6	0	6	0.00%	6	0	6	0.00%	6	0	6	0.00%
	講師	0	0	0	－	0	0	0	－	0	0	0	－
	助教	5	1	6	16.67%	6	1	7	14.29%	6	1	7	14.29%
	助手	0	0	0	－	0	0	0	－	0	0	0	－
	教員数（総数）	22	1	23	4.35%	23	1	24	4.17%	22	1	23	4.35%
病院	教授	6	0	6	0.00%	4	0	4	0.00%	4	0	4	0.00%
	准教授（助教授）	12	4	16	25.00%	15	3	18	16.67%	15	3	18	16.67%
	講師	58	6	64	9.38%	54	6	60	10.00%	56	5	61	8.20%
	助教	197	37	234	15.81%	196	37	233	15.88%	177	43	220	19.55%
	助手	19	24	43	－	26	24	50	－	35	30	65	－
	教員数（総数）	292	71	363	19.56%	295	70	365	19.18%	287	81	368	22.01%
高度教養教育・学生支援機構	教授					21	2	23	8.70%	23	3	26	11.54%
	准教授（助教授）					15	4	19	21.05%	15	3	18	16.67%
	講師					11	3	14	21.43%	12	5	17	29.41%
	助教					14	3	17	17.65%	12	3	15	20.00%
	助手					1	5	6	83.33%	1	4	5	80.00%
	教員数（総数）					62	17	79	21.52%	63	18	81	22.22%
合計	教授	727	37	764	4.84%	773	40	813	4.92%	755	44	799	5.51%
	准教授（助教授）	579	60	639	9.39%	603	63	666	9.46%	613	65	678	9.59%
	講師	124	20	144	13.89%	121	23	144	15.97%	125	23	148	15.54%
	助教	857	154	1011	15.23%	879	155	1034	14.99%	849	162	1011	16.02%
	助手	58	59	117	50.43%	70	58	128	45.31%	71	66	137	48.18%
	教員数(助教・助手含む)	2345	330	2675	12.34%	2446	339	2785	12.17%	2413	360	2773	12.98%
	教員数(助手除く)	2287	271	2558	10.59%	2376	281	2657	10.58%	2342	294	2636	11.15%
	教員数(助教・助手除く)	1430	117	1547	7.56%	1497	126	1623	7.76%	1493	132	1625	8.12%
	学部生	8239	2764	11003	25.12%	8260	2796	11056	25.29%	8314	2812	11126	25.27%
	修士(博士前期)	3270	926	4196	22.07%	3206	900	4106	21.92%	3175	922	4097	22.50%
	博士(博士後期)	1997	680	2677	25.40%	1974	677	2651	25.54%	1926	652	2608	25.00%

※　毎年5/1に行われる学校基本調査より男女共同参画委員が在籍する部局のみ抜粋

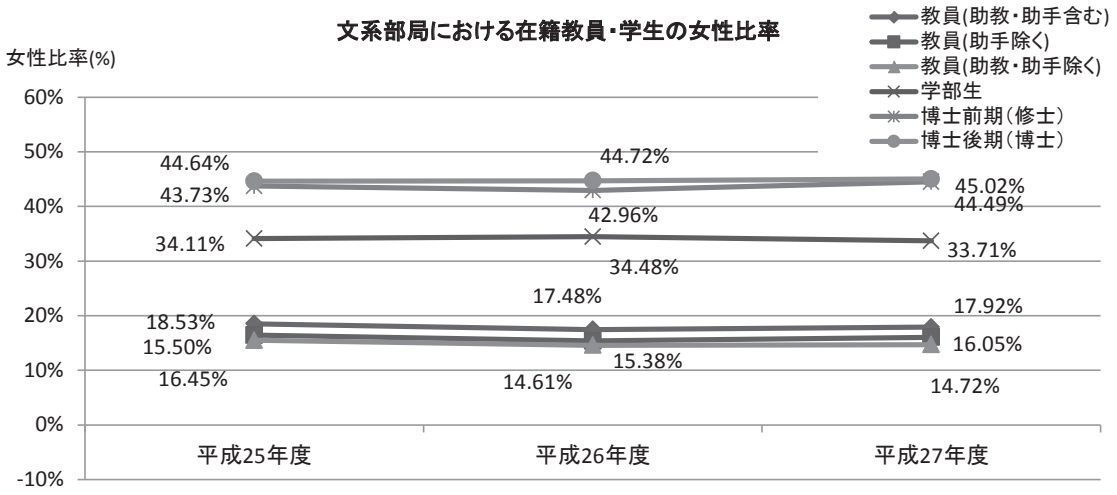
（参考）文系、自然科学系別女性比率

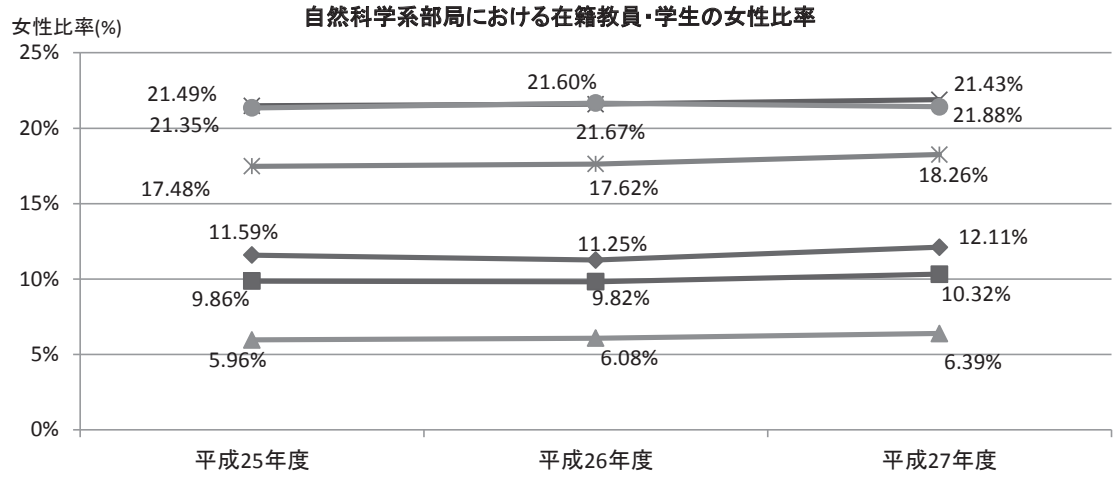
文系	教授	137	17	154	11.04%	142	16	158	10.13%	140	16	156	10.26%
	准教授（助教授）	88	24	112	21.43%	83	22	105	20.95%	85	21	106	19.81%
	講師	4	1	5	20.00%	3	1	4	25.00%	1	2	3	66.67%
	助教	25	8	33	24.24%	25	7	32	21.88%	25	9	34	26.47%
	助手	1	8	9	88.89%	2	8	10	80.00%	1	7	8	87.50%
	教員数(助教・助手含む)	255	58	313	18.53%	255	54	309	17.48%	252	55	307	17.92%
	教員数(助手除く)	254	50	304	16.45%	253	46	299	15.38%	251	48	299	16.05%
	教員数(助教・助手除く)	229	42	271	15.50%	228	39	267	14.61%	226	39	265	14.72%
	学部生	2084	1079	3163	34.11%	2077	1093	3170	34.48%	2114	1075	3189	33.71%
	修士(博士前期)	413	321	734	43.73%	397	299	696	42.96%	368	295	663	44.49%
	博士(博士後期)	258	208	466	44.64%	246	199	445	44.72%	232	190	422	45.02%
自然科学系	教授	579	20	599	3.34%	599	22	621	3.54%	582	25	607	4.12%
	准教授（助教授）	485	36	521	6.91%	499	37	536	6.90%	507	41	548	7.48%
	講師	120	19	139	13.67%	107	19	126	15.08%	112	16	128	12.50%
	助教	827	145	972	14.92%	834	144	978	14.72%	806	149	955	15.60%
	助手	57	51	108	47.22%	67	45	112	40.18%	69	55	124	44.35%
	教員数(助教・助手含む)	2068	271	2339	11.59%	2106	267	2373	11.25%	2076	286	2362	12.11%
	教員数(助手除く)	2011	220	2231	9.86%	2039	222	2261	9.82%	2007	231	2238	10.32%
	教員数(助教・助手除く)	1184	75	1259	5.96%	1205	78	1283	6.08%	1201	82	1283	6.39%
	学部生	6155	1685	7840	21.49%	6183	1703	7886	21.60%	6200	1737	7937	21.88%
	修士(博士前期)	2857	605	3462	17.48%	2809	601	3410	17.62%	2807	627	3434	18.26%
	博士(博士後期)	1739	472	2211	21.35%	1728	478	2206	21.67%	1694	462	2156	21.43%

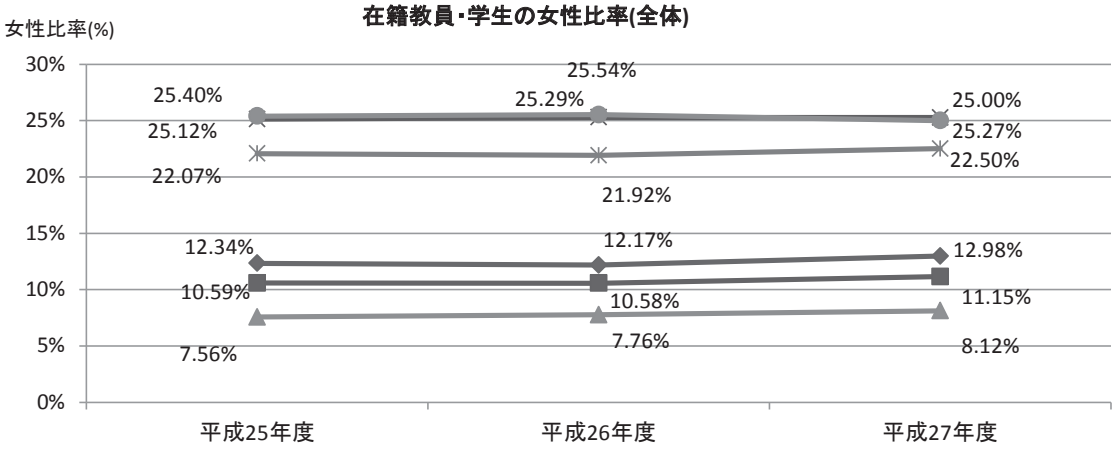
※文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、病院の合計値。

③主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率（グラフ）







※ 男女共同参画委員が所属する部局のみ抜粋

※ 文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、病院の合計値。

④主要部局における新規採用教員の女性比率（教授・准教授・講師・助教・助手）

部局名	平成25年度				平成26年度				平成27年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文学研究科・文学部	9	3	12	25.00%	3	1	4	25.00%	8	2	10	20.00%
教育学研究科・教育学部	2	1	3	33.33%	2	0	2	0.00%	3	0	3	0.00%
法学研究科・法学部	7	3	10	30.00%	5	1	6	16.67%	8	2	10	20.00%
経済学研究科・経済学部	5	4	9	44.44%	2	1	3	33.33%	10	2	12	16.67%
理学研究科・理学部	37	1	38	2.63%	16	0	16	0.00%	13	0	13	0.00%
医学系研究科・医学部	46	14	60	23.33%	46	9	55	16.36%	28	17	45	37.78%
歯学研究科・歯学部	11	3	14	21.43%	5	4	9	44.44%	8	6	14	42.86%
薬学研究科・薬学部	5	3	8	37.50%	8	2	10	20.00%	6	1	7	14.29%
工学研究科・工学部	35	2	37	5.41%	29	3	32	9.38%	26	2	28	7.14%
農学研究科・農学部	3	1	4	25.00%	3	0	3	0.00%	11	1	12	8.33%
国際文化研究科	0	0	0	−	0	0	0	−	2	0	2	0.00%
情報科学研究科	6	0	6	0.00%	8	2	10	20.00%	16	1	17	5.88%
生命科学研究科	9	2	11	18.18%	9	2	11	18.18%	8	2	10	20.00%
環境科学研究科	3	0	3	0.00%	4	1	5	20.00%	3	1	4	25.00%
医工学研究科	0	0	0	−	2	1	3	33.33%	3	0	3	0.00%
教育情報学研究部	1	0	1	0.00%	0	0	0	−	0	1	1	100.00%
金属材料研究所	17	1	18	5.56%	15	0	15	0.00%	14	3	17	17.65%
加齢医学研究所	8	2	10	20.00%	4	0	4	0.00%	9	2	11	18.18%
流体科学研究所	4	0	4	0.00%	3	0	3	0.00%	2	0	2	0.00%
電気通信研究所	3	1	4	25.00%	6	0	6	0.00%	2	1	3	33.33%
多元物質科学研究所	12	2	14	14.29%	6	1	7	14.29%	8	1	9	11.11%
災害科学国際研究所	11	2	13	15.38%	2	2	4	50.00%	5	1	6	16.67%
東北アジア研究センター	4	0	4	0.00%	0	0	0	−	1	0	1	0.00%
病院	50	16	66	24.24%	68	16	84	19.05%	57	24	81	29.63%
高度教養教育・学生支援機構					5	3	8	37.50%	6	2	8	25.00%
合計	288	61	349	17.48%	251	49	300	16.33%	257	72	329	21.88%

※　平成25年度、平成26年度は3月末の数、平成27年度は1月1日の数。男女共同参画委員が在籍する部局のみ抜粋。

（参考）文系、自然科学系別　女性比率（助手を除く）

部局名	平成25年度				平成26年度				平成27年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文系	24	11	35	31.43%	12	3	15	20.00%	31	7	38	18.42%
自然科学系	260	50	310	16.13%	234	43	277	15.52%	219	63	282	22.34%

※文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、病院の合計値。

東北大学男女共同参画委員会報告書（平成 27 年度）

【編集・発行】
東北大学男女共同参画委員会　行動指針対応・報告書作成 WG

【問い合わせ先】
東北大学総務企画部総務課総務係
〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1
TEL：022-217-4811